
白雪娘

空網 ハリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪娘

【Nコード】

N6186Y

【作者名】

空網 ハリ

【あらすじ】

17世紀ドイツのとある国、ランドシュテーヘン。

13歳の美少女シュネは同居人であるヴィルフリートと共に数々の事件に挑む。

童話をモチーフにした事件に、無表情コンビが挑むミステリー。

1章ごとの完結となっております。最近3章完結しました。

昔々、ドイツがおよそ300の君主国がひしめき合っている時代、小さな公国に一人の男と、娘が住んでおりました。

.....

「シュネ、いる？」

その日、いつものように掃除と洗濯、夕食の下ごしらえまで済ませようやく人心地ついたシュネは、小さく肩をすくめた。

勢いよく入ってきた少女、ネルケはノックもせずに入ってきたと思えば、シュネの手にある物に視線を向けた。

友人の視線に、シュネは何も言わずに立ち上がる。客人のために新たにお茶を淹れる必要があるからだ。ネルケがしょっちゅうここに来る理由の一つが、シュネの淹れた薬草茶^{クローターデー}なのだ。

立ち昇るカモミールの香りに一瞬相好を崩したものの、ネルケは「聞いてよ！」と身を乗り出した。

シュネは彼女に知られないよう、こっそりとため息をついた。

ネルケの「聞いてよ！」は、今から長い話が始まる合図である。そしてそれに対する拒否権はシュネには許されていない。

(今日の午後は読めると思ったのに)

まくし立てるネルケの話に適当に相槌を打ちながら、シュネは未練がましく昨日借りたばかりの医学書をに想いを馳せた。

それは、彼女の保護者、この家の主でもあるヴィルフリートが、その雇い主から借りたものである。

「シュネ、聞いてる？」

剣呑な光を帯び始めたネルケの瞳に、シュネは慌てて頷いてみせた。これ以上考え事をしていたら、ネルケの機嫌を著しく損ねてし

まう。

.....

本当にこの子は変わっている。

穏やかに相槌を打つシユネを見ながら、ネルケはこっそり心の中で呟いた。

自分よりも幼い13歳の小娘が、なぜこのように落ち着いた空気を醸し出せるのか、ネルケは常々不思議に思っている。その佇まいは一体どこから出てくるのだと、普段落ち着きがないと母親からお小言を食らうネルケとしては思わずにはいられない。

物静かで、それでいてどこか張り詰めたような緊張感さえ漂う様相を、彼女の漆黒の髪と、白い肌が一層際立たせている。そして、その顔。

通った鼻梁に、長い睫毛に縁取られた大きな黒い瞳、そして透き通るような白い肌。

あと2、3年したら、町一番の器量よしと呼ばれる自分をも軽く凌ぐだろうと、ネルケは公平な目で見ながら思った。今だって、飾り気の欠片もない簡素な服を着ていなければ、髪を無造作に垂らしていなければ、どこぞのお姫様と見まごう姿である。いや、みすばらしい恰好をしていても、漂う気品は、やはりただの町娘が持つには、些か不自然なように感じられた。

彼女の保護者（遠い親戚だと彼らは言うが、恐らく血の繋がりはないと、ネルケは密かに踏んでいる）ヴィルフリートが半年前、たった13歳の少女の手を引いて戻ってきた時は、一体何の冗談かと思っただけだ。

「それにしても、外套は残念でしたね。せつかく似合っていたのに」

突然の言葉に、ネルケは一瞬何の話をされたのかわからなかった

が、すぐに思い至った。

そもそも、自分が今日この家に来たのは、その件についてだったのだ。

「そうなのよ！ヘンゼルの奴、本当に憎たらしい！」

再び沸き起こった怒りに思わず立ち上がれば、ネルケの、綺麗に編まれた栗色の髪の手端がわずかに揺れた。ヘンゼルとは、同じ町に住む少年の名である。

「いいこと、シュネ。絶対にヘンゼルに近寄っては駄目。あいつ、段々と手に負えなくなってきた」

ネルケの心配は目の前にいる少女にある。目立つことを好まないシュネは、外に出る時は顔を覆うフードを被っているため町の人間のほとんどがその美しい素顔を知らないが、うっかり見られようものなら大事だ。確かに、彼女の保護者がヴィルフリートである以上、おおつぴらに手出しはされないだろうが、それでもわざわざ狼の群れに羊の姿を見せるべきではない。

「ヘンゼルは厄介よ。あいつ、裏では酷いことをするくせに、大人の前では真面目ない子を演じるから始末に負えないのよ。念のため、妹のグレーテルにも近づかないようにね」

グレーテルはヘンゼルの妹で、シュネよりも年下だ。一人ならただの頭の足りない子供だが、兄の後ろを、いつも付いて回っている。そして、そんなグレーテルを、ヘンゼルはこのほか可愛がっているのだ。

ネルケは力説するが、シュネはもともと、自分から町の誰かに必要以上に話しかけたりしない。地味な格好と顔を覆うフードが不気味に映るのか、町の人間も、シュネに話しかけようとはしない。ただし、対応が丁寧なのは、ひとえに町の警吏隊の隊長を務めるヴィルフリートの存在ゆえだろう。

鉄面皮と呼ばれる彼の姿を思い浮かべ、ネルケはちらりとシュネを見やる。

ヴィルフリート・ヴィルトは町で一番の剣士だ。寡黙だが、任務

には忠実であり、誰に対する態度も丁寧で礼儀正しい。これでもう少し愛想があれば、それなりに町の娘たちに人気があっただろう。

実際、彼はよくよく見れば割と端正な顔立ちをしていたが、大きく屈強な体と鋭い目つき、それに何が起きても眉一つ動かない、血の通った人間か疑わしくなるあの姿が、人々を遠ざけるのだ。

無表情のままカモミール茶を飲んでいるシュネを見ながら、ネルケは思わずにはいらなかった。この不愛想な少女と、あの鉄面皮は一緒に暮らしているのだ。二人きりの時は、一体どんな会話があるというのだろう。

.....

「ヘンゼルか」

「ええ。泥を投げ付けられたため、ネルケの外套は汚れてしまっただって」

シュネの作ったスープを一口飲んだところで、ヴィルフリートの手が止まった。

（あ、おいしいんだな）

特に表情に変化はなかったが、ヴィルフリートが感心していることは、何となく伝わった。それがわかるまで、結構な時間が必要だった。この人はきつと、表情筋を生まれる時に母親の胎内のどこかに忘れてしまったのだろう。自分も人のことは言えないが。

「あの少年についてはあまり聞かないな」

「ネルケの話では、大人の前では態度が違うそうです」
「なるほど」

納得したようにヴィルフリートは頷いた。思い当たることはあった。彼は自分の感情を出すことは不得手だが、他人の感情の機微に疎いわけではけしてない。

ヘンゼルは確か今年で15歳。表と裏の顔を使い分ける器用さは、

長所にも短所にもなりうる。ましてやそれが、力つけたものの、まだまだ思慮の足りない少年であれば。

「おかげで今日は本を読めずじまいでした。せつかく、宰相様からお借りした本だったのに」

「次に俺がハインリヒ様の元に伺うのはまだ先だ。急ぐことはない」

ヴィルフリートの身分は、一介の警吏隊長である。だが、それとはもう一つ、彼には役職があった。

警吏の仕事をこなす一方、彼はこの国、ランドシュテーヘン公国の宰相を務めるグリューン家にも仕える身であった。と言っても、彼が宰相ハインリヒのために働いている姿を、シュネはあまり見たことがない。ただ、定期的に屋敷に赴き、何かしらの報告はしているようだ。その辺りのことを、彼はシュネにあまり語りたがらない。この町に來た時一度だけ、彼に連れられ宰相の館に行ったことはある。その時、一言二言話ただけで、ハインリヒはシュネのことをいたく気に入ったらしく、シュネに館の図書室への出入りを許してくれたのだ。

その後も、ヴィルフリートを介して本を貸してくれることがある。ヴィルフリート自身はそのことを快く思っていないらしく、それ以降シュネが館に行くことはなかった。

「どうぞ」

食事をあらかた終えたところで、ヴィルフリートの前にシュネがカップを差し出した。中には、カモミール茶が湯気を立てている。林檎に似た香りが優しく立ち昇る。宰相の館で緑茶を口にしたことはある。この時代のお茶と言えば、紅茶より緑茶の方が主流だった。しかし、ヴィルフリートはそれよりも遥かに、この少女が淹れてくれたの方が彼の好みだった。

カモミールを摘み、花を乾燥させて煮出しているのだろうか、気にかかることが一つある。

「あまり、薬草の知識は人に見せるなよ」

心得ているのか、シュネは頷き、理由を尋ねることをしなかった。魔女狩りは昔ほど無体なものではなくなったが、薬草の知識があるだけでも、魔女^{ヘクセ}呼ばわりする人間がいけないわけではない。ことに、常日頃からフードを目深に被り、人付き合いをしない娘であれば、特に。

最近魔女という単語をあまり耳にしないのは、一つはこの国の公爵の方針によるものだ。魔女狩りという行為がどうこうというより、現実主義者である彼は、ろくな証拠もなく曖昧な言葉だけで全てを片付けるあのやり方が気に入らないのだ。それは、あの宰相の影響が強いのだろう。

そして、もう一つの理由は戦のせいである。ドイツの至る所で起こり、休み、また繰り返すこの長い戦のせいで、人々はそんな曖昧なものに目を向ける暇などないのである。幸いこの辺りは比較的平和ではあるが、近くのマゲデブルクが20年ほど前、傭兵たちの略奪によって大きな打撃を受けたことは、未だ人々の記憶に新しい。

「大丈夫です。私がこの町でお茶を淹れるのは、ヴィルとネルケだけです。ネルケは、私が薬草の知識を持つことを知りません」

しかし、シュネの言葉は、翌日覆されることになる。

1 (後書き)

時代は17世紀半ばドイツ。

ランドシュテールは架空の国です。

その日、シュネはマージヨラムを摘みに少しだけ遠出をしていた。町はずれにある、森の入口である。

フードを目深にかぶり、保護者のヴィルフリートに言われたように、町の外にはけして出ない。

こんな時、一度だけ行ったことのある宰相の館の中庭をつい思い出す。

あの中庭は見事だった。ヴィルフリートに連れられたシュネは、主に報告をしに行くヴィルフリートに言われ、この中庭で一人花々を眺めていた。季節に応じた色とりどりの花は、奥方の好みなのか「見事ですな」

最初に見た時、シュネは思わず眩き、庭師と思しき男がその声に顔を上げた。

「そうだろう、嬢ちゃんはその花が好きか？よければ少し分けてやる」

「お気持ちはありがたいのですが、私にはもったいなさすぎます」シュネの正直な感想を、謙遜と受け取ったのか、男は笑みを浮かべながら首を振った。よく見ると、まだ若い。帽子を被っているために顔はよく見えないが、ヴィルフリートと同じくらい、せいぜい30前後というところだろう。

（おや）

シュネはこの時初めて、まじまじと庭師の顔を見た。

「どうかしたかね？嬢ちゃん」

彼の顔も、そして次に視線を移したその腕も、シャツからのぞく

肌も、庭師の物ではない。毎日炎天下で働く者の物ではない白さだった。そして、粗野な言葉遣いではあったが、彼の紡ぐ言葉は訛りがなく、耳に心地いい。その仕草も、物腰も、どこか気品がある。訝しげな自分をどこか面白そうに見つめる男に、ふと保護者の男の言葉が甦った。

「ハインリヒ様は、時々思いがけないことをされるから」

「・・・ハインリヒ様？」

それは、確信ではなく、ただ思わず出た言葉だったが、目の前の彼はその緑の目を丸くし、「ほう」と感嘆したように声を出した。

「こんなに早く見破られたのは初めてだ。お前がヴィルフリートが拾ったという子供か。名前は何という、年はいくつだ、何ができる」

高圧的な言い方ではなかったが、若い娘に無遠慮に尋ね、それに対する回答が得られることを至極当然の物と信じて疑わない姿勢は、いかにも貴族特有の尊大さだと、シュネはこっそり思った。

「・・・シュネです。年は13になったばかりです。・・・出来ることなど、特に何も」

薬草の知識がいくつかあるが、それは母親から教えられていたものの程度にすぎない。一国の宰相のために何かしてやれるような大層なものではないので、シュネはそれだけ言った。

「^雪シュネか」

そっけないシュネの返事に、面白そうに目を細めながら、ハインリヒは再び庭の花に目をやった。

「先程の答えはまだ聞いていなかったな。シュネはどの花が好きだ」

「・・・その中では、マリーゴールドでしょうか」

足元に咲く小さな花に目をやり、ハインリヒはもう一度「ほう」と、今度は面白そうに呟いた。

「マグノリアでも百合でもダリアでも、大輪のバラでもなく、地べたに咲く、この小さな花が」

確かに、中庭にある花は華やかなものが多かった。種類豊富なバラを中心に、色とりどりの花が咲いている。彼が疑問に思うのも、無理はないかもしれない。

「理由を訊いても？」

「・・・花弁を、干してお茶にします」

「・・・うまいか？」

「くせがなくさっぱりしてます」

ふむ、と頷いたハインリヒは、その後、なぜかシュネを気に入って、図書館への出入りを許したり、来た時は自分の子供たちの遊び相手にとまで言いだしたのだ。

ただ、そのことを知ったヴィルフリートは、シュネをなかなか館に連れて行こうとはしなかったため、それ以降シュネがああ館に入りすることはまだない。

・・・

人がいる。しかも、見覚えのない。

帰り道、帰路につこうとするシュネは立ち止まり、目の前でせわしなく動く黒い外套をまじまじと見つめた。

その外套を身につけている人物は、やはりシュネの知らない顔であった。しかし彼女がさして警戒をしなかったのは、その相手が女だったからだ。しかも、どうやら歩くのが不自由らしい。杖を持っている様子がないので、今くじいてしまったのだろう。

「大丈夫ですか」

そつと声をかけると、相手は驚いたように一瞬身動きし、恐る恐るといった風に振り向き、シュネの瞳を見て、微かに落胆した表情を見せた。

（誰か探していたのだろうか）

女の様子に首を傾げつつも、シュネは彼女に近寄った。こういう時、ネルケのように人懐こい笑みが浮かべられたらいいのだけれど、詮無いことを考えながら。

ハンナと名乗った女は、シュネの差し出したマジヨラムのお茶を、礼を言いながら受け取った。年の頃は40代後半といったところかだが、ダークブラウンの髪はしっかり手入れされているのか艶があり、髪と同じ色の瞳を縁取る睫毛は長い。さつきは気付かなかったが、こうしてみると、庶民にはない気品と美しさがあった。

彼女の外套は色こそ地味だが、良い素材を使っていることは、シュネの目に見ても明らかだ。留め金の部分は金縁に囲まれたルビーで、傷一つない。仕草もどこか洗練されているし、彼女はどこかの貴族か、富豪の奥方なのかもしれない。

「もうすぐ、家の者が帰ってきますので。その時は、お送りします」
ヴィルフリートはあれでなかなか人がいい。自分や自分に属するもの、この場合はシュネや町民、彼の主人であるハインリヒに危害を加える者には一切の容赦がないが、無力な者には基本的に親切だ。悲しいことに、その事実を知っている者は少ないのだが。

「おいしい」

一口含み、ハンナは相好を崩した。それは、シュネが初めて見た彼女の笑顔だった。その後、ヴィルフリートが帰るまでの間、とりとめもない話をする。どうやら彼女は、これでなかなか話し好きなようだ。

ハンナはこの町の住民ではない。だが、町の端にある森の小屋で寝泊まりしていると言う。

「最近来たばかりだけど、少ししたら戻るつもりなの。あの小屋は、私が子供時代住んでいた家」

「昔の？」

「20年ほど前結婚する時に、他の国に」

そう言った彼女は、なぜか何かに耐えるように、きゅつと口をすぼめた。

「なるほど、里帰りですか」

シユネが思わず言うところ、彼女は寂しげに首を振った。

「いいえ。私は里帰りなんかできる立場じゃないの。だって、20年前私は夫と幼い娘を捨てて他の男の元へ行つたのだもの」

ハンナの話は、それほど難しくはなかった。

20年前、彼女は貧しいながらも夫と娘とこの町で平穩に暮らしていた。そんなある日、ハンナはこの町にたまたま通りがかった貴族の目に止まり、互いに恋に落ち、迷った挙句彼について行つたらしい。

その貴族は妻がいたが、ハンナに小さい屋敷を買い与え、足繁く通っていた。やがて彼女は子を生み、何不自由なく幸せな生活を手に入れた。

男の妻に子はなく、また、彼はハンナを得た後は愛人を作ろうとしなかったため、彼女が生んだ男児が嫡男となった。その後も幸福な日々は続いた。

その後、最近になって彼が病気でこの世を去り、息子がしっかりと跡を継いだそんな時、ふとかつて自分が捨てた夫と娘が気になつたらしい。

名乗り出る気はなかった。そもそも、行く気もなかった。行つたところで自分には何も言う権利も資格もない。だが、彼女の前の夫はあの後すぐに亡くなり、娘は若くして町の男の元へ嫁ぎ、今は貧困に喘いでいると知り、何か自分にできることがあればと、この町まで来てしまったのだ。

彼女がしばらくの宿にしている小屋は、彼女が幼いころ、まだ結

婚する前に住んでいた小屋だ。

「娘さんとは？」

シュネが尋ねると、ハンナは力なく首を振った。

「まだ会ってないわ。会う勇気がなかなか出なくて……。もうじき迎えが来るから急がなくてはいけないのだけれど」

「迎えますか」

考えたら、彼女のような立場の人間が、一人でこんな所まで来るのは、本来ならあり得ない。

その時、玄関から音が聞こえてきた。ヴィルフリートが帰ってきたのだ。

.....

「俺は、以前あまり人に薬草の知識を見せないように言っただけがな」

ハンナを送り届けた後、帰ってきたヴィルフリートはわずかに批難するように呟いた。

「いけませんでしたか」

シュネとて、彼が言ったことは覚えていた。だが、足をくじき体が冷えてしまった彼女を前にしてつい忘れてしまったのだ。

「いや、悪くはないが」

ヴィルフリートとて、シュネの小さな親切に目くじらを立てる気はない。ただ、どう言っているのかわからないだけだ。普段剣を振ってばかりいると、こういう時気の利いた言葉が出てこないから困る。

「ハンナさん、娘さんと会うことができるでしょうか」

20年前のハンナの行動をどう思うかと問われれば、やはり無責

任だと思っし、その彼女が今更娘のために何かする権利などないが、それでも、親としての情は彼女をこの町へ呼んだのだ。

貧困に苦しんでいる娘とやらが、母親の差し出した手をとればいいのだがと、シュネは他人事ながら思うのだった。

身元の分からない女の焼死体が発見されたのは、その次の日のことだった。

発見されたのは、町はずれの森の入口にある、小さな小屋だった。

その日、ヴィルフリートは朝一番に町はずれの小屋から女の焼死体が発見されたとの報告を受けた。

厄介な事件はいつだって自分たちの部署である一番隊に回ってくる。

そついう部署なのだから仕方がないと言えばそれまでだが、戦慣れしていない自分たちには、この光景はいささか厳しいものがある。副隊長のレオはそう思った。

隊長ヴィルフリートの補佐を務める彼は、ちらりと上司の顔を見上げた。眉一つ動かさず目の前の凄惨な光景を観察する彼は、やはりまともな神経の持ち主とは到底思えなかった。

新入りのヨハンなど、部屋に入った瞬間顔を背けたというのに。無理もない、彼はまだ15になったばかりだ。

レオは酸鼻を極めるこの現場で、一人、臆面もなく遺体に近づく上司に尊敬と畏怖が混じった複雑な視線を向けた。他の同僚も、皆似たように上司の背中を見つめている。

しかし、考えてみれば自分たちが平和に慣れているからでもあるのだ。戦や小競り合いが頻繁に起こる時代ではあったが、このランドシュテーヘンは、その中でも比較的平穏な日常が続いていた。

領主と、その右腕を務める宰相の手腕で、治安維持はかなり徹底されている。自分たちの組織がこつも秩序を守っているのも、宰相であるハインリヒからの多額の援助があるからだ。

「何かありましたか？」

熱心に焼けただれた遺体を眺める上司に、レオはうんざり気味に声をかけた。真っ黒に焦げ、性別も年齢も服装も、この人物を示す

ものが何もわからない焼死体をまじまじと見ても、何かがわかることは到底思えなかったからだ。

その小屋には、小さな竈があった。目の前にある黒こげは、昨日この竈を使おうとしたらしい。

「竈を使おうとして足を滑らせ、鉄の扉が閉まった・・・じゃないですかね」

できるだけ穏便な方向であって欲しいせいか、ヨハンがおずおずと口に出した。

「違うな」

そんな彼のささやかな希望をあつさり打ち砕いたのは、やはり上司だった。

「門がかけられていたそうだ」

「な、何のために・・・」

思わずヨハンが呟く。この竈はパンを焼くためのものはずだ。

人を焼く用途で使う物ではない。

「見てみる、扉の内側に傷がある。それも、この死体の目の前だけに、やけにたくさん。こっちの傷に比べて、どう見ても新しい。相当引つ掻いたんだろうな。つまり、この遺体は生きながら、火をおこした竈に閉じ込められたということだ」

そんなこと、淡々と語らないでくれ。

レオは思わず胸の内で呟いた。そして再び目の前の焼死体に顔を向ける。焼かれて死ぬのは苦しいだろう。彼は、昔一度だけ火あぶりを見たことがある。泣き叫びながら焼かれたのは、夫を亡くしたばかりの憐れな女だった。痛々しい悲鳴を上げながら炎に包まれた彼女が魔女だとは、彼には今でも思えない。

あれ以来、この地では魔女裁判はなかったと思う。疑いをかけられた者はいても、無罪放免だった気がする。この時代、魔女狩り自体がすでに衰退の傾向にあったのと、ランドシュテーヘンの領主が、魔女狩り自体に懐疑的だったからだ。

火あぶりは、苦痛の時間が長い。彼の上司は、内側にいくつもひ

肌寒いこの季節は日が暮れるのも早い。ヴィルフリートはランタンにある蠟燭の長さを確認しつつ、何度か後ろのハンナを見やった。こつと暗いと、簡単にはぐれてしまっただろう。だが、彼女はしっかりと彼について来ていた。

彼女の足の具合は、時間が経つにつれだいぶましになっていったらしい。

シュネが作った軟膏を塗った湿布の威力を、誰よりも知っているのはヴィルフリートである。

「そういえば、今使われている小屋は20年も使っていないと聞いたが」

今夜は冷える。ましてや新月の夜だ。火を確保していないと死活問題である。

「大丈夫です。ヤーコブさん。あの小屋の管理をされている方が、定期的に見てくれていたそうです。あの小屋、たまに旅人に貸していたりしていたそうです。私も旅人として借りましたから。それで得た金でなしの宿賃の一部は娘のもとへ行っているそうです。・・・雀の涙ほどですけど」

そう言つてハンナは立ち止まり、ヴィルフリートに向けて微笑んだ。柔らかな笑みだったが、有無を言わせぬ圧力を感じさせるものだった。

「お見送り、ここまで結構です。ありがとうございました」

警戒されているのかもしれない。ハンナは40代らしいが、手入れがされているのか、街の同年代の女性より若く見える。まだまだ十分美しい彼女からすれば、ヴィルフリートのような屈強な男は警戒すべき対象なのかもしれない。

だからヴィルフリートも黙って頷き、そのまま軽く頭を下げ、踵を返した。

「シュネさんにもよろしく」

歩きだすヴィルフリートの背中に、おっとりとした声がかけられた。それに対する返事として片手を軽く挙げ、彼は振り返ることを

しなかった。

「・・・以上だ」

「まあ、誰も隊長を疑ったりはしませんけどね」

レオが笑った。それにしてもこの上司は、あの状況でも表情一つ変えない。もし、自分があんな立場になれば多少なりとも動揺しただろう。なにしろ、殺人犯と疑われるかもしれないのだ。

「何にしる物盗りの犯行だと思いますよ。さつきから探しています
が、金品の類が何一つない。まあ、もともとそうあったようにも見
えませんが、旅人なら路銀くらいは多少あるはずですね」

小屋の内部を調べていたヨハンが戻ってきた。家中の壺や樽をひ
っくり返しても、何一つ出てこない。もともと飾り気のない簡素な
小屋だったが、生活の匂いが何一つないのは、物品も食料もないか
らだ。

「パン一つないですよ。水甕だけは無事でしたが」

「・・・この辺りは水が豊富だからな」

ランドシュテーヘンの近隣を流れるザーレ川はヨーロッパでも有
数の国際河川であるエルベ川の支流だ。

「しかしまずいな」

ヴィルフリートは、寂しげな室内を見渡し呟いた。

「彼女は市井の出とはいえ名のある貴族の嫡女の母親。このままう
やむやにはできないだろう」

彼女の話では、近いうちに迎えが来るはずだ。何としても、この
悲劇を起こした犯人を捕まえ、差し出さなくては、厄介なことにな
りそうだ。

.....

その日、シユネはフードを目深に被り、市場に出ていた。

街の住人はよそ者であるシユネにあまりいい顔はしていないが、それでも彼女は警吏隊長であるヴィルフリートが後見している少女である。街で起こるいざこざを解決する彼の不興を買うのは得策ではない。そのため、彼らは表面上はシユネに対して丁寧だった。

「あら、シユネ」

シユネに気付いたのはネルケだった。いつもの外套ではなく、地味で色あせたマントを着こんでいる。

「この前ヘンゼルに外套をやられたでしょう。仕方がないから母さんのお古を借りてるのよ」

忌々しそうに言いながら、ネルケは栗色の髪を払った。その手には、バスケットが提げられている。

「ワインとケーキ？」

この場合のケーキとは、どちらかというクッキーに近い、レーブクーヘンと呼ばれる焼き菓子だ。

「おばあさんのところにお見舞い。どうも今具合が良くないらしいのよね」

「それなら、そのうち私もお見舞いにケーキを焼きましょうか」

ネルケはにつこりと笑った。シユネの焼いたケーキは格別だ。材料は簡素だが、香辛料やハーブが上手く配合されていて、お気に入りなのだ。

「そうね。その時はよろしく・・・あ」

笑顔だったネルケがある一点を見つけた瞬間顔を曇らせたので、シユネは何事かと彼女の視線をそのまま追った。そこにいたのは、母親に連れられ歩いている少年と少女の姿だった。

「ヘンゼルとグレーテル？」

「あいつよ、あいつがあたしの外套を駄目にしたんだから」

ヘンゼルはシュネより少し年下の少年であり、名前くらいは知っている。直接話したことはないけれど。大人しく、親にも従順な少年だったと記憶している。また、いつも彼について回る妹のグレーテルの面倒をよく見ていた。

妹への態度に優しい少年だと思われがちだが、一度見た彼の瞳には感情めいたものが何もなく、わずかに暗い翳りだけがあつたのを、シュネは覚えている。

ネルケが外套を駄目にされたというのも、真実なのだろう。

「それにしても市場に来るなんて、あの貧乏一家が珍しいわね」

良く言えば正直、悪く言えば無神経なネルケの発言が、彼にそうさせる引き金になったのだと思うが。

おそらく、彼は無意味に攻撃することはしない。

ネルケは村一番の美少女として人気がある。そんな彼女の機嫌を損ねるのは、この村で暮らすにはあまり得策ではない。

ヘンゼルはメリットもないのにリスクを冒すタイプではないと思う。ネルケにしたのは、今後余計なことを言わせないための牽制なのだろう。

その時、シュネの黒い瞳が大きく見開かれた。

「シュネ？」

「・・・すみません。急ぐので私はこれで」

それだけ言うと、シュネはくるりと背を向け、風のように駆けだした。普段家に閉じこもってばかりの内向的な姿からは想像もつかないほどその動きは軽やかで、実に機敏だった。

「シュネ!？」

走り出したシュネは、ネルケの慌てる声をもう聞いてはいなかった。

.....

・・・・・・・・・・

「うゝ……。まだ気持ち悪い……。」

今日嗅いだあの嫌な匂いは、未だ記憶に残っている。ひよつとしたら、髪や服についているのかもしれない。

ハンスは本日3度の洗顔を終えた後、くんと自分の衣服に鼻を寄せた。

本当に、今日の出来事は衝撃だった。焼いた肉の匂いは大好きだが、それは羊や鶏に限る。

同僚はそんな彼を笑ったが、彼はまだ15歳なのだ。

貧しい農家の、しかも三男坊として生まれた彼は、13になる頃には家を出て、自分で食いぶちを探すしかなかった。

ハンスのような境遇の人間は少なくない。家もなく職を探す彼らにとって、一番効率がいいのは傭兵となることだが、貧相なハンスは誰が見ても見劣りした。もともと争い事には向いていないと、誰よりも彼は自覚している。とはいえ野良仕事以外できるものがない。そんな時、父の知り合いが警吏隊の知り合いという伝手を持っていたために、紹介してもらったのだ。その相手こそ、あの凄惨な現場でも眉一つ動かさない鉄の男ヴィルフリートだった。

「あの人はいい人だよ。ちつと不愛想なところはあるが」

紹介してくれた男はそう言った。確かにそれは認めよう。おまけに、人の才覚を見抜く勘も持ち合わせていた。

彼は紹介されたハンスが争い事には不向きだと瞬時に見抜いた。鍛えれば多少は実力もつくし、実際日々の鍛錬は確実に彼を強くした。だが、彼はこの仕事に本質的に向いていない。なぜなら、もとも優しい彼は、こういった血生臭いことが苦手なのだ。

「問題ない。何も、荒事ばかりじゃないからな、この仕事は」

警吏の仕事は意外と多様なのだ。報告書の作成は毎回しなくてはいけないし、組合内での揉め事ツントの調停から、護衛もある。商人の中

には税を誤魔化す者もいる。それらを見抜き取り立てることだつてある。

ヴィルフリートはハンスにさまざまな教育を施すよう指示した。字の書き取りや簡単な計算、そして商業の仕組みまでも。そっちは性に合っているのか、彼は何でもすぐに覚えた。ひよつとしたら、自分は商人の方が向いているのではないかと思つたくらいである。今はまだ見習いとしてこつやつて現場にもついて行ったりするが、そのうち書類仕事を回されるだろう。それでも、日々の鍛錬は強制されているが。

この後の地獄のしごきを思い身震いした時、目の前に暗い色の外套を羽織り、フードを目深に被つた小さな姿が目に入った。

「・・・何か？」

子供だろうかと思ひハンスは首を傾げた。こんなところに子供が一体何の用だ。

「すみ、ません、実は・・・」

予想に反して、その人物の声は涼やかな少女のものだった。今まで走っていたからか、息は上がり、言葉はとぎれとぎれだ。

「一番隊の、ヴィルフリートを・・・」

その時、強めの風が吹き、彼女のフードをめくつた。

「あつ」

彼女の方も油断していたのだろう。フードはあっけなくめくりあがつた。

ハンスは、思わずぎよつとした。

黒檀のように黒い髪、雪のように白い肌の世にも美しい少女が、血のように赤く頬を紅潮させて立ったままハンスを真っ直ぐに見つめていたから。

ヘンゼルは物心つく前から、自分がそう歓迎されているわけではないことを知っていた。

自分の家が今現在、街でもかなり貧しいことは、よくわかっていた。

父はしがない樵で、1年ほど前から腰を痛めて以来、仕事が大幅に減った。そうなるとう家にはその日のパンどころか、食べ物自体がなくなることはしょっちゅうという有様だ。

この時代のドイツは荒れ果て、食料は慢性的に不足していた。

そんな危機的状況から救い出す作物ジャガイモが、プロイセン王フリードリヒ2世の普及により人々の飢えを満たすまでには、実にあと100年の歳月を必要とする。

そんな中、母は自分を精いっぱい育ててくれたと思う。

若くして、年の離れた父と結婚した母は、ヘンゼルの目から見ても若く美しかった。

ヘンゼルが3歳の時、妹のグレーテルが生まれた。

正直に言って、何の感慨も湧かなかった。ただ、母親が慈愛に満ちた青い瞳を向けていたので、それが、歓迎されている存在なのだということはわかった。

だから、ヘンゼルは妹を可愛がり、慈しみ、時として身を呈して

守った。

そうすることが、母の好意を多少でも自分に向けさせる術だと悟っていたからだ。

妹は苦勞せずとも母の愛を勝ち取ることができる。母譲りの金髪は輝き、青い瞳はヘンゼルのヘーゼルの瞳と違って澄んで、屈託がない。グレーテルは、ヘンゼルが持っていないものを、生まれながらにして持っていた。

母の結婚は望まれたものではなかった。貧困から逃れるために慌ただしく嫁いだのに、それでもやっぱり貧困から逃れられない母は、ヘンゼルの目から見ても不幸だった。

だから、あの晩母がこっそり父に囁いた言葉も、仕方がないと思うのだ。

「ねえ、あんた。このままじゃ一家４人飢え死にだよ。だから・・

[illegible]

「他に何か見つかったか？」

ヴィルフリートは嘆息しながら部下に声をかけた。

その後、もう一度小屋を探した時に、彼は一本の長い髪が床に落ちていたのを見つけたのだ。

その髪は、陽の光を受けて、金色に輝いていた。

ヴィルフリートは表情一つ動かさずに席についていた。だが、彼が落ち着いていたわけではない。心の内では頭を抱えていた。ただ、顔に出ていないだけで。

「なぜあんな殺し方・・・」

ただ金品が目的で殺すのなら、他にも確実に手っ取り早い殺し方がある。焼死は時間がかかる。

扉を閉めていたにしても、ひっきりなしに聞こえるであろう断末魔が、偶然近くにいた誰の耳に入らないとも限らない。

そんなことをせずとも、銃でも、刃物でも、それこそ紐の一本でもあれば事足りるはずだ。

「恨みによるものでは？」

隣にいたレオがそつと口を挟んだ。彼も、あの女性が何の目的でここに来たか知っている。

この村とは20年袂を分かつていた彼女に恨みを抱く人物。たった一人いるじゃないか。

「娘、か」

彼女が20年前捨てたという娘。その後の娘の人生は、それほど幸せなものではなかったらしい。若くして結婚したというのも、もしかしたらそうすることでしか身を守る術がなかったのかもしれない。

い。

この時代、後ろ盾一つない女性が生きて行くのは至難の業だ。

「ヴィル、大変です」

突然かけられた聞き慣れた声に、ヴィルフリートは驚いて振り返った。それでも、傍にいたレオには彼が動揺していることが伝わらないほど表情は動かなかったが。

「シュネ、なぜここにいる」

そこにいたのは、彼の同居人であるシュネだった。暗い色の外套を着込み、フードで顔を隠してはいるのはまだいい。だが、その横にいるヨハンが、なぜそんな顔を火照らせて目を泳がせているのか。

それも手伝って、同僚たちは、ヴィルフリートの親戚だということの小さな少女に興味津々といった様子でチラチラ窺っている

「今はそれどころじゃありません」

きつぱりとした口調で言い、シュネはヴィルフリートの腕を引っ張った。

「お、おい」

いつにない強引な行動に、つい彼はそのまま従った。しかし、同僚の好奇心を押さえきれない顔と、今では自分の従者的なポジションにいるヨハンの落ち着かない態度が気になった。

「ハンナさんの身に、何かあったものではありませんか」

「・・・なぜそう思う」

シユネは、時折恐ろしく鋭い時がある。しかし、保護者の身の上としては13の子供に、「昨日知り合った女は何者かに焼き殺された」などとは、あまり口にしたくない。

「今日一日街が騒がしく、警吏の方々がたくさん外に出られていました」

「別に普通だ」

「先程の方が、大きな事件があったと。あの表情から察するに、痛ましい事件だったのだと思いました」

（ヨハンめ）

口の軽い部下を、思わず呪った。何でも顔に出るのは人間として好ましく映るかもしれないが、この仕事においては欠点でしかない。

「ヘンゼルの母親が、ハンナの持っていたルビーを持っていました。おそらくは、売るつもりでしょう」

ヘンゼルの母親。

「あの小屋の使用賃は彼女の子供の元へ行くんでしたよね」

シュネの冷静な声に、ヴィルフリートの顔が曇る。あまり想像はしたくなかったが。

ハンナがよそ者であり、一人であり、旅の途中だと知っている者は、限られている。それはヴィルフリートにもわかっていた。

だが。

「彼女は、どんな殺され方をしたのですか」

ここで黙っていることもできた。だが、おそらく彼女は近いうちに知るだろう。

警吏と名がついてはいるが、ほとんどは街の中で腕が多少立つだけの者がほとんどだ。守秘義務などという言葉は考えないし、そもそも思いつきもしない。

誰かが家族に今日の出来事を話し、その家族から他の人間へと話に行くだろう。

娯楽の少ない街で、しかも被害者は街の人間ではない「よそ者」なのだ。

「竈、ですか」

シュネは納得したように何度か頷いた。その顔は冷静そのものだ。保護者であるヴィルフリートとしては、13歳の彼女が恐ろしうに身を竦ませたりしないことに、複雑な思いを抱いていたが。

「しかし、これで証拠も揃ったな。早速、あの女を……」

「ヴィル、何を言っているんです」

連行する、と言いかけた彼を、彼女が止める。

「ハンナを殺したのは、あの人じゃありません。もしあの人ならば、他の殺し方をしている」

「あれは恨みからでは……」

「恨みじゃありません。犯人はハンナ以上に非力だから、ああいう殺し方しかできなかっただけです。理由はあつたけど、彼女を恨む理由はないのです、彼らには」

「彼ら？」

きつぱりとした口調で、シュネが告げた。

「彼女を殺したのは、ヘンゼルとグレーテルです」

5 (前書き)

お気に入りありがとうございます！

「あらあら可愛い子たちね」

家の前でうずくまっている子供たちに、ハンナはにっこりと笑いかけた。

物音がすると思いドアを開けると、そこには二人の子供がいた。痩せ細り、目だけが大きくこちらを見ている。

「兄妹？」

尋ねると、兄であろう少年がこくと頷いた。微笑み返してこなかったことは気にならなかった。

こんな夜に森の中にいたということは、この子供たちは親に捨てられたのだ。

「ちょうどよかった」

彼女は微笑み、二人を招き入れた。

「今、ちょうどパンを焼こうとしていたの。さあ、ごちそうするから入って」

無言で入ってくる二人に、彼女は更に口角を上げた。

.....

「ヘンゼルとグレーテル？冗談だろう。あの二人はまだ子供だ」

兄のヘンゼルが10歳かそこらだったと思う。なぜ知っているかという、彼らの母親が、たまに警吏隊の支給服を洗濯しにくるからだ。

たまに、あの二人も母親の手伝いをしている。

「あんな残酷な殺し方、子供に・・・」

「子供だからあの殺し方なのです。彼女がパンを焼くか何かのために竈に火をおこした。その時、当然彼女は火が付いているか確認します。それこそ、あの二人が彼女を確実に殺せる唯一の方法なのです」

「まさか、二人なら他にも・・・」

言いかけたところで、ヴィルフリートはさつと顔を上げた。

「しまった。言い合いをしている場合じゃない。犯人が母親だろうが、子供だろうが、とにかくあの親子は取り押さえずには」

彼はそれだけ言うと急いで執務室に戻り、すぐさま部下を引き連れて飛び出した。

「いいか。レオとパウルは洗濯女のグレーテの家に行け。残りは市場であの親子を探すぞ、急げ」

気合のこもった声と共に、男たちが駆けだす。先頭を走るヴィル

母親のグレーテは彼の質問に、委縮したように身を竦めて答えない。代わりに応えたのは、息子のヘンゼルだった。

「魔女が持っていました」

「何？」

「あの小屋にいたのは魔女です。魔女は僕と妹のグレーテルを食べようと思いました。だからやつつけたんです。退治したのは僕たちだから、それは僕たちの物です」

そう宣言するヘンゼルの瞳に、揺らぎはなかった。

.....

貧しい樵の小屋には、腰を痛めて寝ている哀れな男がいた。

彼はどこことなく怯えている風で、ヴィルフリートの部下であるレオとパウルが踏み込んだ時も、彼らが戸棚からこの家には不釣り合いな銀貨を取り出した時も、青い瞳を一瞬揺らがせただけで、何も言わなかった。

小屋の中には銀貨の他に数点貴金属があつた。おそらくは、ハンナの物だろう。旅の路銀と、それが足りなくなった時のための物だったのだろう。

これで、犯人はほぼ明らかになったはずであり、事件は解決するはずだった。

だが。

17世紀半ば、魔女狩りはだいぶ廃れてはいた。一時期横行した理不尽な尋問や拷問は時代遅れという風潮や、残虐な面からも批難が向けられていた。

そもそも、ほとんどが言いがかりにより、無力な者から財産を取り上げるのが目的だったのだ。

しかし、今回は些か厄介だった。

告発者が幼い子供であり、被害者は既に物言わぬ軀となっているからだ。

「確かにあの魔女を殺したのは僕たちです。だけど、あれは魔女だったのです。だから、僕たちに罪はありません」

確保した後も、ヘンゼルは取り乱すでもなく平然と言った。

取り調べ用の部屋は薄暗く、寒い。そんな中、彼は物怖じすることもなく、優雅とも言える態度で話した。

母親のグレートが、縮こまってまともに口も利けなかったのに比

べて、その態度は立派と言つべきか、ふてぶてしいと言つべきか。

「彼女が魔女、だと？」

「ええ。あの魔女は僕たちを最初、お菓子やごちそうでおびき寄せました。そうして油断した僕たちを煮て食べようとしたんです」

うそをつけ。

この子供の胸倉を掴んで乱暴に揺すぶりたい衝動にかられながらも、ヴィルフリートは淡々と質問を繰り返した。

「彼女がそう言ったのか？」

「ええ。それに、あのブロッケン山まで集会を開くと」

ブロッケン山とは、ハルツ山地の最高峰であり、この時代はまだ未開の地でもあった。そのため、魔女の集会場所として古くから信じられていた。

かの有名な「ヴァルプルギスの夜」はここで開かれているとも言われている。

ヴィルフリートは、しゃあしゃあと嘘をつくこの悪童の顔を思いつきり張り倒したい誘惑にかられつつ、しかし顔には出さずに尋問を続けた。

「彼女が魔女であるという根拠はそれだけか」

未だ彼が一度もハンナを「魔女」と呼ばないことに気付いているのか、ヘンゼルはじっと彼の顔を見た。うつすらと微笑んでいるの

は、これくらい想定内だったのか。

「いいえ」

彼はそう言っ、ポケットから一枚の布を取り出した。

「？」

親しみのある匂いに、ヴィルフリートはわずかに眉を寄せた。

「魔女の、空飛ぶ軟膏です。魔女はこれを体に塗っていました。これが、魔女の証拠です」

魔女は空を飛ぶと信じられていたが、それには特殊な軟膏が必要だというのが通説だった。そのため、魔女裁判でもそのありかや製法を聞き出すことができれば、それこそ魔女の証明とされていたのだ。

最も、ほとんどが拷問の際に、あらかじめ用意した答えを無理矢理言わせるだけのものだったが。

このクソガキ、叩き斬ってやる。

ヴィルフリートは一瞬剣に手をやりそうになる自分を必死で押さえた。

このガキは、寄りにも寄ってシュネの純粋な善意を、己の殺人を正当化する道具にしたのだ。

以前シュネから、ネルケがヘンゼルを悪しざまに罵っていたと聞いたのを思い出した。なるほど、ただの姦しい小娘だと思っていた

が、なかなかの洞察力である。

ヴィルフリートは次の日、誰にも気づかれないよう街を離れた。

街で、彼が宰相ハインリヒの子飼いの諜報部員であることを知る者はいない。

名宰相と呼ばれるハインリヒは、そうしていくつもの情報を掴み、
今までもランドシュテーヘンを盛りたててきた。

実際、彼の表の上司など、あの軟膏ですっかり信じ込んでしまつた。また、あの小憎たらしいガキが、いかにも利発に語るものだから、すっかり聞きいつてしまつていた。

あの人のいいまぬけな男の眼はそう語っていた。

ヘンゼルの話はすっかり街中を駆け廻り、どんどん誇張されていく。

そのうち、あの小汚い小屋はお菓子で出来ていた。などと馬鹿げたデマまで流れそうな勢いだ。

そんなヘンゼルやその母親が釈放されるのも、おそらく今日明日のことだろう。

しかし、それで一件落着になるわけがない。相手は、どこぞの貴族の奥方かもしれないのである。

「貴族の奥方？」

それまで、どこか面白そうに聞いていたハインリヒはふと顔を上げた。

「なぜそう思う」

「彼女の持ち物の中に、ある刻印がありました」

そう言って、ヴィルフリートは紙を取り出した。

「ルビーの留め金に、紋章が刻印されてたのです。生憎持つてくることはできませんでしたが」

「それで絵に描いて来たのか。・・・上手いな。お前が描いたわけじゃないだろう」

「・・・シュネが」

ヴィルフリートは、器用な同居人の顔を思い出した。彼女は、自分の軟膏が、結果としてハンナの名誉を汚した事実には、顔には出さないが、それなりに憔悴している。

同時に、怒ってもいるが。

「そうそう、シュネだ。お前、次は必ずあいつを連れて来い。あいつの話を聞いていると、広い中庭でバラだの百合だの育てているのが馬鹿らしくなってきた」

「・・・魔女の軟膏でも作らせるつもりですか」

「それも悪くはないが、アマーリアの奴が最近やたら寂しがってな。姉の方が嫁いってしまったものだから、友達が欲しいらしい」

宰相の末娘の顔を思い出そうとして、どうしても浮かばなかったヴィルフリートは、無難に頷いた。

「しかし、この紋章。これは厄介なことになりそうだな」

彼は、その紋章に覚えがあった。

それは、近隣にある国の伯爵家の物に、よく似ていたからだ。

6 (前書き)

ちょっと長いです

その夜、一人の男がその街にやってきた。

彼が接触した小屋の持ち主は、すぐさま警吏のヴィルフリートの家へと走った。そうするよう、あらかじめ彼が言い含めていたからだ。

「なるほど」

彼は頷き、同居人に顔を向けた。

「やっぱり、そうでしたしょ？」

彼女は笑い、手にあるルビーの留め金を見て、小さく笑った。

[illegible]

その少し前のことである。

「それにしても、やりきれないな」

ヴィルフリートはハンナの残したルビーを見ながら呟いた。その留め金の裏には、小さな刻印がある。

「グレーテは知っていたのか。自分の子供が母親を殺すと・・・」

「ヴィル、何を言ってるんです」

シユネが顔を上げ、少しだけ驚いたように言った。

「彼女は、ハンナの娘じゃありませんよ？」

「なぜだ。だって、あの小屋に客があつたことを知っているから、彼女は子供を差し向けたわけじゃないのか」

自分の不幸の原因が、全て母親の身勝手のせいだと思ったからこそ、恨んでいるのではないのか。

「それに、彼女があ的小屋を使っていると知らなかったわけがないだろう。じゃなければ、偶然か？たまたまあのガキどもは森に入つて、たまたまあの小屋を見つけて、たまたまその日に限ってハンナがいたのか？その可能性は低いだろう」

「いえ、知っていたのはヘンゼルです。ヘンゼルだけが、ハンナの血を引いているんです。お気づきじゃないですか？彼の瞳はヘンゼルです」

ヘンゼルの瞳は、両親が青い瞳と、茶色い瞳であることが多い。

「少なくとも、グレーテがハンナの娘の可能性はほぼないのです」

「なぜだ」

「ヴィル。焦げ茶の瞳の人から、青い瞳の子供は、基本的に産ま

れません」

ヴィルフリートは、先程自分が連行した女の顔を思い出した。確かに彼女は、深い青い瞳をしていた。

「ハンナの娘さんは、もう既に亡くなっていたのです」

これはのちに確認をとったが、確かに、あの家の男は一度妻を娶ったが、息子を産むと同時に妻は死亡している。
妻の髪も瞳も、濃いブラウンだった。

.....

ヘンゼルの世界は、常に3種類に分類されている。

一つは気に入ったもの。もう一つは、気に入らないもの。もう一つは、どうでもいいもの。

あの旅の女からせしめた金品や宝石、食料は気に入ったもの。
自分の話を感じて聞いていたあの頭の悪そうな司令官とやらも、彼は気に入った。あの眼には、自分への尊敬がこもっていたから。

気に入らないのは自分を貶めるものだ。
自分たちの貧困さを嘲笑い、からかう街のくだらない連中は、その最たるものだ。

この前は、男に媚びを売るしか能のなさそうな女にからかわれ、女の外套を汚してやった。あれだけ汚してやったら、もう洗っても

あの色は取り戻せまい。

その時のあの女の顔だけは気に入った。

そして、どうでもいいものは、これが一番多い。

まずは家族。

あの頭の足りない父も、母も、妹も、心底どうでもいい。

母の愛を得ようとグレーテルを可愛がったのも、そうすることで、自分がこの家で快適に暮らせるからだ。

だから、母が貧しさのあまり自分を捨てようと父に言いだした時だって、別に腹は立たなかった。

自分を貶めている連中と母は、似ているようで大きく違う。

母は、別に自分を憎んでいるわけでも、悪意があるわけでもない。

彼女は、ヘンゼルが産まれた時から、彼を傷つけたことがない。

淡々と、まるであちこちから頼まれた洗濯物を洗う時のように、黙々と彼を育ててきた。愛情は持っていなかったのかもしれないが、憎しみも、蔑みも持つてはいなかった。

ただ、貧しいからその打開策を出しただけだ。確かに、あのままでは自分たちは飢え死にしていた。それならば、誰かが犠牲になるしかない。

そして、たいして役にも立たない子供がその役目を負うことも、自然な流れだ。

グレーテルではなく自分が選ばれたのも、自分なら運が良ければ生き残る可能性が高いからだ。

とはいえ、自分だって野垂れ死にはごめんこうむりたい。

そんな時、ヤーコプじいさんがヘンゼルに小銭を寄こしに来た。あのじいさんは昔から律儀に小屋の使用料の分け前を持つてくる。大した額ではないが、それでも何かの足しにはなる。

いつもはそれだけ思うところだが、今回は違った。

一人旅の女。

じいさんが何気なく放った言葉は、ヘンゼルにとって天啓だった。

そうだ。

金がないなら、あるところから奪えばいいだけだ。

「お兄ちゃん」

妹が纏わりついて来た。頭の足りない、どうでもいい妹。

だが、罔くらいには使えそうさ。それに、妹は外見は母に似て悪くない。明るい金髪と澄んだ青い瞳は、さながら天使のようで大人の女には受けがいいかもしれない。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「何でもないよ」

いつものように、慈しむような笑みを向けると、ヘンゼルは妹に囁いた。

「グレーテル、お腹が減ったろう？今から魔女の家に行こう。魔女をやっつければ、僕たちはお金持ちになってお腹もいっぱいになれるぞ」

.....

裁判になることもなく、晴れて釈放、しかも魔女を退治した英雄であるはずのヘンゼルは、自分を送る男の目がやけに気になった。

大体、この男は最初から気に入らない。取り調べの際も、ヘンゼルが何を言おうが、何を出そうが、一貫して表情を変えない。それでいて、その瞳は自分を真っ向から疑っているのがよくわかる。

「そうだ。あのルビー、返してもらえますよね」

あのルビーの留め金は、それなりの値打ちがあるだろうとヘンゼルは踏んでいた。宝石など、見るのも初めてだったが、あんな風に刻印が入っているとあれば、それなりの品だろうと踏んでいた。

何よりも、あの輝きだ。あの真っ赤な光に、母と妹がすぐさま魅了された。彼はそれを冷ややかな目で見ていた。

金になることはヘンゼルにとってもありがたかったが、それだけだった。それは、彼が男だからか、それとも美しい物を見て感動する心が足りないのか。

「ああ、あれか。あれは返すわけにはいかない」

あつさりと告げた男を睨みつけると、彼は素知らぬ風を装いながら、淡々と答えた。

「なぜですか」

「あれは、彼女の持ち物じゃなかったからだ」

それだけ言うと、彼は立ち止った。その視線の先には、彼の同居人である少女が立っている。わざわざ庁舎まで来るとは。ヴィルフリートは一瞬目を細めたが、何も言わなかった。

彼女は無言のままヘンゼルに向ってまっすぐ進む。歩きながら、顔を覆うフードを取り外した。

この辺りでは珍しい、漆黒の髪が一瞬空を舞い、ヘンゼルは思わず吸い寄せられるように見入った。

しかし、彼女はそんなヘンゼルの様子を意にも介さず、黒い瞳を彼に向ける。

黒曜石のようなその瞳は、あのルビーよりも遥かに価値がありそうだ。

「何か用かよ」

しかし、自分から目を逸らすことなく睨みつける姿勢は気に入らなかった。

目の前の少女の美しい瞳は、ヘンゼルを貶めていた。いや、もっとひどい。彼女の眼は、はっきりと彼を侮蔑していた。

「思い切りましたね」

彼女は澄んだ声でそう告げる。

あの様子から、何かしら侮辱の言葉を投げつけると思っていた。もしそうなら、あの綺麗な顔をどんな手を使っても傷つけてやろうと思っていたが。

「は？」

「ハンナさん、亡くなる前に私に言っていました。20年前、残してきた娘のために来たのだと。彼女、実はこの街の出身でしたが、隣の国の伯爵家の奥方になられたのです」

ヘンゼルにとっては、どうでもいい話である。あの女が魔女ではないことは知っていたが、まさか、お貴族様だとは。

「だから？」

「ハンナさんが残してきた娘さんとは、あなたのお母さんですよ。グレーテさんではなく、あなたを産んだお母さん」

「は？」

産みの母親？

一瞬、何の話かと思った。ヘンゼルは、その人物を意識したことがなかったから。物心ついた時には既に、あの母親がいたのだ。美しいが、愚鈍な女。

「それにしてもハンナさんが魔女だったとは、驚きました。もしあなたが彼女を退治しなければ、彼女は今頃あなたを見つけ、大事に屋敷へ連れて帰ったでしょうね。できるだけのことをしたいと言っておられましたし、館を一つ持っているとも言っていました。一生、食べるに困らなかつたでしょうに」

思い切りましたね。

そう、少女はもう一度言い、踵を返した。歩きながら、フードを再び被り、その美しい姿が隠れる。

「そんな・・・」

ヘンゼルは、ようやく理解した。

血の繋がった祖母を手には掛けたことはこの際どうでもいい。

だが自分は、ちつぽけな小金のために、振って湧いた人生最大の幸運を、自ら放棄したのだ。

彼は再び歩き出すこともなく、ただ茫然と立ちすくんだ。

.....

「お前も意地が悪いな」

「いけませんでしたか？」

「いや、あれくらいちょうどいい」

今も思い出すが、あの間抜け面は最高だった。

ヴィルフリートは居心地のいいソファに座りながら、上機嫌で緑茶を口に含んだ。やはり、シュネのクロイターデー薬草茶の方が、彼の好みだ。

あの茶番があつた次の日、二人は揃ってハインリヒの館に報告に来ていた。ハインリヒは、あまり報告書を好まない。

それは、証拠に残す物を残したくないからだ。

特に、公にはできない今回のような話は。

「楽しそうだな、ヴィルフリート。そういう時くらい、笑顔を浮かべたらどうだ」

今まで報告を聞いていたハインリヒは、おかしそつにそつ言つて笑っている。

「しかし、そのヘンゼルつてガキはなかなか使えそうだな」

「危険極まりないですよ。自分にとつて損だと認識すれば、躊躇なく裏切る。私としては、あんな危険なクソガキはさつさと始末された方がいいと思っておりますが」

宰相を前に、言葉遣いが悪かったかもしれない。

彼は言つた後そう思ったが、ハインリヒは気にする風でもなく、

楽しそうに聞いている。

「得だと判断している間は、けして裏切らないとも言えるだろう。妹のグレーテルとやらも揃えて、俺が鍛えてせいぜいこき使つてやる。妹の方も、7歳の子供の身で殺害と虚偽の告白に協力するとは、なかなか見所がある。それに、その方が安全だろう」

やはり、あの殺害現場に堕ちていた金髪は、グレーテルのものだったのだ。

「・・・安全ですね」

シユネは頷いた。あの両親は役に立つまい。何しろ、父親は腰を痛めたままだし、母親は、心労のせい最近幻覚が見えるらしい。女の幽霊に追われるなどと叫び取り乱していた。あの様子では、近いうちにどこぞの川にでも落ちて死ぬのではないか。

ヘンゼルとグレーテルだけは、ルビー以外の宝石を換金したり、せしめた路銀で食料を買い込んだのか、以前より断然肌のつやがいい。

「あのハンナが、まさかそんな大それたことを計画していたとはな」

ヴィルフリートも、未だ信じられない。

「本物のハンナという女は、もう死んでいたのか」

そう、本物のヘンゼルの祖母は、とうに亡くなっている。

一人の男が、人目を避けながらあの小屋にやってきたのは、昨日のことだった。

あらかじめ言われていた真面目なヤーコプは、すぐさまそれをヴィルフリートに報告した。彼はその男に身分を明かし、2、3話した後、彼を解放した。

彼は、ただの旅の者だと話したが、その歩き方や身のこなしで、それなりに訓練を積んだ者であることが、ヴィルフリートにはわかった。

「つまりはこうです。ハンナと名乗った彼女は、本物のハンナの娘と、子供がいればその子も殺すためにこの街に来ていたのです」

最初シュネがそう語った時、ヴィルフリートは何の冗談かと思ったものだ。

「それがわかったのは、あのルビーの留め金です。あれには仕掛けがありました」

そう言ってシュネが取り出したのは、あのルビーの留め金である。

「こうやってルビーの部分だけ回転するんです。こういう仕掛けは高価ですからね。きつと、依頼主の物でしょう。だから、伯爵家の刻印があつたのです。その裏には、鉄の帽子トリカブトの粉末が入っていました。この花は、根、草、花粉まで猛毒です」

シュネはそう言いながら、ルビーの指輪を無造作に机の上に置い

た。

「つまりはこういうことです。確かにこの村にいたハンナ・・・かは存じませんが、女は隣国の伯爵に見染められて、家族を捨てついて行き、貴族の子供を産みました」

ただの村娘にとって、千載一遇の機会。当然彼女は飛びついた。心に夫と娘というしこりを残しつつ。

「その子は長じて嫡子とされた。ですが、血統を重んじる伯爵家では、これは世間には公表できない醜聞でもあります。女が死んだ後、子供がいることを聞いていたその嫡子・・・ではなく、違う誰かと信じたいですが。誰かが、彼女の血を引く子供を亡き者にしようと言論んだでしょう」

何より彼らにとって許せなかったのは、おそらく、由緒正しい伯爵家当主と、卑しい下々の者たちが半分とはいえ血が繋がっているという事実だろう。

「ふん、血統など、もう時代遅れと言うに」

ハインリヒは、吐き捨てるように言ったが、同時に納得したようだ。血統にこだわる人間たちを、この中で一番見てきたのは、間違いない彼である。

それに、あの家はかなり格式高かったはずだ。

「ハンナは慣れぬ旅で足をくじいていた。もしかしたら、その傷がヘンゼルたちを救ったのかもしれない。今思えば、彼女には迷いがあつたように感じられます。むやみに他人に話したり、武器ではなく毒を持っていたのも含め、プロではなかったのでしょう」

「おそらく、似た女を使ったとかじゃないですかね。似ていれば、母と名乗って相手を油断させることもできる。それに、所詮相手は女とその子供です」

ハンナは、亡き奥方の子供や孫を消すために雇われていたのだ。昨日来た男は、彼女が失敗、もしくは裏切っていないか確認に来たのだ。こちらはプロなのだろう。もしそうならば、彼女を始末した後、彼が代わるために。

彼がヘンゼルに行きつくのも時間の問題だ。だから、あの二人はこの宰相が引き取ることになる。

ただし、宰相の手足として、裏の仕事をするためだ。この宰相は、こう見えて相当に冷酷だ。これからハードな教育がああ二人を待っていることになる。幸せかどうかはわからない。

それにしても、ヘンゼルが主張した魔女に殺されかけたというのは、あながち間違っではないなかったのだ。

少なくとも、ヘンゼルにとっては、己の命を狙う魔女に間違いなかったのだから。

「でもそれを教えてやらず、それどころかあんなことを言ったのは、シュネの意地悪だな」

「私の軟膏を、魔女の軟膏だと言うからです。当然の仕返しです」

そう言っ、シュネはつんと顎を逸らした。この屋敷に来て、彼女が初めて表情を変えた瞬間である。

「まあいい。シュネ、この前言っていたハーブをいくつか取り寄

せておいた。よければお前が植えて、たまには見に来てくれ。上手く育てば、いくつかわけてやる。どうせあの頭の固い街では、おおっぴらに育てられまい」

いくつかわけてもらえると聞き、シユネに断る理由はない。

「あ、しかしその前にうちのアマーリアに会ってくれないか。退屈してるらしくてな」

「アマーリア様、ですか」

こちらは些か返答が遅れた。確か、宰相の末娘はまだ7歳かそこらだったはずだ。

.....

「面白い！シユネ、もっと聞かせて！ヘンゼルとグレーテルは、その後どうなったの？」

「魔女を退治した兄妹は、魔女の持っていた宝石を持って家に帰るのです・・・」

とりあえず、世間で出回っている部分だけを話しておいた。

困ったことに、この令嬢は年上の遊び相手を当てがわれるや否や、「おはなし」をせがんできたのだ。

最近嫁いだ姉が、毎晩彼女に絵本を読んでやっていたかららしいが、シュネが同じことをしようとすると、もう飽きたと言いつつ放ったのだ。

仕方なく、話して聞かせたのがこれだ。

「家に帰りついた二人は、めでたしめでたし宝石を売り、お金に困ることはなくなりました。・・・E i n H a p p y E n d」

6（後書き）

ヘンゼルとグレーテル編終了です。
次回から新章スタート。

プロローグ（前書き）

新章スタートです。

プロローグ

エリゼが仕える主であるリーゼル姫は、残念なことにあまり賢くなかった。

もう16になるというのに、彼女は己の役割を理解してはいなかったのだ。

その日は、リーゼルの輿入れの日だった。

兄のユリウスをはじめ、家族がどれほど心配し、かつ、この娘に務まるだろうかと心配していても、彼女以外に年頃の娘、しかも相手に釣り合う身分の娘はいないのだ。

「わかってるわね、リーゼル。これからはどうか我儘をおさえ、夫を支えて良き妻、母となるのですよ」

母も父も、娘の身を心配をするよりも、娘が何かしでかさないか、そっちの方が心配だったのだ。

この結婚は、それほど意味があるものだ。

だからこそ、たくさんの嫁入り道具を持たせ、兄のユリウスまで立会人としてついていくのだ。

そして、侍女が一人。本来あちらの家の侍女がつく。花嫁とはい

え、人質の意味合いもある婚儀において、こちらの息のかかった侍女を連れて行くのはあまりいいものではない。

だが、それではあまりに心もとない。いつかボロが出るだろうが賢く、長年仕えてきてくれたエリゼがフォローしてくれば、なんとかなると踏んだ。いや、願った。

複雑な感情が入り混じった親子の別れの中、今現在既に起きている事態の深刻さがわかっていないのは、リーゼルだけだった。

[illegible]

「姫様、お疲れになりましたか」

エリゼは、馬車の中から景色ばかり見ている主人に声をかけた。普段はやたらやかましい娘が、今日は妙に静かで大人しい。さすがに緊張しているのかと、隣で馬を走らせていたユリウスも、思わず覗き込む。

「少し酔ったみたい。あの小川のところで一度降ろしてくれない」

「かしこまりました」

普段に比べたら、ずいぶんかわいい我儘だと、エリゼはにこやかに御者に声をかけた。

「エルンスト様は確かに4男だが、親族婚ばかりで、なかなかよその領地から妻を娶らないあの家が頷いてくれたのだ。リーゼルにはくれぐれも注意してくれ。万が一にも、逃げられたりせぬように」

姫が一人になりたいと言ってエリゼを遠ざけた時、ユリウスはこっそりとエリゼに耳打ちした。エリゼも神妙な顔で頷く。

「はい、若様」

「その若様も、もう変えた方がいいな。次にお前がそう呼ぶ相手は、リーゼルの子供だよ」

「そうでした」

くすりと笑ったエリゼとユリウスは、お互い、今日初めて笑ったことに気付いた。どうやら、相当に緊張していたらしい。

エリゼは貴族の出ではなかった。

身分にこだわらない宰相の館の侍女だったのだが、幼い頃、たまに宰相の家にやってきたリーゼルがねだったのだ。幼い彼女にとつては、同年代の侍女というのはたまらなく魅力だったらしい。

お転婆であまり賢くはなかったが、リーゼルは性根の悪い娘ではなかった。だから、エリゼにとつても、それ自体はそう悪くなかった。

だが、リーゼルの我儘についていける娘は少なく、気付けばエリゼが一番傍にいたことが多くなった。そうなると、自然とリーゼル

と年の近い兄、ユリウスとも言葉を交わす機会が増える。

もちろん、身分を考えると恐れ多いことだが、エリゼにとってユリウスは憧れの的だった。今だって、こっそりと胸が高鳴っている。

リーゼルと同じ明るい金髪と神秘的な湖を連想させる青い瞳に密やかに焦がれるくらい、何の罪があろうか。

「それにしても、リーゼル様は一体何を……。一応見てきますね」

「ああ、頼む」

気軽に言ったエリゼだったが、そこで驚愕の事実を知ることになる。

.....

それにしてもいい天気である。空気は澄み、小川の水は清らかだ。こんな大仕事の途中でなければ、鼻歌の一つでも出ていたかもしれない。

先程の会話と、気安く掛けられた「頼む」で、すっかりいい気分になったエリゼは、頬を赤らめながら主人の元へ急いだ。

「リーゼル様？まあ、何をしてらっしゃるんですか。洗濯なら私がいたしますから」

そこにいたのは、小川の水でハンカチのような物を洗うリーゼルの姿だった。エリゼが声をかけた瞬間、姫はなぜだかギクリと身を震わせた。その姿には見覚えがある。というより、毎日毎日こんな姿を見つけては、追いかけて来たのだ。

「リーゼル様？一体何を汚されたんです」

隠される前に素早く回り込んで覗き込むと、彼女が洗っていたのはハンカチではなく、下着だった。

一瞬、エリゼはリーゼルが、乙女としては恥ずかしい失態を犯してしまったのかと思った。それなら、彼女は素知らぬふりをしてやった方がいいだろう。

そう思った瞬間、その布にべっとりとついている鮮やかな赤が目についた。

月のものだろうか。でも、それなら見るのは慣れていた。確かにそれも恥ずかしいが、このお姫様が、小川の冷たい水で自ら洗うことにはならない気がする。それをするなら、彼女はエリゼを呼びそうだ。

それに、リーゼルの月のものが数日前に終わったことは、エリゼも把握している。

（じゃあなぜこんな血が・・・）

そこで、エリゼははっと主人を見た。彼女は、ばつが悪そうにぷいと顔を背けている。

「まさか!」

「な！何よ！ちょっとだけよ！ちよつと、お嫁に行く前に想い出が欲しいと言つたらこんな・・・わ、わたくしだって痛いばかりで二度とあんな・・・」

決定的だつた。

「姫様！何という、何ということをして！ああ！お母様がこれを知つたら心臓が張り裂けるでしょう！」

青ざめ叫ぶエリゼの声に、近くで待機していたユリウスがただごとではないと駆けつけた。

「どうしたエリゼ！何をしでかしていた！」

ユリウスとて、自分の妹の性格くらい把握している。今度は何をしでかしたという思いと、国境を超える前でよかつたという思いが交錯しながら、彼は叫んだ。

「エリゼ！お兄様には黙つてて、お願い」

「黙つていられません！ユリウス様！リーゼル様は、リーゼル様は純潔を失つておられます！」

「なにイ！？」

普段物静かで冷静沈着と評判のユリウスも、この報告には思わず声が裏返つた。

「このっ・・・バカ娘！」

心の底から、ユリウスは叫んだ。

件の「バカ娘」が事に及んだのは、昨夜のことらしい。明日は嫁ぐ身だからと、一人にさせてやったのが今になって悔やまれる。

それにしても、先程まで静かだったのは、まさか下半身が痛んでいたからだっただとは。

しかし、破瓜の血で汚れた下着を部屋に残して行かなかったのは、せめてもの救いだった。もし母がこのことを知れば、エリゼが言うように本当に心臓は破裂していたかもしれない。

「な！酷いわお兄様！」

「酷いのはお前だこのあばずれが！お前のせいで、うちの家や領民はどうなると思う！？この結婚のためにどれほど俺たちが苦労したか・・・それを、一瞬で駄目にしやがって」

「何よ！お兄様にはわからないんだわ！恋に苦しんだことなど、ないでしょう！」

「俺にだってあるわ！」

「ユリウス様、ユリウス様。今はそれどころではありません。何とか、誤魔化すことはできないでしょうか」

エリゼとて、リーゼルと同年のうら若き娘だが、ある程度知識はある。

何と言っても貴族の家で働く庶民だったのだ。貴族の男が、今までどれほど抵抗もできない弱い立場の娘に無体を働いてきたか。

だからこそ、彼女たちは母親から、身を守るために男が女に何をするか、どうなるのか、しっかり教わっていた。

「例えば、こっそり赤のインクを染み込ませるとか。どうせ洗うのは私たち侍女の役目です。さっさと捨ててしまえば、証拠は残りません」

「そうは言うが・・・わかる可能性が高いだろう。その・・・最中に。しかも、遊び慣れてる男なら、まず気付く」

「そんなものですか」

エリゼにはわからない。何しろ、エリゼだって乙女なのだ。知識はあれど、未だ穢れを知らぬ身だ。というより、憧れの若様がそんなことを知っているのも、何となく複雑だ。

「しかしどうすれば・・・」

「ねえエリゼ。わたくし喉が渴いたわ。わたくしの杯を持つてきてちょうだい」

真剣に顔を突き合わせて相談する二人に、場違いなリーゼルの声が響いた。この姫様は、これほどに兄と侍女が青ざめていても、事の重大さに気付いていないのだ。

「「そこで腹這いになって飲んどけ（お飲みください）！」」

二つの声が重なりあった。ユリウスは苛立ちのため余裕がなくなり、エリゼは、焦りのあまり地が出てしまったのである。

二人は顔を見合わせ、一瞬気まずさに苦笑したが、すぐに現実に戻った。ここであまり時間は食えない。何しろ、国境を越えれば迎えが来ていてもおかしくはない。

「それより……」

ユリウスは言いかけ、一瞬エリゼを見た後、口ごもった。

「……何です？」

「いや……」

「おっしゃってくださいユリウス様。私にできることがあるのなら、何なりと」

エルゼとて、この結婚の重要性は認識している。もしここで花嫁の純潔を理由にこの結婚が白紙に戻れば、ランドシュテーヘンはヴェルフ家との縁が閉ざされてしまう。

この時代のドイツにおいて、力がないことは直結的に破滅に繋がる。

「……お前と、リーゼルは髪の色も、瞳の色も、背格好も似ているな」

そう言って、ユリウスはエリゼの金色の髪に手を伸ばした。彼がこのようにエリゼに触れるのは、初めてのことだった。こんな時だ

というのに、エリゼの胸は高鳴る。

「ユリウス様・・・？」

緑色の目を大きく見開き、エリゼはユリウスの次の言葉を待った。彼は辛そうに一瞬顔を強張らせ、しかし、すぐに強い光を宿してエリゼを真っ直ぐに見詰めた。

「ヴェールで顔は隠れるし、寝所は暗い」

「ユリウス様・・・それは・・・」

「エリゼ頼む！一晩、初夜だけリーゼルの身代わりとなってくれ！」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

きつと、数秒自分は固まっていたと思う。気がつけば、憧れの若様の視線が自分だけに注がれている。何もかも忘れて、それだけを見つめていたいと思いつつも、悲しいことに彼女の頭からは、今起きている問題が離れていなかった。

「私が・・・初夜だけ身代わりに・・・」

「後生だエリゼ。けして、その後は悪いようにはしない！あの場に残りたくなければ、すぐに代わりの侍女をやる。お前は故郷に戻ってもいい。その後誰に恋しても、必ずや後盾となるう。純潔に關しても、文句は言わせない」

ユリウスは、自分の身分も、相手の身分も忘れたように、エリゼ

の前に平伏してみせた。

「若様！」

「お前にとって残酷な頼みだということはわかっている。気が済むまで俺を殴ってくれてもいい。だから頼む」

それは、エリゼにとっては酷く残酷な頼みだった。もし、これを命じたのがリーゼルの父親なら、苦しみつつも、エリゼは頷くことができた。

千々に乱れる心を抑えようとすれど、胸の痛みは強くなるばかりで、しまいには視界がぼやけた。地面に落ちた水滴で、初めて自分は泣いているのだと気付く。

自分は今、恋していた相手に、知らぬ男に身体を開けと頼まれたのだ。

威圧的に命じてくれればよかった。それならば、エリゼはただ己の不幸を嘆き、ユリウスを恨めばよかったから。

しかし、彼は頼んだのだ。しかも、公爵家の一員であるユリウスが、身分も持たないただの小娘に、平伏までして。

エリゼは泣いた。声も嘔れよとばかりに慟哭した。

それは、悲しい決意のためのものだった。

それがわかり、ユリウスは彼女の腕を引き、頭を自分の胸に押しつけた。彼女が自分をどのように見ていたかは知っている。

そして、自分はそんな彼女の想いを利用し、この理不尽極まりない要求を吞ませたのだ。

時間はあまり残されていない。それはわかりつつも、彼はエリゼが気が済むまで泣かせてやった。

ユリウスが愛しい娘にしてやれるのは、たったそれだけだったから。

「つまり、大変なことらしい」

「・・・それはわかりました」

馬車の中でシュネは、神妙に頷いた。馬車に乗ることは初めてではなかったが、こんなに立派なものは当然初めてだった。

（シートがふかふか）

せつかく本を貸していただいたのに、この居心地の良さでは眠くなってしまう。しかも、道がなだらかなせい、微かな揺れが、かえって眠気を誘うのだ。

窓の外を見ると、彼女の保護者兼同居人であるヴィルフリートが騎乗して馬車のそばから離れない。一応護衛という立場だからだが。

彼の吐く息は白い。外はどうやら寒いようだ。ふかふかのシートと、羊毛で作った膝掛けのおかげで、シュネとハインリヒはぬくぬくとまどろみながらの快適な旅であるが。

ちなみに、今回は裏の仕事とは無関係である。

「一応今回はお忍びだからね、あまり屋敷の者は連れていけないんだよ」

資金源の一人である彼が警吏隊の司令官にそう言えば、駆り出されるのは一番腕が立つヴィルフリートになったまでだ。

「それなら、なぜシュネまで？」

自分はまだしも、シュネは13の小娘である。あの目立つ容姿もあるし、あまり遠出はさせたくない。

「だって退屈だろう。仏頂面とかしこまった従者。むさくるしいことこの上ないじゃないか」

ハインリヒは、背もたれに体重を預け、窓の外からヴィルフリートに笑顔で手を振った。ヴィルフリートの方はそれに一瞬だけ目を向けるものの、すぐさま前を向く。

「気付いてないふりをしたな。まあ、バレバレだけど」

「仕方ありません。彼はこういう厄介事が好きではないのです。何も考えずに剣を振るえたら理想的だってこの前零してましたから」

「なるほど」

「それに、今回のような複雑な思惑が絡むのが、一番苦手なのです」

「だろっな」

実際、ハインリヒだって苦手だ。

彼は、公爵から直々にその相談を受けた後、すぐさまヴィルフリート
の元へ鳩を飛ばし、呼び寄せた。

「あのバカ姫がまたやらかしたらしい」

忌々しそうに告げるその声はいつもより3割増しで低かった。

「バカ姫・・・？ もしや、この前お輿入れしたリーゼル様のこと
ですか」

ヴィルフリートが呆れ声を出すのもいたしかたない。 magari なり
にも公爵令嬢を「バカ姫」呼ばわりするとは。 以前から思っていた
が、この人は口が悪い。

それに、失礼にも程がある。

リーゼル姫と、ブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公の弟で
ある、ヴェルフ家のエルンストの婚姻がめでたく成立したのは、ラ
ンドシュテーヘンに住む者にとってどれほど僥倖か。

今から向かうゲッティンゲンを始めハノーファー、リューネブル
クなど広大な領地を治めるヴェルフ家との繋がりには、ぜひとも持っ
ておきたい。

また、ここから近いゲッティンゲンを足がかりに商業の手を伸ば

しやすい。

一方、ランドシュテーヘンは小さいが商業が盛んであり比較的豊かだ。また、ここ数年宰相ハインリヒが育てた警吏隊は、常備軍としても通じる。

つまり、こちらは向こうの政治力を、向こうはこちらの財力を、それぞれ利用するための大事な婚姻なのだ。

とはいえ、16の乙女の身の上で国のために見知らぬ男の元へ興入れする姫を、ヴィルフリートは哀れに思ってもいた。

「いやそれがさ。乙女じゃなかったんだって」

「・・・は？」

「乙女じゃなかった。だから問題なんだよ」

そういった問題には巻き込まないで欲しい。ヴィルフリートはそう思った。

「・・・私は剣を振るうしか能のない、無学な人間ですから」

「それはわかってるけど、こんな世の中だし、道中物騒じゃないか。だから護衛を」

「仕事がございます」

ぴしゃりと言ったヴィルフリートは、顔には出していないが必死だった。なぜこの御仁はいつも彼を使おうと思うのか。屋敷にはも

つと適当な人材がいるじゃないか。

ましてや嫁入りした姫君が乙女じゃなかったと知ったところで、彼に何かできるわけもない。むしろ、絶対に関わりたくない。

大体若い娘は苦手なのだ。近所に住むあの姦しいネルケも苦手だし、同居人のシュネだって何を考えているのかわからないくらいなのにな。

「・・・そうか」

納得したようにハインリヒが頷いてくれたので、彼はようやくほっとした。どうにか、今回は厄介事を免れたらしい。

そう思っていたのに、次の日上司がわざわざヴィルフリートの元へやって来て、宰相のお忍びの遠出の護衛を命じられたのだ。

(
・
・
・
なぜだ
)

彼の叫びは、心の中だけのものだったために、誰も答えることはできなかった。

[illegible]

ランドシュテール侯爵家では、花嫁となった娘は婚姻が無事成立するまで素顔をヴェールで覆うという風習がある。

というのが、ユリウスが急遽作りあげた言い訳だった。むろん、真っ赤な嘘である。

「いいな？エリゼ。絶対にヴェールは取るなよ」

「はあい、わかっておりますわ、お兄様」

エリゼは、いつもより1オクターブ高い声と、常日頃傍にいるリゼルの喋り方を何とか真似てみた。

「わたくし、そんな言い方はしないわ」

すかさずリゼルが抗議したが、兄のユリウスは、内心なかなかのものだと感心していた。さすが長年一緒にいただけある。

急遽作りあげた設定だったが、何とかエリゼを寢所に送ることができたと、ユリウスは胸を撫で下ろした。

ゲッティンゲンのヴェルフ家の屋敷には、今現在花婿となるエルンストと、その従兄であり幼馴染のキュルドしかない。これも幸いした。

ゲッティンゲンはカレンベルク侯であり、エルンストの兄であるゲオルクの領地だが、彼が来るのはあと3日ほどである。

そこであらためて宴を開き、エルンストとリゼルは、今度は長兄に会うためハノーファーへと向かう予定である。

花婿のエルンストは、優しげな顔立ちの線の細い青年だった。年は二十歳そこらだったはずだ。品のいい口元を柔らかくほころばせ、彼はエリゼ、いや、公爵令嬢リーゼルを優しく出迎えた。

ランドシュテールへの風習をユリウスが語ると、彼は疑う様子も見せずに、花嫁の意思を快く尊重してくれた。

本来、嫁に來ている身である以上、こちらの風習を持ちこむのは不躰な願いであるというのに、彼は笑って許してくれたのだ。隣で彼の従兄が一瞬眉をしかめたにも関わらず。

その様子から、彼の穏やかな人柄が伝わってくる。一晩とはいえ、身を任せるのがこの人でよかったと、エリゼは心底そう思った。

あとは、上手く彼と一夜を過ごせばエリゼの大役も終えることができる。

・・・はずだった。

「では、事が終わったら計画通り」

「はい。私が水を飲むから侍女を呼ぶとエルンスト様に断り、外に出ればよいですね」

「ああ。すかさずそこでリーゼルと入れ替われば、この計画も終了だ」

一度覚悟を決めてしまうと、心配事は純潔を失うことよりも、この計画が成功するかどうかのみになってしまうた。

それに、純潔の問題は自分だけの問題だが、この計画が万一失敗でもすれば、ヴェルフ家を侮辱したとして、結婚が無効になるだけでなく、ランドシユテーヘンにも被害が及ぶ。

それを想像し、思わず身震いすると、ユリウスが心配そうに「寒くないか？」と訊いて来た。ガウンを纏っているが、その下は薄地の夜着だけなのだ。

「いいえ」

「慣れない土地だからな、風邪引くなよ」

「大丈夫です、故郷ですから」

エリゼがこともなげに言うと、ユリウスは初耳だったのか、目を大きく見開いた。

「そうだったのか？」

「と言っても私は記憶にありませんけど。生活苦に、生まれたばかりの私を連れて両親はここから逃げ出したのだそうです」

ゲッティンゲンは、30年戦争の最中に何度も戦乱に巻き込まれた。時には攻撃を受け、時には略奪の憂き目にもあっている。

それらを避けるためには、今度は多額の軍税を支払わなくてはいけない。10年ほど前に支配者がヴェルフ家に代わったが、それでも市民の負担はあまり変わっていない。

そんな生活に耐えられず、街を離れるものは多かった。エリゼの

亡き両親も、その中の一人だったのである。

「だから嬉しいんです。私にとってはランドシュテーヘンも、ゲッティンゲンも故郷です。その故郷を助ける手伝いができる」

処女を失うことになるのは悲しいが、自分が二つの故郷を救えるのだと思うと誇らしい気にもなる。身分も持たないただのちっぴけな少女だが、自分の存在には価値があるのだ。

「エリゼ・・・」

「さあ、兄様。わたくしそろそろ行きます」

毅然と顔を上げ、エリゼは立ち上がった。彼女に残された仕事は、たった一つだ。

寝台の上でしばらくぼうつと窓の外を眺めていると、部屋のドアがゆっくりと開く音が聞こえた。

彼女の夫であるエルンストが入ってきたのだと、振り向く前に気付いた。ゆつたりとした足音が、やけに耳につく。

「待たせたか？」

彼が穏やかな声で問うたので、エリゼは首を振った。リーゼルの

口真似は得意だが、彼女自身は貴族の令嬢でも何でもないので。あまり口を開いてボロが出て困る。

「何をしていた？」

「・・・星を、見ていました」

彼が隣に腰掛ける。華奢に見えた彼だったが、座った拍子にマツトが揺れ、彼女の体がわずかに浮き上がった。細く見えても、やはり男なのだと、彼女が強く意識した瞬間だった。覚悟を決めたとはいえ、怖いものは怖い。

「星が好きか？」

「・・・はい。特に冬は、空気が澄んでいるのか一層輝いて見えて」

「そうだな、私も星は好きだ。・・・怖いかな？」

急に話を変えられて、エリゼは反射的に「はい」と答えてしまった。

「あ！ち、違います。わ、わたくしはあなたの花嫁。な、何も恐がることなど・・・」

「別によい。私だって、怖い」

驚いて顔を上げると、信じられないほど優しげな茶色の瞳にぶつかった。

「え？」

「私だって怖い。この結婚に多くの想いがかけられている。あなたを守れるという自信もない」

そう言つて、うつすらと微笑む彼は相変わらず優しくかったが、同時に儚げだった。

「私は4男だ。領地を継ぐことはまずないだろうし、期待もされていない。……この街が今どんな状態かは知っているか？」

こくと頷いた。頷いた後、リーゼルは知らないかもしれないと思ひ至り、後で詳しく教えておかなければとエリゼはふと思った。

「兄も悩んでいる。以前ほど酷くはないが、この街はどんどん衰退している。人々は街を離れて行くし」

「それは、当然でしょう」

思った以上に冷たい声が出て、エリゼは慌てて口を覆った。が、傍にいたエルンストは当然聞き逃さず、顔を向けた。

慌てて言い繕うことも考えたが、それもわざとらしいとエリゼは覚悟を決めた。

「何？」

「……ですから、人々が街を離れるのは当然です。皆生活があり、家族がいるのですから」

「確かに今までは野蛮な傭兵どもやスウェーデン軍に何度も占領

されてきた。だが、今は違う。今はヴェルフ家の領地の一つだ」

「支配者が交代したところで、負担は変わりません」

「兄があいつらと同じだと？」

「何が違うのですか？」

言いながら、段々とまづい方向へ行っていると気付いてはいた。そもそも、自分はこんなところでこの人と政治論（いや、そんな高尚なものではない、ただの口喧嘩だ）をしている場合ではない。

何が悲しくて今から自分を抱く男とこんなことで言い合っているのだろう。しかも、相手は妻とはいえ、何も知らぬ小娘の理屈など歯牙にもかけないだろうに。

「・・・たしかに、あなたの言うことにも一理ある」

気まずい沈黙を破ったのは、しばらく黙りこくっていたエルンストの方だった。

エリゼの方は驚いていた。まさか、彼が認めるとは思ってもいなかったのだ。大体にして、自分の言い分が感情論であることもわかってる。

自分の場合、死んだ両親が責められているような気がしたから反論したにすぎないのだ。

「しかし、兄はこの街を何とか復興させたいと思っているのも確かなのだ。私もそれを支えて行きたい。ただ私腹を肥やしたいだけじゃない。私たちにはこの地を守る責任がある。だが・・・確かに市民からしてみたら、私たちもスウェーデン軍も大きくは変わらない

いのだろう」

そう言って、彼は顔を上げ、エリゼに微笑みかけた。最初に出会ったときと同じような、労わりのこもった瞳だった。

「よかった。こうしてあなたがきちんと意見を言ってくれる人で、あなたとなら、うまくやっていけそうだ、リーゼル」

「・・・そうですね」

彼が「リーゼル」を気に入ってくれたのはよかったが、自分はエリゼなのだ。今夜一夜を共にした後、自分はゲッティンゲンからも離れるというのに。

「私は考えたのだが」

しかし、彼の方はまだ話足りないことがあるらしい。これ以上ぼろを出さないうちに早いところ事に及んで欲しくなってきた。

「はい？」

「私たちに期待されているのは子をなすことではない。お互いの家が持つ力を貸し合うことだ」

利用し合うとも言つ。物は言いようだ、エリゼはこっそり思った。

「はい」

「だから、焦ることはないと思う。私たちはもっと話をして、互

いを知る必要があると思う。あなたもさっきまで震えていたし、今日は無理強いはいしない」

「は？」

できれば無理強いしてでも早く終えて欲しいとは言えないエリゼは、彼の提案に目を剥いた。

「こういうことは、お互いを想い合えるようになれば、自然となるようになるものだと思うのだ」

言っていることは立派だが、要するに会ったばかりの女を抱く気はないということか。

自分の主人であるリーゼル姫とは、基本的に気が合わないんじゃないかと、エリゼはつい場違いな心配をしてしまった。

「だから今夜は安心してゆっくりと休むといい。旅の疲れもあるだろう。・・・また明日もこうして思ったことを遠慮なく話してくれると嬉しい。あなたとは気が合うと思う。・・・おやすみ」

そう言って、彼はエリゼの手を引きよせ、手の甲に軽くキスをすると、彼女に毛布を引きよせてくれた。

「・・・おやすみなさいませ、エルンスト様」

仕方なしに、エリゼも布団を被る。上質のシーツに包まれた寝台に横たわると、駄目だと思いつつも瞼が重くなり、気がつくとエリゼは熟睡していた。

夜中に一度だけ、目を開けたエルンストは、律義にヴェールをかけたまま、だがぐっすりと眠るエリゼに微笑み、再び目を閉じた。

その間、まんじりとすることもできなかったユリウスと、その傍で安らかな寝息を立てているリーゼルは、そのまま朝が来るまで隣の部屋で待機するはめになっていた。

翌朝、事の次第を聞いたユリウスは顔を青ざめさせ、一番信頼を置いている宰相ハインリヒに、伝書鳩を飛ばした。

ハインリヒがヴィルフリートとシュネを連れてゲッティンゲンを訪れたのは、その次の日のことである。

ゲッティンゲンの屋敷には、既にランドシュテーヘンから、公爵家で働いていたアガタという少女が来ていた。

彼女は、リーゼルに扮したエリゼと今もこの屋敷に滞在しているユリウスの連絡係となっている。

いかに兄妹といえど、結婚した（ことになっている）娘と一緒にいて、あらぬ不信を買っても困る。

ユリウスがこの屋敷に滞在しているのは、名目上はこの地の領主であり、エルンストの兄であるゲオルクに挨拶するためであるが、本当のところ、エリゼとリーゼルをこのまま置いていけないからである。

公爵の子息という身の上で何日もランドシュテーヘンを離れていられるのも、彼が4男であるからだ。その点において、エルンストと似た立場であるユリウスは、意外なほど妹の夫と話が合った。

「これはハインリヒ様」

ハインリヒがヴィルフリートとシュネを連れてやってくると、出迎えてくれたのはアガタだった。

「……エリゼは？」

「がちょうの番をなさって……いや、しております」

エリゼと入れ替わったリーゼルは、侍女の役目には廻らなかつた。これは、彼女の仕草や話し方が、ただの侍女とは大きく違っていたからである。

何より、ここゲッティンゲンで暮らすわけではないとはいえ、後にエルンストの花嫁としてお披露目する彼女の顔を、誰かに見られても困る。

そのため、エリゼはエルンストに連れてきた彼女に違う役割を頼んでいた。

「あの娘は人見知りが激しいので、できれば誰とも接しない仕事をお与えください」

それでリーゼルに回ってきたのは、がちよう番である。普段あまり動物と接したことがない彼女だったが、リーゼルはこの役目を思いの他気に入っていた。

「しかし困ったな。明日には確かゲオルク様が来られると言うし、さすがに顔を隠したままでは都合が悪いだろう」

幸い、エルンストはゲオルクが来る前に片づけておかない執務がたくさんあるらしく、夜にならないとエリゼと顔を合わせない。合わせてもヴェールはとっていないので、未だ彼は花嫁の顔を知らないのだ。

しかし、肝心な既成事実ができていない。話すだけだ。
意外にエルンストは話好きなのか、エリゼとあれこれと会話を持とうとしている。

妻と接する時間をもってくれるのはいいが、それより先に早いところ事に及んで欲しい。

「となると、決行は今日だな」

ハインリヒはそれだけ言うと、シュネに向き合った。

「では、早速頼む」

頷いたシュネを横目で見たヴィルフリートは、何のことだところり首をひねった。

「ああ、シュネには先に話していたんだが、強烈な媚薬を頼んだんだ」

「いたいけな子供に何てもの頼むんですか、あんたは」

つい「あんた」呼ばわりしてしまったが、保護者としては聞き捨てならない。それでなくともこんな話にシュネを巻き込みたくないというのに。

何がむさ苦しいから連れてきた、だ。この男、最初からこれが目的だったに違いない。

「大体、お前は媚薬とは何なのか知っているのか」

「男の方を元気にする薬と聞いております」

「・・・」

それ以上突っ込んで訊くのは憚られる返答だ、間違っではないが。

微妙に勘違いしたままでいるのか、わかっていて、あえて濁して表現しているのか判断に困るところである。

「必要なものはあるか？何かいるものは？」

「いえ、既に用意しております。台所を貸していただければ」

アガタが会話の内容に訝しげにしながらも、シュネを台所まで案内するために前に出た。

「さて、これで上手くいくといいが」

ハインリヒは館を見上げ、深くため息をついた。

・・・

「実は、私の愚息がイタリアに留学しております。それが珍しいチョコラーテという飲み物を送ってきたのですがこれが実に美味でしてな。ぜひともゲオルク様とエルンスト様にもご賞味頂こうとお持ちいたしました」

にこやかな笑みを浮かべたまま、ハインリヒは目の前のエルンストに跪いた。

「その名前は聞いたことがあります。それにしても、宰相自らお持ちくださるとは」

エルンストの方も穏やかな笑みを浮かべながら、丁寧に対応する。身分としてはエルンストの方が上だが、ハインリヒはランドシュテールヘンの宰相であり、国を盛りたててきた。ランドシュテールヘンが小国でありながら他国からの侵略をかわしてきたのは、彼の手腕によるものが大きい。

公爵以上に油断ならない相手として、エルンストの方も丁寧に、かつ隙を見せないよう細心の注意を払っているのだ。

「生憎兄がここに来るのは明日です。なので、今日はこの館に泊まられるといい。うちの料理人はがちょう料理が得意ですから、ぜひとも召し上がっていただきたい」

「それは楽しみですな」

笑みを崩すことなく、ハインリヒは顔を上げた。

「ああ、酷い目にあった」

リーゼル姫の寝室のすぐそばに、控室がある。そこにはリーゼル

直属の侍女が誰か一人は待機して、女主人が用を言いつければすぐに対応できるようになっている。今日はアガター人がいるようにしていた。

その部屋にいたシュネとヴィルフリートの前に、げっそりした面持ちのハインリヒが入ってきた。手には、夜食と思しき軽食が載せられた皿を持っている。

「どうなさったのですか」

先程煎じておいたバルドリアンカノコソウの根と、乾燥させたパッションフラワーの花弁をポットに入れたシュネは、怪訝な顔で彼を見やった。

「・・・がちようだよ。俺、昔からがちようは苦手なんだ。というか、鳥肉はあまり好きじゃないのに、でかいのが丸ごと一羽出てきた時は何の嫌がらせかと」

「贅沢なことを言って」

塩漬け肉とスープとパンで夕食を済ませたヴィルフリートたちからして見れば、喧嘩を売っているのかと問いたくなる。

「そう言っな。夜食に出されたこれ、お前たちにやるから」

ハインリヒがこっそり持ってきたのは、薄く切ったライ麦パンだった。その上には、今日夕食用に焼いたがちようの肉の切れ端が、ソースと共に載っている。

夕食が物足りなかった二人は、ありがたくご相伴にあずかることにした。

「それが？」

もぐもぐと夜食を食べている二人を見ていたハインリヒが、ふとテーブルの上に置いてあるティーポットを指さした。

「ええ。ご注文の媚薬です。とはいえ薬草茶クローイターティーですから、エルンスト様の健康を害する恐れはありません。蜂蜜を入れたので、普通にお飲み物として飲んでくださるか」と

「それは重畳」

「そしてこちらはジャスミンの精油です。同じく媚薬効果があります」

そう言って、シュネは沸かした湯をティーポットに注ぎ、その中にジャスミンの精油を数滴落とした。途端に甘い香りが部屋中に広がる。

「枕にはバラの花びらを詰めておきました」

寝所の支度を済ませたアガタの手には、無数の小さな切り傷がある。今日は一日バラ摘みをしていらしい。

お膳立ては完了である。

「そういえば、シュネ。この屋敷ではあまりフードをとらないよ
うにね」

夜食を食べ終えたシュネに、アガタがこっそり耳打ちした。

「エルンスト様の従兄のキュルド様は女にだらしない方みたいだから、あなたの顔を見たらよからぬことをするかもしれないわ」

「・・・気をつけます」

「その従妹とエルンスト様が逆だったら話は簡単だったんだがね」
こっそり聞いていたハインリヒがしみじみと呟いた。

「でも、それだとリーゼル姫様には気の毒な話でしょう。結婚する相手が浮気者だなんて」

「何を言っている」

小馬鹿にしたような笑みを浮かべたランドシュテーヘンの宰相は、冷たい声を上げた。

「それが貴族の義務だ。いい服を着て、食べ物に困らない暮らしを許されているのは、こういう義務があるからだろっ」

珍しいこともあると、食後のお茶を啜りながらシュネは思った。
飄々としたこの名宰相でも、熱くなることがあるらしい。

「相手が浮気性だと気の毒？忘れるな、ヴィルフリート。今一番気の毒は、あの侍女だったことをな」

エリゼは、自分の役割をきちんと理解していた。

にもかかわらず、なぜ今自分はこの男とこうも議論しているのだらう。しかも、バラの香りやジャスミンの香り漂うこの官能的な寝台で。

事の起こりは、ここゲッティンゲンの復興のためには何を生産させるべきかというものだった。経済の面で、ここ数年ゲッティンゲンは衰退の一途をたどっていた。

今までこの街は毛織物が盛んだったが、最近はいギリスの安価で質の良い毛織物の台頭により、どんどん人気が下がっていた。

議論は白熱してきた。おかげで、ハインリヒが連れてきた薬剤師という、フードを被った小柄な人物が作った媚薬らしき茶も、手をつけないまますっかり冷え切ってしまったている。

「何か、ここでしか手に入らないような物珍しいものができればいいのだが」

「新しいものを作るにしても、容易ではありません。それが作物だろうと、手工業であろうと、一から学ばなくてはなりませんから」

「学ぶ、か……。愚直な市民や農民にできるだろうか」

不遜な言い方に思わずむっとしたエリゼだったが、考えてみればエルンストの発言は、全く悪気がないのだろう。

なぜなら、彼は基本的に性格は悪くない。いや、むしろかなりいい。エリゼにも優しい上に、侍女となったアガタに対する態度も女性というのもあって丁寧だ。

自分たちだって、陰では「貴族つてのはみんな鼻もちならない」と決めつけ陰口を叩いている。それと同じようなものなのだろう。

だが、そういった言葉がエルンストの口から飛び出てくるのは、なぜだか心が痛かった。

「市民や農民が愚直なのは、学ぶ場所がないからです。貴族と同じように学ぶ機会があれば、彼らだってしっかりと物を考えます。・
・彼らと貴族に、何の違いがありませんう」

驚いて目を見開くエルンストに、エリゼは慌てて顔を背けた。今の発言は貴族らしからぬものだった。

「随分思いきったことを言う」

しかし、彼はエリゼの発言を、呆れながらもどこか好ましいものとして見ていた。彼女の考えは嫌いじゃない。

この激動の時代、高貴な身分といえど力がなければ即座に引きずり降ろされる。自らに流れる血が気高いのだと口に出せど、無能であれば命を絶たれる。

そういった光景を見ていた彼からすれば、妻の言葉に説得力を感じるのであった。

「・・・そろそろ顔を見せてはくれないか」

「駄目です」

「なぜだ」

「まだ、きちんとあなたの妻になっておりません」

即座に返すと、エルンストは笑いを堪えるように唇を歪めた。

「妙な女だ。あれほどに柔軟な発想を出す癖に、変なところで頑固だ」

尚も笑いながら、彼はゆつくりと、エリゼの編み込まれた金色の髪に手を伸ばした。リーゼルと同じ色の髪である。

だが、こうも彼と話しては、いざリーゼルと入れ替わったらばれてしまうのではないかと、エリゼは今更ながら慄いた。

入れ替わったら、リーゼルにはしばらく病気が何かの理由で誰とも話せなくなつたということにさせるべきか。

それにしても、なぜ自分はこんな場所でこんなことをしているのだろう。

「もう震えていないんだな」

ぼんやり考え事をしていたエリゼは、エルンストの呟いた言葉の意味になかなか気付かなかつた。

「え？」

「だから、もう怯えていないんだな。私が触れても」

そりゃ怯えるも何も、初日から割と従順とは言えない態度をしていれば、怯える要素などとうの昔に忘れてしまった。これが妻の本性を出させるための策略なら、成功したと言わざるを得ない。

まさか、そのために未だ手を出さないのでは――

そこで、エリゼの思考は唐突に途切れた。エルンストが、そっと彼女の体を抱きしめたために。

「エ、エルンスト様？」

「やっぱりまだ怖いかな？少し震えている」

「・・・これは武者震いです」

生真面目に答えたら、今度こそ彼が噴き出した。肩を揺らして笑っているのが、密着した体を通じて伝わってくる。

「笑いすぎです」

「くくっ・・・すまない。それにしても、武者震いとは、私の妻は勇ましいな」

反論する前に、唇が塞がれた。彼の唇が触れるのと同時に、寝台の蝋燭の灯りが静かに消えるのを視界の端に捕えながら、リーゼルはゆっくりと目を閉じ、夫の背に腕を回した。

ヴェールはいつの間にか、寝台からすり抜け、床に落ちている。

.....

リーゼルは、この屋敷に来てからというもの、充実した日々を過ごしていた。

アガタも最初の頃はあれこれ世話をしていたのだが、最近では割と放っておいている。リーゼルにこの暮らしは向いていたのか、不思議なほど彼女は生き生きしていた。

どれもこれもが新鮮だった。

がちょうだけでなく、鶏や豚、馬、番犬。生き物たちの息遣いを間近で感じ、彼女は今まで感じたこともない、リアルな感動を覚えていた。

それらに触れながら懸命に働けば、気がつけば陽が落ち一日が終わる。心地よい疲労と、えも言えぬ充実感に、リーゼルの小さな胸は高鳴り、彼女は自分が今、確かに生きているのだと強く実感した。淑女としての勉強も、作法も、ただただわすれられないものとしていた彼女だったが、こういう暮らしは向いていたらしい。

逆にエリゼの方は昼間はずっとこもって本を読んでいたりと、それはここ最近の歴史書であったり、政治に関する物だったり、幅広い。

しかし、そんな生活もじきに終わりだ。リーゼルはエルンストの妻としてここに残り、エリゼはランドシュテーヘンに帰るのだ。

厠のために目を覚ましたリーゼルは、外に出た。今日は冷え込む。吐く息は白く、夜空は月と星で美しく彩られている。

見事な星空だった。

ふと、故郷にいるであろう男の顔を思い出す。彼もまた、今頃この見事な星空を見ているのではないか。

ファラダという名の馬番は、彼女にとって初恋の相手だった。本当言うと、輿入れの前に想いを告げるだけでよかったのだ。彼はきつと驚き、そして微笑んでくれるだろう。それが見られたら満足だったのに。

それなのに、彼は彼女の唇を奪い、烈しく抱きよせて来た。抵抗しなかったのは、彼の体があまりにも熱かったからだ。あまりにも強く、切実に、彼女の名を呼んだからだ。

覚えているのは熱と痛みだけだった。全てが現実感のないまま行われ、気がつけば朝だった。

おそらく、自分はそれほど彼を好きだったわけではない。憧れの領域を出ていなかった。それなのに、今ではこんなにも胸が痛い。あの時の吐息すら、生々しく甦っては、身体が熱くなる。

「ファラダ」

思わず呟くと、その声に反応したように、物陰から誰かが出てきた。

「・・・何だ、がちょう番の娘じゃないか」

そこにいたのは、エルンストの従兄のキュルドだった。赤ら顔で出てきたその男は、足取りもおぼつかない。おそらくかなり酔っているのだろう。ふらつきながらも、彼は不遜な態度のまま、リーゼルに近づいた。

「ふうん」

濁った眼で無遠慮に見られ、思わずむっとすると、彼は唐突に彼女の髪を引っ張った。

「痛い！何するの！」

「・・・なんて口の利き方だ。お前は自分が誰に物を言っているのかわかっていないのか？」

言われて、慌てて自分の立場を思い出した。公爵家にいる間は、父や母、兄たちを除けばリーゼルがどれだけわがママを言おうと、せいぜいが教育係が小言を言うだけで済んだ。

罰を与えられることなどあるわけがない。誰も、そんな権利を持つていないのだから。

しかし、今は違う。彼は、その気になれば彼女をいかようにもできる。なぜなら、今のリーゼルはただのがちょう番に過ぎないのだから。

「まあいい。女は多少生意気な方が面白い。それにしても見事な金髪だな」

「お、お離してください」

震える声で言うも、彼の耳には届いていなかったのか、彼はさらに身体を近づけた。

酒臭い息がリーゼルを襲う。彼の瞳に宿るのは、まぎれもない情欲だった。酒によってもてあました衝動を、たまたま見つけた手頃な侍女で解消しようとしている。

ただ、少しばかりいい家に生まれただけの、つまらない男が。

リーゼルは酷く抵抗した。

恐怖よりも、怒りの方が勝った。公爵令嬢として生きてきた彼女の矜持が、この現状を許さない。彼女自身も知らなかった内に宿る強い誇りが、彼女に勇気と力を与えた。

だがそれは、一つの悲劇を生むことになった。

その晩、ヴェルフ家の館で、一つの命が潰えた。

3 (前書き)

お気に入り、ありがとうございます！

その晩、絹を裂くような女の悲鳴が上がった。

「誰か！キュルド様が！」

屋敷に待機していた兵士たちが駆け付けるとそこに倒れていたのは、一目で貴族だとわかる服装の男だった。

ヴェルフ家の大事な客人の一人である、キュルドが前日に身に着けていたものだった。

悲鳴に飛び起きたヴィルフリートも、すぐに駆けつけた。

闇夜の中、松明の灯りが、石畳を濡らす赤い血を照らしている。

その光景に、何事かとやってきた使用人たちが悲鳴を上げた。

白目を剥いたままピクリとも動かない彼は、どう見ても、既にこ
と切れている。

ヴィルフリートは群がる人々を死体から遠ざけさせた。

これは、今までの仕事から学んだことである。

事件が起きたら、できるだけその場を維持させる。なぜなら、物
言わぬ死体やその周辺の物品は、意外にも多くの事を語っているの
だ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・キルドですね」

エルンストが遺体にかけられた布をめくり、頷いた。

彼は上流貴族の出ではあるが、戦場にだって出たことはある。
無造作に打ち捨てられた死体が腐っていく匂いまで知っている彼
からすれば、この現状はさほど衝撃を受けるものではない。

従兄が死んでいるという事実すらも、彼にダメージを与えなかつ
たらしい。

「キルド様は、あの一族の中でも少々困り者でな」

遺体確認を終えたエルンストがさつさと自室に戻った後、ハイン
リヒはヴィルフリートにそう囁いた。

「放蕩息子ってやつですか」

「そんな感じ。酒癖は悪いわ、女癖は悪いわ、昨日もアガタが言
ってただろう？侍女を手籠めにすることはしょっちゅうだったし、
執務は放りっぱなしだし、やってもいいかげんだから穴があきまく
り。一族の権威を笠に着て好き放題。まあ、おおっぴらには言えな
いけど、ヴェルフ家からしてみたら、厄介事が一つ減ったってこ
だ。万々歳だろうなあ」

身も蓋もない言い分だったが、同時に何ともハインリヒらしい。

キュルドは、間違いなくハインリヒが好まないタイプの人間だ。

「・・・一応ここはよそ様の領地なんですから、そういう発言は慎んでください」

ため息をつきながら、彼は死体に近づいた。

エルンストがキュルドだと確認してしまえば、すぐにも遺体は運ばれるだろう。その前に、一応本当に事故かどうか確認しておきたい。

「ヴィル。少々気になる点が」

「・・・何でお前がここにいる」

いつの間にか横にちょこんと座り、血まみれの死体を熱心に見ている少女に、ヴィルフリートは思わず冷たい声をかけた。

「いえ、気になることがいくつかありまして」

シュネはほら、と遺体に再び顔を向けた。保護者としては、年頃の娘なのだから、こんなことを気にせず、もっと他のことを気にして欲しい。

「小娘の見るような物じゃない」

「ヴィル、この匂いは覚えていませんか？」

保護者の言葉を軽く流しつつ、シュネが尋ねる。この娘は、相手に丁寧な口調で接する割には、我を通すところがある。

「・・・いや」

確かに、シュネの言う通り何かしらの香りは微かに感じるのだが、いかんせんそれよりも血の匂いの方が強かった。

血に混じった何かの匂いを、嗅ぎわかることは彼には出来なかった。

ただわずかに感じ取ったのは、血に紛れて、若干甘さを感じさせる香りがあったことだけだ。

「・・・ヴィル。見てください」

シュネが小声でヴィルフリートに囁いた。

「何だ？」

「この壁」

シュネが指したのは、遺体から少し離れた場所にある壁を指している。言われた瞬間は、何を言われているのかわからなかったが、目を凝らしてようやく気付いた。

「赤い・・・これは、血か？」

茶色になりかけた赤い点がまばらについているのだ。小さいので気付きにくいだが、それはまるで、血しぶきがここにも飛んだかのように見える。

「倒れて床に頭をぶつけたのなら、ここまで血しぶきは届きませ

んよね」

「何それ。じゃあ、ひょっとして誰かが殺った？・・・うわあ、面倒臭いな、おい」

「もう黙っててください、あんたは」

思わず上司を「あんた」呼ばわりしてしまったが、上司はその件に関しては何も言わなかった。既に一度言われているせいかもしれない。

「要するに、殺人かもしれないってことですよ。犯人を見つけないきゃいけません」

「お前は本当に真面目だな。仕事熱心なのは大変結構だけど、よそ様の領地内なんだからでしゃばるな。俺たちはあくまで客人だ。首突っ込む権利すらない立場だぞ」

正論である。シュネとヴィルフリートは思わず顔を見合わせた。

ついいつもの癖で検分めたことをしてしまったが、シュネは勿論、ヴィルフリートにも今回の件に関わる資格はない。

たとえば、それが本当に殺人だったとしてもだ。

だがおそらく、ハインリヒの心情としてはただ面倒臭いというのが本音だろうなど、二人は思ったが、口には出さなかった。

しかし、全くの無関係とも言えない状況であることがわかるのは、しばらく後のことであつた。

夜が明けてからしばらく経った。

事故の可能性が高いと判断されたからか、最初こそ騒いでいた館の者たちも、だいぶ落ち着きを取り戻しており、いつもと変わらない慌ただしい朝を迎えていた。

エルンストもそうだったが、使用人たちも皆、好奇心はあれど、キュルドの死を悼む者はいない。相当に嫌われていたのは確からしい。

そんな中、朝食を終えたヴィルフリートの元へアガタがそつと耳打ちしにきた。

「エルゼの様子がおかしいのです」

彼女が声をひそめるといふことは、おそらくがちょう番をしている、リーゼルのことなのだろう。

さっきの騒ぎですっかり忘れていたが、一番の問題はこちらだったのだ。少なくとも、自分たちにとっては。

「ぐいっした」

「とにかく、宰相様のお部屋へ」

何となく、厄介なことが起こったのだということがわかり、ヴィルフリートは慌てて駆けだした。

ハインリヒにあてがわれた部屋は、かなり広かった。

ただ、あまり調度品の類は見られない。広い部屋の中、簡素な机とソファが置かれているだけの空間は、広い分、余計に殺風景な印象を与えている。

ランドシュテーヘンにあるハインリヒの部屋に比べたら、大きな差がある。彼もそれほど凝った調度品は好まないタイプだったが、それでももう少しは家具や装飾品が置かれていた。

これは、何もハインリヒの部屋だけがこうなのではなく、ユリウスにあてがわれた部屋も同じだ。

館の主があまり贅沢を好まないせいというより、それほどこの地方には余裕がないのだろう。ゲッティンゲンはここ数年、衰退の一端をたどっている。それは、当主の館も例外ではない。

ハインリヒの部屋には、既にユリウスとリーゼルがいた。

公爵家の子息と令嬢の姿に、思わず跪こうとしたが、それを制しながらユリウスが口を開いた。

「エリゼが成功した」

短く、簡潔に述べるその声は、なぜだかかすれていた。ようやく成功したため力が抜けているのだろうかとヴィルフリートは思ったが、何も言わなかった。

「それは。ではお早く交代を。午後には、ご当主のゲオルク様が来られます」

「ああ。だが、リーゼルの様子が」

そう言っただけユリウスは傍らの妹の手を引くが、彼女は顔を強張らせたまま身動きをしない。その顔色は悪く、よく見ると小刻みに震えている。

「お風邪でも？」

以前シユネに調査してもらった風邪に効く薬草茶を再び調査してもらおうかと考えていたが、どうも風邪とは違うらしい。

「リーゼル。いいかげん覚悟を決めろ。エリゼの話ではエルンスト様はお優しい方だそうだ。はっきり言って、お前にはもったいない」

（はっきり言いすぎだ）

どうやら、今回の姫君の一件で怒り心頭なのはハインリヒだけじゃないらしいが、実の兄の台詞と思うと、どうしても姫に同情してしまいそうになる。これが貴族なのだと言われればそれまでだが。

「その、エリゼさんは？」

「今はいない。昨夜の騒ぎでエルンスト様が心配なさったのか、傍を離れないらしい」

血の繋がったキュルドの死に対しては何とも冷たい態度だったエルンストだが、新妻のことは気遣っている。

どうも、エリゼは相当に気に入られらしい。ハインリヒは、ちらりとユリウスを見たが、彼は表情を変えようとせず、ただ傍らの妹の様子を気にかけた。

「リーゼル？一体どうしたんだ。熱もないのに震えて・・・」

ユリウスが、妹の尋常でない様子に怪訝な顔をしたところで、唐突にドアをノックする音が響いた。

リーゼルはビクリと体を強張らせ、ハインリヒは注意深くドアに目を向ける。ユリウスは、妹の頭に素早くスカーフを巻きつけた。

「どなたです」

部屋の主であるハインリヒが声をかけると、すぐに「シュネです」と返ってきたので、ヴィルフリートが慌ててドアを開けた。

「どうした」

「大変です。殺人だとばれました」

「ばれたって何だ、ばれたって。いや、ということは、やはり殺

されてたのか、キュルド様は」

彼が発した「キュルド様」の言葉に、リーゼルの体が更に震えた。そのことに気付いたのは、シュネとハインリヒだけだった。

「ええ？ ばれたの？」

「・・・だからばれたって何ですか」

「お祈りをしていた神父様が、キュルド様の手が、金色の髪を握っているのを見つけたそうです」

キュルドの髪は、ダークブラウンだった。金色の髪とは程遠い。

「それに、使用人たちの話では、夜中に女の悲鳴や、男女が揉める声を聞いたと」

その時だった。再びドアをノックする音が聞こえてきたため、一同は顔を見合わせた。

「はい」

「アガタです。ハインリヒ様、大変です。皆がエリゼを探しております。その・・・」

言いながらアガタが入ってきた。礼を失する振る舞いだが、それほどに急を要する事態が起きたためだろう。この場合のエリゼとは、リーゼルのことに違いない。

「なぜだ」

「キュルド様は金髪を握っていました。そして、昨夜多くの者が彼が女と言いついてるのを聞いたと証言しております。あのように見事な金髪は、使用人の中では一人しかいません」

「リーゼル・・・？」

ユリウスが目を見開いて妹を見たが、リーゼルは目に涙を浮かべて首を振るだけだ。

その時複数の足音が聞こえた。

「失礼する、ハインリヒ殿。これはこれは、ユリウス様も。こちらに、がちょう番の娘が入るのを見たと言つ者がいたもので」

勢いよくドアを開けたのはエルンストだった。

彼はあまり気乗りしない様子で一同を見た後、ゆっくりと、スカーフを頭に巻きつけ、震えている娘に視線を向けた。その目は、どちらかというと同情に近いものが浮かんでいる。

「キュルドは殺された可能性が高い。そして、揉み合う声がした後、その娘が一人歩いているのを見た者がいるのです」

「お待ちください！」

たまらずユリウスが声を上げるが、エルンストは尚も続けた。

「ユリウス様。今回の件で、私たちはランドシュテーヘンを責めることはしないと誓つ。キュルドの悪癖は以前から存じております

し、彼がああなったのは仕方のないことだと認識している。その娘はもう、ヴェルフ家の侍女です。ですから、そこにいる侍女を引き渡していただければ、後は何も言うことはない。・・・個人的には、その娘には同情する」

リーゼルの体がひととき強張った。彼女とて、引き渡されたら最後、どうなるかわかりきっている。

相手は貴族であり、当主の血縁者だ。そんな相手の命を奪ったのだ。いかに手籠めにされかかったからといえど、死罪は免れないだろう。

「お待ちを・・・うつ！」

慌てて立ち上がったユリウスの腕を、ハインリヒが掴んだ。よほど強い力だったのか、ユリウスが思わず顔をしかめ、声を詰まらせる。

上司の様子に、リーゼルを守ろうと立ち上がりかけたヴィルフリートもまた、その場にとどまった。

今ここで、彼女の立場を明かすわけにはいかないのだ。たださえ、今のこの状況はランドシュテール側からしたら圧倒的に不利だ。

もはやヴェルフ家の使用人になった身の上とはいえ、少し前まではランドシュテールにいた娘が、ヴェルフ家の血縁者を手にかけたのだ。

その上、実はその娘こそが本物の花嫁で、処女ではないため謀っていたなどと告げられるわけがない。

エルンストの近習たちが、リーゼルを捕え、引きたてて行く。

「兄が来る前に、解決してよかった」

そう呟いた彼は、ユリウスたちに挨拶をした後、早々に出て行った。

「面倒なことになったな・・・」

ハインリヒはそう言って、本日何度目になるかわからないため息をついた。

陽が昇っても、エリゼは未だまどろんでいた。

昨夜はあまり睡眠をとっていない上、役目を果たしたはずなのに、肝心のリーゼルとの入れ替わりが上手くいかず、結局この寝台で朝を迎える羽目になってしまった。

目を開け、自分の顔をしげしげと眺めているエルンストと目が合った時は心臓が縮みあがった。素顔を見られた以上、すんなりと自分は元の侍女には戻れないだろう。

その彼が近習に呼ばれて部屋を離れてからしばらく経つ。

宰相のハインリヒは、いつものように妙案を打ち出してくれるだろう。これから、自分とリーゼルはどうなるのだろう。

そんなことをつらつら考えていると、エルンストが戻ってきた。何やら渋い顔をしている。

「奇妙な風習だな」

自室に戻るなり、彼はぽつりと呟いた。

「何がでしょうか？」

きょとんと首を傾げ、夫を見上げると、彼はその子供っぽい仕草に軽く微笑んだ。

「先程の娘も、けして顔を見せようとしなかった。スカーフで隠していたな。もう一人いた、ハインリヒ殿が連れて来ていた娘も、フードを被っていたし、未婚の女性は皆あのように顔を隠すのか。アガタは違うから、あれは貴族の娘だけのことか」

「先程の……娘……？」

「がちよう番の娘だ。キュルドを殺したらしい。宰相殿とユリウス様がその件で必死になっておられたようだが、あれも致仕方ないことだろう。彼女の服が破られていたから、キュルドに手籠めにされてそれで……ってところだろうな」と、悪い」

身震いする妻に、エルンストは慌てて口を嚙む。貴族の娘に聞かせる類の話ではなかった。おまけに、がちょう番の娘はランドシュテーヘンにいた頃の使用人のはずだ。

「せっかくランドシュテーヘンからついて来てくれたのに、悪いな」

「いえ……」

背中から抱きしめられたエリゼは、夫の暖かい体温を感じながら、そつと目を伏せた。

[illegible]

「ハインリヒ様。何をお書きになられているのですか？」

「ランドシュテーヘンから、教育係を呼ぶ手紙」

「・・・教育係？何でまた」

「エリゼに、おっと、リーゼル様にしっかり教育をつけさせるために決まってるだろう」

こともなげに言い放ったハインリヒに、ヴィルフリートは目を剥いた。この人は、速攻で本物の姫君を見捨てるつもりなのか。

慌てるヴィルフリートに対して、兄のユリウスは半ば想定していたのか、顔を強張らせたものの、何も言わない。

「それとも、また生贄を一人作りますか？真犯人として、適当な娘を見繕って罪を着せて？この場合、エリゼが適役でしょうが、彼女は既にエルンスト様に顔を見られているでしょうし」

「・・・いや」

そうなのだ。本来、エリゼが首尾よく役目を務めたら、その日の晩のうちに姫とがちょう番の娘は交代するはずだったのだ。そうならなかったのは、昨夜のあの騒ぎによるものである。

「ということは、昨夜エリゼさんは一度は外に出られたのでしょうか」

「そう言っていました。リーゼル様を探して、あの騒ぎに気付き、慌ててお部屋に戻ったと」

シュネの疑問に、アガタが頷く。

「しかし、そうなると姫様は・・・」

言うまでもない。正当防衛とはいえ、貴族を手にかけて庶民の娘の命など、おそらくがちょうより軽い。

現時点で一番権力を持っているエルンストが彼女に対して同情的なのは確かだが、だからと言って見逃すようなことはすまい。だからこそ、彼は顔を曇らせたのだから。

あと数時間で、この地方の領主であり、エルンストの兄でもあるゲオルクがやってくる。おそらく、そこで彼には二つのニュースが届けられるだろう。

一つは弟エルンストの新妻。そしてもう一つは、従兄キュルドの悲劇とその犯人を。

その前に、エルンストは全てを終わらせるつもりらしい。

外が騒がしくなり、シュネとヴィルフリートが思わず窓を開けると、がちょう番の娘が引つ立てられているところだった。

「宰相様、よろしいのですか」

シュネは振り向き、ランドシュテーヘンの宰相に問いかける。彼は何も答えなかったが、シュネは構わず見つめた。答えを待つために。

やがて根負けしたように彼は「仕方ないだろう」と短く言った。

「他にどうすると言ったのだ」

「一つだけ、方法があります」

「方法なんかあるのか」

思わず身を乗り出したのはヴィルフリートだった。ユリウスもまた、目を丸くして顔を上げている。

「真犯人が名乗り上げればいいのです。宰相様も、気付いていらっしゃるんでしょ、リーゼル様はキュルド様を殺していないと」

[illegible]

エリゼは、一人長い廊下を歩いていった。エルンストは先に出ている。先に出て、憐れな罪人の娘に裁きを下そうとしている。

自分の妻になるはずだった、無実の娘に。

思わず唇を噛みしめ立ち止まった。どうすればいいのかわからない。

最初は、初夜だけ我慢して身を投げ出せばいいはずだった。それなのに、自体は思わぬ方向へどんどん進んでしまっていた。

こんな結果など、けして望んだわけではなかったのに。

「エリゼさん」

不意にかけられた自分の名前に、反射的に振り返ったエリゼは、はたと相手が自分の名前を呼んだことに気付き顔を青ざめさせた。今のエリゼは、リーゼルのドレスを着ているのに。

「だ、誰？」

「……宰相様のお付きできた者です。シュネと申します」

そこにいたのは、色あせた地味なフードを目深に被った、小柄な娘。この娘の声を聞くのは初めてだった。出会った当初は老人かとも思っていたが、その声は若くみずみずしい。

「あまりその名前を使わないで。私は今、リーゼルなのだから」

どこで誰が聞き耳を立てていないとも限らない。

しかし、シュネと名乗った娘はそれに答えることなく一歩進み出した。思わず一歩後ずさりし、なぜ自分がひるまなければならぬのかと、自問する。

「何か用かしら。わたくし、急がねばならないの」

「無実のがちよう番の娘が命を落とすところを見るために？」

驚くエリゼを尻目に、シュネはもう一步前に進み出た。その姿からは、なぜか言いようのない威圧感が滲み出ている。こんな、ちっぽけな小娘なのに。

その時、顔を覆っていたフードがめくれ、シュネの漆黒の髪があらわになった。

「あなた・・・」

思ってもいなかったその白く美しい顔に呆然と呟くが、その後続けられた言葉に、彼女は今度こそ本当に言葉を失った。

「キュルド様を殺したのは、あなたですね、エリゼさん」

紅い唇を紡がせながら、シュネは厳かにそう告げた。

「あの晩、役目を果たしたあなたは最初の手はず通り、外に出た。その時リーゼル様がキュルド様に襲われているのを目撃したのではないですか？その時、主を守るためにあなたは手に持っていたポットでキュルド様の頭を殴った」

朝からなくなっていたポットは、前日シュネが用意した物だ。

「なぜ気付いたの？」

「あれは、飲用の水とは別の物でした。あの中には、わずかですがジャスミンの精油を入れていたのです。湯の中に入れていたら、部屋が良い香りに包まれるために」

あの日、あの部屋にシユネは二つのポットを用意していた。一つはハインリヒに頼まれた、媚薬効果のある薬草茶と、催淫効果を期待した室内用の香料を。

「キュルド様の遺体は、わずかにジャスミンの甘い香りがしていました。浴びるほどお酒を飲まれた方が、そんな香りを放つとは思えませんし、高価なジャスミンの香りをあの方に移すことができる方など、ここにはおられないでしょう、あなた以外」

あの日使った精油は、ハインリヒがオランダ商人から買い付けた貴重品なのだ。それゆえ、わずかしが使えなかった。

「凶器は、あのポットですね」

「・・・ええ」

反論できず、諦めたように目を閉じたエリゼは、握っていた拳を震わせた。

「気付いたのはジャスミンの香りがしたからではありません。リ―ゼル様が、何も仰らなかつたからです。あの方は、困ったことがあれば、お兄様のユリウス様が、宰相様に仰つてたはず。それなのにあの方は黙秘を続けていた。あの方が誰かを守ろうとしたのなら、それはあなた以外あり得ません」

「・・・そう」

目を閉じていたエリゼが、自嘲するように小さく笑った。リーゼルは自分を守ろうとしたのかもしれないが、そんな彼女の態度が、自分の罪を知らしめたのだ。

「姫様には、振りまわされてばかり」

そう言いながらも、彼女がリーゼルを恨んでいるようには見えなかった。どこかすつきりしたように微笑む彼女に、そういった負の感情は感じられない。

「宰相様は、このままにしておこうかと考えてらっしゃるようです。あなたがこのままリーゼル様として生きる方が、あの方には都合がいい」

エリゼがこのままエルンストの妻として生きていけば、大いに役立つだろう。権力のあるヴェルフ家から得た情報を、こっそりランドシュテーヘンに流すこともできる。

「宰相様らしい」

しかしそれは危険な賭けだ。だからこそハインリヒは、エリゼに決断を任せたのだ。このまま最後まで周囲を欺く意思があるのか。リーゼルを見殺しにするだけの覚悟はあるのか。一生秘密を抱えて生きて行く決意があるのかどうか。

「姫様を、死なせることはできない」

それは同時に、自分の死に直結する。しかし、エリゼは微笑んだ。寂しげではあったが、上品で、優雅な笑みだった。

それは、高貴な血を引く一国の姫君の如く。

.....

館内で起きた事件だったので、裁判が行われることはなかった。館にある小さな教会で、ごくわずかな人間たちが、今まさにリーゼルを裁こうとしている。

その場に兄のユリウスや、宰相のハインリヒの姿があった。彼らは何も言わなくとも、リーゼルは驚くこともなければ、悲しむこともなく、ごく当然のこととして受け止めていた。

彼らが自分を見捨てるのも、仕方のないことだと理解したからだ。

彼女は、この場になってようやく身分の意味を、貴族の義務を理解し始めていた。

想像していたような尋問や拷問はなく、それどころかリーゼルは顔を隠すことさえ許された。これは、エルンストのおかげだろう。

彼女とて、この一件で自分がどうなるかくらいはわかる。だが。

（死んでしまう、エリゼが。私なんかを守って、ファラダのように）

アガタがこの館に来た時、何気ない風を装って尋ねたことを思い出した。

「ねえアガタ。ここに来る時、どの馬を使ったの？ファラダの馬？」

「いいえ。姫様、ファラダはちょうど姫様がこの国に行かれた日に死にました」

こともなげに告げた侍女の言葉に、リーゼルは酷いショックを受けた。

死んだ？あのファラダが？

「彼は姫様が旅立たれるのを見送った後、首を吊ったのです」

リーゼルが旅立った後。そう、アガタがわずかに強調した。彼女は気付いていたのかもしれない。リーゼルが身を任せた相手が、そのファラダだと。

ファラダは後悔したのだろうか。国を裏切り、自分の想いを遂げたことを。それとも、罪の意識に？いや、もしかしたら、リーゼルを守るためだったのかもしれない。

真相はわからないまま、ただ置いてけぼりにされたリーゼルだけが残された。

しかし、全ての発端は自分の浅慮な行動からだったのだ。そのせいでファラダは死に、罪もないエリゼは純潔を失った揚句、今度は命まで失ってしまう。

その想いがリーゼルに口を閉ざさせた。エリゼならば、きっと自分よりも立派にリーゼルとして生きていける。このまま自分が沈黙

を保ったままいれば処刑されるだろう。ファラダは、自分を待っていてくれているだろうか。

「では、今回の件に関する沙汰は・・・」

エルンストが言いかけたところで、ふいに教会の扉を開ける音がした。

「お待ちください。真犯人は、こちらに」

ヴィルフリートが、貴婦人の手を引いて入ってきたのだ。その貴婦人は上質のドレスを着こみ、顔はヴェールで覆われている。

「リーゼル！」

驚きの声を上げたのは、エルンストだった。

「私の妻に何をしている！」

「この女は、エルンスト様の妻ではありません」

ヴィルフリートはそう言い、隣の女の顔を覆うヴェールを乱暴に取り払った。

現れた顔に驚きの声を上げたのは、ハインリヒだった。こちらは演技である。

「エリゼ・・・！？」

「エリゼ？」

彼の言葉に、エルンストが怪訝な顔を向ける。

「ええ、この女の名はエリゼ。そして、あちらにおられる方こそ、ランドシュテーヘンの姫君リーゼル様！」

ヴィルフリートの声と同時に、ハインリヒがリーゼルの被ったスカーフを取り払った。

「本当だ！リーゼル様だ！」

ハインリヒの言葉に、エルンストは驚き、罪人のはずだった娘の顔を、信じられない思いでまじまじと見た。彼が妻と信じていた女と同じ金髪の娘を。

「この女が先程自白しました。この女はゲッティンゲンに向かう途中、リーゼル様を脅して身分を入れ替え、このことを他言しないよう神に誓わせたのです。キュルド様を殺したのもこの女です」

「嘘だ！」

思わずエルンストが叫んだ。彼にとって、それは認めたくない事実だった。

「本当よ」

それまで黙りこくっていたエリゼが、冷たく告げ、顔を上げた。その顔は笑っていた。酷薄な笑みを浮かべたその顔は、エルンストが見たこともないほど非情なものだった。

「そうよ、全部私がやったの。キュルド様を殺したのは彼にばれたから。リーゼル様は、兄のユリウス様やあなたに害を加えると脅したらすぐさま神に誓ったわよ。本当、馬鹿な人」

刹那、エリゼとリーゼルの瞳がぶつかりあった。

リーゼルは悲しげに、口だけ「なぜ」と動かした。エリゼはそれに答えず、さらに狂気じみた笑い声を上げる。

「ばれてしまつて本当に残念。このまま貴族の奥方として、好き放題できたのに」

「罰あたりの娘が！身の程もわきまえず、何ということを」

僧が思わず叫んだ。その鋭い声にも、彼女はひるむことはない。

「身の程？身分が何だと言うの。そんなものに意味はないと、今この場で証明されたじゃない。あなたたちは揃いも揃って私の正体にも気付かなかったのよ。身分に何の意味があるの？そんなもの、貴族が私たちから全てを奪うことへの言い訳でしかないわ！」

それは、エリゼの心からの言葉だったのだろう。身分が、彼女をこの境遇に追いやったのは、まぎれもない事実だ。

「彼女を捉えよ！」

エルンストの悲痛な声が、小さな教会の中で響き渡った。それは、彼女の罪を確定するものだった。彼はエリゼを助けることはできない。

心情的にはそうしたくとも、それを、彼の立場が許さない。

「ゲオルク様が到着されたそうです」

冷たい地下牢の中で、シュネは閉じ込められたエリゼと向き合っていた。ここに来ることができる者は限られている。

罪人の娘は、明日見ればいいのだ。

「……そう。どんな？」

「……割とハードなのね」

「なぜキュルド様を殺したんです」

シユネはそう問わずにはいられなかった。彼女ならば、たとえリーゼルが襲われている場面を目撃したのだとしても、もっと上手く対処できると思ったのだ。

「だって、ねえ」

エリゼは目を閉じ、昨夜の出来事を思い出していた。そう、あれは、確かに自分らしくないことだった。

前日の晩、体の火照りが多少和らいだところで、エリゼは隣で眠る彼の頬にそっと触れた。

行為の間、彼はずっとエリゼを気遣ってくれていた。

できることなら、ずっとこの腕の中にいたい。そう思った瞬間、慌ててその馬鹿げた考えを打ち消した。この腕は、自分ではなくリーゼルの物だ。

彼は、自分がランドシュテーヘン公爵令嬢リーゼルだからこそ、これほど気遣ってくれたのだから。

そこで彼女は、いいや、とすぐに首を振った。

確かに彼はランドシュテーヘンの公爵令嬢と結婚した。だが今夜

の出来事は、それだけはエリゼだからこそあれほど優しくったのだ
と思いたい。

だって自分と彼は、短い間ではあったが、確かに心を通わせ合っ
たのだ。

（今後、リーゼル様がずっとエルンスト様の妻になっても、今夜
の出来事は、私だけの物だ）

そう思うと、自然と笑みが浮かんた。最初に抱いていた身代わり
であるというみじめさは跡形もなく消えていた。

むしろ誇らしかった。自分はランドシュテーヘンを確かに救った
のだし、一夜限りとはいえ、エルンストに愛された。

だからこそ彼女は立ちあがった。ポットの水を足すという口実で、
この部屋を出る手はずになっていたのを思い出す。

隣の控室にはリーゼルがいるはずだ。早く入れ替わろう。ランド
シュテーヘンに戻る気ではいたが、しばらくはリーゼルの傍で今ま
でのことを教えなくてはいけない。

いや、自分はこれからもリーゼルの侍女として彼女について行く。
う。

エルンストはこの地の領主ではないが、領主である兄を支えて盛
りたてようとしている。リーゼルが彼をきちんと支えられるよう、
微力ながら尽そう。

それが、彼を欺いたせめてもの償いになる。

固い決意と共に廊下に出ると、窓の外から悲鳴が聞こえた。 甲高

い声にはどこか聞き覚えがあった。

嫌な予感がして駆けだすと、リーゼルが男に無理やり組み敷かれていた。あの男は、確かエルンストの従兄のキュルドとかいう男だ。

「何をしているの！」

鋭い声に、キュルドは一瞬動きを止めた。振り向き、その目を大きく見開かせた。

「誰だ・・・？いや・・・」

身に着けていた上質の夜着で誰かわかったのか、彼は気まずそうにエリゼから目を逸らした。エリゼがエルンストの妻という立場である以上、ここでは彼よりエリゼの方が立場が上なのだ。

「エリゼ助けて！」

その時、必死で抵抗していたリーゼルが、ふいに漏らした言葉に、彼の表情が一変した。

「エリゼ・・・？どういうことだ？お前はあの間抜けの妻じゃないのか？ああ、あの宰相側の人間か」

「間抜け・・・？エルンスト様のこと？」

エルンストとキュルドの仲がそれほどよくないことは、エリゼも気付いてはいた。勤勉なエルンストからしてみれば、キュルドの不真面目さは到底気に入らないだろうし、また逆も然りだろう。

だが、彼が何気なく発したその言葉は聞き捨てならなかった。

エルンストはキュルドのように身分を笠に自分たちを傷つけようとはけしてしない。キュルドのように、自分の義務を怠ることもしない。

彼は、己の立場と真剣に向き合い、前を見据えている男だ。いくら酔っているとはいえ、従兄であるからといって、エルンストを、キュルドのような放蕩者が侮辱していいわけがない。

睨みつけるエリゼに、キュルドはふんと鼻で笑って見せた。

「だってそうだろう。やたら出しゃばってるが、できることなか大してないのに。4男なんて、兄たちのおこぼれをもらう立場だつてのに、下手に口出して兄貴の機嫌を損ねたら終わりじゃないか。それを理解していない馬鹿野郎さ」

「あなたに何がわかるの」

「うるさいな、消えろ。たかが小国の田舎貴族風情がそんな口を叩くな」

吐き捨てるように言うと、彼は再び腰が抜けて動けないリーゼルに向き合った。嗜虐的な笑みを浮かべたその姿に、彼女が思わず怯えた声を上げる。

そんな彼女の髪を掴んで再びのしかかろうとしたキュルドだったが、それはできなかった。

エリゼが持っていたポットで、力の限り頭部を殴りつけたからだ。陶器でできたそれはその衝撃で割れ、中に入っていた水を大量に

床にぶちまけたが、エリゼはそれよりも、頭から血を流し、ピクリとも動かないキュルドの方が気になった。

「・・・エリゼ。その方、死んでしまったのではないの？」

長い長い沈黙の後、ぽつりとリーゼルが言った言葉で、エリゼはようやく我に返った。

そうして、彼女はポットの破片を片付け、床の水を拭き、リーゼルと二人でキュルドの遺体を石畳の床まで引きずって、酔って転んだ彼が運悪く頭をぶつけたように、事故を装ったのだ。

「彼はエルンスト様をわかっていなかった。エルンスト様は、自分の身分や立場をわかった上で、それでも自分に何ができるかを考えている方なのに。それなのに、身分の上に胡坐をかいて偉ぶるだけの男が侮辱したのよ」

声を震わせながら、エリゼはきつと顔を上げた。迷いのない瞳だった。きっと、彼女はキュルドを殺したことを、今でも後悔はしていない。

「夫の名誉を守るのは、妻の義務だわ」

「そこまで彼を想っているのなら、あのままでもいいことのできたのに」

彼女の罪を暴いた自分が言うのもどうかと思ったが、シュネにはどうしても理解できなかったのだ。確かにリーゼルを守りたいとエリゼが思ったのは事実だろうが、どうもそれだけじゃない気がした。

「・・・怖かったのよ」

「怖い？」

「だって、あのままエルンスト様の妻になって、私たちに子ができれば、平民の子が領地を治めることになるかもしれない。貴族じゃない人間がそんなことをすれば、神の怒りを買うかもって・・・」

先程、あれほどに身分の馬鹿馬鹿しさを語りつつも、自分はとうとうそれを取り越えることができなかった。

エリゼはそう嘲った。身分という概念の前に、なすすべもないほど無力だったのは、彼女も同じだった。

それ以上何も語らないエリゼに、シュネももう何も言わなかった。

彼女はそのまま歩きだし、地下牢へ続く階段に入ったところで、待っているヴィルフリートとハインリヒの姿を見つけた。

「そういうことですから、宰相様はこれから頑張ってくださいね」

「・・・何を？」

首を傾げるハインリヒに、シュネがわずかに微笑んで見せた。

「何って今日の夕食ですよ」

[illegible]

その次の日、ゲッティンゲンの市内では、公開処刑が行われた。

この時代、罪人の処刑は一種の娯楽だったので、人々は興味深げにその恐るべき刑罰を眺めていた。しかし、罪人の素顔は見ることに叶わなかった。彼女はスカーフでその顔を隠していたから。

ただ、恐れ多くも領主様の弟を謀った娘であるらしい。

ヴィルフリートがスカーフで顔を隠した娘を乱暴に樽に押し込める。あの樽には、尖った釘がいくつも打ち込まれているはずだ。

娘は、まるで人形のようにされるがまま、抵抗することもなく樽の中に押入れられた。

そして、二頭の馬によつて樽が引きずりまわされ、樽からは眞つ赤な血が流れ出た。人々は熱に浮かされたようにそれを眺めていた。

エピローグ

「あなたに、何と詫びればいいのか」

新妻が乙女の身ではないと知り、また、それがキュルドの仕業であると妻の口から告げられた時、エルンストは悲痛な声を上げ、妻をそつと抱きしめた。

「真実を見抜けなかった上に、こんな目に・・・どうか許して欲しい」

「こちらこそ、このような汚れた身で・・・」

リーゼルは、エリゼの犠牲を絶対に無駄にする気はなかった。

一度は死を覚悟した身ではあったが、何の因果かこうして生き残ってしまった。そしてそうなってしまった以上、自分にできることは、ランドシュテーヘンの姫として、エルンストの妻として、その責務を全うするだけだ。

だからこそ、こんな嘘もついた。そして嘘をつくことで生じた夫への罪悪感を、彼女は終生忘れなかった。

それを抱いている以上、彼女は貞淑で賢い妻であり続けた。

そしてエルンストもまた、妻への罪悪感を抱いていた。

彼女がいかに辛酸を舐めてきたか、いかに理不尽な扱いを受けたのかはよくわかっていいる。

自分もまた、彼女を妻として、誠実に向き合うことも決意している。キュルドにされたことは、考えないようにしていた。今まで彼の行いを半ば黙認してきた以上、彼に口を挟む資格はない。

このことは、墓まで持つて行かねばならない秘密である。

だが同時に、それでも彼はあのエリゼという名の少女が忘れられなかった。

確かに彼女が犯した罪は許されないものだった。だが、彼女がなぜあんな罪を犯したのか。

彼女は、もともとゲッティンゲンの人間だった。この事実も、ランドシュテーヘンを責められない要因となっていた。

虐げられてきた者たちの悲痛な声を、エルンストは彼女の口から直に聞いた。あの時の叫びは、それほど切実で、真摯なものだった。

彼女が話した全てが偽りだったとは、到底思えない。ただ裕福な暮らしがしたいだけで、あんなことができると思えないし、彼女は結婚したばかりの時でも、何一つねだることはなかった。

もしかしたら彼女は、自分がリーゼルになり変わることで貴族が平民から搾取するこの地のあり方を変えようと試みたのかもしれない。

「市民や農民が愚直なのは、学ぶ場所がないからです。貴族と同じように学ぶ機会があれば、彼らだってしっかりと物を考えます。・
・彼らと貴族に、何の違いがありましたよう」

「・・・ですから、人々が街を離れるのは当然です。皆生活があり、家族がいるのですから」

本当にその通りだ。

貴族と平民に、何の違いもなかった。入れ替わっていても、自分が気付かなかったように。

彼らだって、自分たちと同じように生きている。同じように考えることができる。

「どうか、許して欲しい」

自分が、心の片隅に彼女の存在を抱いていることを。

その遠慮が、妻へのいたわりとなった。

二人は、互いに相手に言えない秘密を抱え、それこそが、二人を仲睦まじい完璧な夫婦に作りあげた。

リーゼルはその後も貞淑な妻として夫を支え、また、ランドシュ

テーヘンとの繋がりにも一役買った。

侍女と入れ替わっていた経緯は市井にも流れ、彼女の献身さや、神に誓ったことで罪人として罰を受ける時も口に出さなかった敬虔さが、広く人々に愛されることとなった。

だが5年後、流行病に冒された彼女は、あっけなくこの世を去ることになる。

エルンストは、妻の死をことのほか悲しんだ。

4男であるが故に領地を継ぐことはないと思われていたエルンストだったが、兄二人が嗣子をなさないまま世を去ったことで、ゲッティンゲンを含む領地を継ぐこととなる。

その後、数々の功績を残した彼は、初代ハノーファーの選帝侯にまで上りつめ、彼の息子はイギリス王となった。

エリゼのことが終生忘れられなかった彼は、彼女の生まれ故郷であるゲッティンゲンの復興に尽力を注いだ。

そんな彼の遺志は孫に受け継がれ、彼の孫ゲオルク・アウグストはゲッティンゲンに大学を創設した。

彼の名にちなんでゲオルク・アウグスト大学と名付けられたその大学には優秀な人材が集まり、ゲッティンゲンの地は、大学都市として見事復活を遂げる。

その後もゲオルク・アウグスト大学は、後の第2次世界大戦時には、その文化的価値や重要性などが考慮され、爆撃の対象から外されるなど、ゲッティンゲンの土地を守ることにも一役買ったことになった。

今日のゲオルク・アウグスト大学は志さえあれば身分、立場、人種など関係なく受け入れており、日々多くの優秀な若者を世に送り出している。

[illegible]

ランドシュテーヘンの市街にある、小さな居酒屋は今日もにぎわっていた。シュネの友人であるネルケの実家である。

そこに、金髪の新しい給仕係が入ったのは、つい最近のことだ。

「どうですか、彼女は」

開店前の店内に差し入れのケーキを持ってきたシュネは、ネルケにそう尋ねた。

「いいわよ。覚えは早いし、きびきびしているし、接客は丁寧だし。もうちょっと明るいとかいいけどね」

「今は仕方ありません。そのうち慣れたら明るくなると思います」

すよ
「

「そう？それより、今日のお勧め料理はがちょうの肉が入ったパイよ。彼女が捌いてくれたの。ちよつと食べて行かない？」

「おいしそうです、私はこれで」

そう言う、シュネは立ち上がり、入口へ向かった。

その時、ちよつと買いたしから帰って来た娘とぶつかりそうになる。

「すみません」

「いえ、こちらこそ」

二人は少しだけ笑いあい、そのまま頭を下げた。娘がフードをとった。その髪は見事な金髪だったが、なぜか肩の辺りで短く切られていた。

その日の夜、いつもと同じようににぎわいを見せる酒場に、一人の客が入ってきた。

地味な色合いのマントに身を包んでいた彼は、一見旅人のようだが、よく見るとなかなか仕立てのいい服を着ている。

店内の客はそんなことには気付くこともなく、彼に目を向ける者はいなかった。

「いらっしやいませ。今日がちょうのパイがお勧めですよ」

給仕の娘がにこやかに彼を出迎える。

「がちょう、か・・・」

彼はそう呟き、その声に、娘ははっと口元を押さえつけた。

「若様・・・？」

「お忍びだ。そんな風に呼ぶ必要はない。そもそも、もうお前は俺に仕える身ではないのだから・・・エリゼ」

フードをとったユリウスは、そう言つてエリゼに微笑みかけた。

数日前、ゲッティンゲンで罪を犯し処刑されたはずのエリゼに。

・・・
・・・
・・・

ヴィルフリートとシュネがその晩、二人がかりで作りあげたのは、木でできた人形だった。

その人形に、アガタが作った金髪のかつらをかぶせ、服を着せ、足りない部分には布を押しこみ、遠目には何とか娘に見えなくもない代物にできあげると、気付けば夜が明けようとしていた。

遠目にはわからないだろう。それに、顔はフードで隠すことを許されている。

「で？こつちは？」

胃の辺りを押さえつけていたハインリヒが、壺を指さしながら尋ねた。その顔は青白く、どこか不機嫌そうだ。この2日間のがちよう尽くしで、彼の胃は相当のダメージを受けているらしい。

「がちようを捌く時、血抜きした血を全部貰っておきました。それを袋詰めするのです」

「それにしても、またがちようとはね」

ヴィルフリートは何も言わないが、その背中を冷たい汗が流れていた。

この屋敷の料理長が、シュネにわざわざハインリヒの好物を尋ねたことを彼は知っていた。事件解決に貢献した宰相殿のためにぜひとも教えて欲しいと言われたらしい。

解決したのはほとんどシュネだが、シュネが宰相の使用人を通っている以上、それはハインリヒの手柄なのだ。

そのせいかどうかはわからないが、シュネはしれっと「がちようです」と答えた。おかげで、宴のメインディッシュは料理長が精魂込めて作ったがちよう料理だった。

宴ということで料理は自分たちの口にも入ることとなった。その出来は素晴らしかったが、やはりハインリヒにとっては拷問にも等しかったようだ。

そうして得たがちょうの血を詰めた革袋を人形のスカートの中に隠し入れておいたおかげで、刑が執行された時、樽の中から血が滲み出ることとなったのだ。

「今回宰相様は何もされていらっしやらないのですから、がちょうを召し上がるくらいはしてください」

やはりこいつを怒らせてはいけないな。

ハインリヒを苦しめる一連の流れに何一つ口を挟まなかったヴィルフリートは、こっさりそう思った。

「元気だったか」

大衆用のワインを一口飲み、ユリウスは尋ねた。

「はい」

時間のせいかな、客はほとんど帰りまばらだった。残った客も、追加注文をすることなく、残った酒をちびちびやっているのがほとんどだ。

「座れるか？」

ユリウスの言葉に、エリゼは小さく頷いた。この店では、たまに客が美貌の看板娘ネルケに酒や料理を奢ることもある。忙しい時間帯なら断るが、今なら店側も文句を言うことないだろう。

「……このパイはお前が作ったのか？」

「全部ではありません。がちょうは捌きましたけど」

エリゼが告げると、彼は「そうか」と頷き、うやうやしくフォークでパイを崩し始めた。

公爵家の子息である彼が、一般大衆用の居酒屋の料理をさも大事そうに食べる姿を見ながら、エリゼは差し出されたワインを軽く口に含んだ。このワインも、彼の口にはけして合うことはないだろうに。

「新しい生活には慣れたか？」

「はい」

「仕事は辛くないか？」

「いいえ。みなさん、とてもよくしてくれて」

ありきたりな会話が済んでしまうと、ユリウスは困ったように黙り込んだ。これ以上会話が続かない。

話したいことは山ほどあったはずなのに。

顔を見るなり、本当はすまなかったと、心から詫びたい気持ちでいっぱいだった。しかし彼女が、エリゼがそれを許しそうもない。彼女の態度は柔らかく、丁寧だったが、同時に今までにない壁を感じさせた。どこか他人行儀だった。

エリゼは気付いている。ユリウスが謝罪し彼女がそれを許せば、今度は彼が何を望むのか。

そして彼の望みに、彼女は絶対に応えない。

彼女はもう、彼に恋する小娘ではなく、別の男を愛した一人の女性なのだから。

彼女が大切だった。孤独な身の上でもいつも気丈に微笑み、ひたむきな彼女を愛していた。

身分の差がなければ、彼女を妻にすると公言していただろうほどに。

それなのに、もう彼にはそんな思いを抱くことさえ叶わない。そんな権利もない。

恋心を抑え、彼女の想いに気付きつつも気付かないふりを続けていた。揚句は他の男に純潔を捧げるよう頼んだ。

そんなユリウスがエリゼにしてやれることなど何もない。せいぜいが、ハインリヒや彼が連れてきた従者たちと協力して彼女をランドシュテーヘンに送り届けるくらいだった。

それも終えた今、彼にできることは、彼女の前から永久に姿を消すことだけだ。

自分が今後も彼女の前に現れれば、彼女があ の出来事を忘れることはできない。

あの男を、忘れる日は来ない。

だからこそ彼は立ち上がった。多めのコインを置き、そのまま彼女に背を向ける。

「達者でな」

「ユリウス様も・・・お健やかに」

それが、二人が交わした最後の言葉だった。

[illegible]

「ねえシュネ？ゲッティンゲンであつたがちよう番の娘の話を聞かせて！」

久々に宰相の館に呼ばれたと思えば、宰相家の末娘アマーリアに
またしても物語をねだられ、シュネはこっそりため息をついた。
なぜこの少女が自分にこんなにも懐いているのか、皆目見当がつ

かない。

「・・・アマーリア様にお聞かせするようなお話では」

「だって、すごいニュースだってうちに来た商人のおじさんが言ってるの聞いたわよ！お姫様と侍女がいれ替わっちゃってたって本当？」

アマーリアは屈託のない笑みを浮かべ、瞳を輝かせながらシュネを見上げていた。

彼女からしてみれば、そのドラマの舞台にいたシュネならもっと詳しく知っているだろうと踏んだのだろうが、シュネはその裏事情まで知っているのだ。

「お父上にお聞きください」

「あら、だめよ。お父様に訊いたら、シュネに聞きなさいって。シュネなら、きっと上手くお話ししてくれるからって」

がちょうの恨みだろうか。シュネが入れ知恵したとばれないと思っていたのだが。

シュネはため息をついた。結局、彼女は世間が知っているであろう部分だけをかいつまんで話して聞かせる羽目に陥った。

どうせ、真実が語られることを、当事者の誰も望みはしまい。

「・・・そして、がちょう番の娘はもとのお姫様に戻り、王子様

と結婚し、
末永く幸せに暮らしました・・・
E・i・n・H・a・p・p・y・E・n
めでたしめでた

エピソード（後書き）

ゲッティンゲンの市庁舎の前には、がちょう番の娘の像が建てられています。

プロローグ

その日、亜麻畑の近くで発見された死体を見てヴィルフリートは首を傾げた。

死んでいるのは明るい茶色の髪的青年だった。線が細く、農夫にはとても見えない。

端正な顔をしているので、生前はさぞ女受けしたのではないかとは思うが、いかんせん今は顔の半分を割られていると、おびたらしい血のせいでそういった印象は受けない。

その彼の体の匂いを、1番隊の犬がしきりに嗅いでいる。血を舐めないのは、しっかり躰をされているからだ。

「フランメ、よく覚えておけよ」

ヨハンが手綱を引きながら、フランメと呼んだ赤毛の犬の頭を軽く撫でてやった。

警吏隊にはそれぞれの隊に常備何頭か犬が配備されている。

「それにしても・・・」

ヴィルフリートは思わず腕組しながら唸った。この残された半分の顔には見覚えがある。しかも、ごく最近。

「殺されたのは、ダーフィット・アルマー。街の画家です」

（ああ、なるほど・・・）

どこで見かけたのか思い出した。この男は、確か最近ハインリヒが屋敷に招いた画家だった。長男に縁談が来たと言って、肖像画を描かせていたはずだ。

「最初に見つけたのは？」

「猟師のドミニクです。猟に出るところで見つけたと」

「物盗りの犯行ですかね。何と言っても、全て盗まれてますよ。ポケットの中の小銭に、画材やスケッチした絵まで！」

呆れた声を出したのは副隊長のレオだった。

「この格好を見れば大した金目の物なんか期待できるわけがないの
にねえ」

彼の服装は街の住人の中ではごく平均的な仕立ての物だ。取り立てて奪い取るほどのものではない。

（妙だな）

確かに彼は国の宰相に頼まれた仕事をこなしたので今現在それなりに潤っているはずだ。それを犯人が知っていて襲ったにしろ、普通大金を持ち歩くとは思わないだろうに。

「とにかく、誰か彼の家に連絡を。彼に家族は？」

「住民の話では一人暮らしのようです。ですがもしかしたら恋人

くらいはいたかも。今、パウルが様子を見に向かっています」

ヨハンがそう言って背後に視線をちらりと向ける。死体が見つかったということで、物珍しさに大勢が詰めかけているのだ。

彼らは警吏隊が到着するまで、間近で彼を眺めていたのだから趣味がいいとは言えない。

「まあ、最近は公開処刑もないしな。それに、悪いことばかりじゃない。何しろおかげでこの死体の身元がわかったんだから」

レオが群衆を見渡した。

「でも、一昨日もこの近くで女の子が殺された事件がありましたよね。何か関係あるのかな」

新入りのヨハンが不安げに言った。その顔色は良くない。一昨日見た死体の状態を思い出したのだろう。

「あつちは物盗りの可能性は薄そうだったじゃないか。何しろ・・」

「レオ、ヨハン」

隊長ヴィルフリートのだしなめる声に、慌てて二人が黙りこむ。誰が聞き耳を立てているかわからない。無駄口を叩いている場合はなかった。

「隊長！」

その時、殺された画家の家に向かっていたパウルが全速力でこち

らに走ってきた。その顔を見る限り、どうやら厄介な情報を掴んで来たらしい。

「大変です。彼の家の中も、荒らされていました。金も、画材も全て」

どうやら、また面倒なことになったらしい。

ヴィルフリートは大きなため息をついた。

プロローグ（後書き）

プロローグなので短いです。

1 (前書き)

評価、お気に入り、ありがとうございます！

それは、亜麻畑の傍で画家の死体が見つかる4日目のことだった。

ヴィルフリートの家には、小さいながらも庭がある。

彼の同居人であるシュネは、その日早朝から起きて庭に向かっていた。植えておいたローズマリーが花を咲かせるころだからである。

ローズマリーの花は小さく可憐で、いかにも年頃の少女が好みそうだ。また、料理のスパイスに最適であり、育てていても奇異な目は向けられない。

少しきつめの匂いだが、ここ数日ローズマリーをやたら料理に使っているために慣れた。なにしろスープに入れ、肉料理に入れ、パンにまで使ったのだ。

咲いていたローズマリーの薄青い花をバスケットに入れたところで、遠くから声が聞こえた。

「あ！シュヴァルツ駄目だったら！」

慌てる若い声に振り向くと同時に、黒い小さなものが勢いよく飛びこんできた。顔中を湿った何かで撫で回され、やたら興奮した息遣いまで聞こえる。

その勢いでフードがめくれあがり、「あ！」と驚く声がした。その声には、どこか聞き覚えがあった。

「シュネさん、すみません。こら、いいかげん離れるシュヴァルツ」

黒い何かを無理矢理引き剥がしたのか、途端に新鮮な空気に触れた。頬が濡れたせいで、朝の空気が余計に冷たく感じられる。

「……子犬？」

足元には、尻尾をちぎれんばかりに振っている子犬が一匹。どうやら、今の今までへばりついていたのは、この子犬だったらしい。

その黒い子犬を宥めているのは、以前一度庁舎前で会った少年だ。先程の黒い子犬の他に、もう2匹子犬を連れている。

確か、ヴィルフリートウィルフリートの部下だったと記憶している。名前は聞いたかもしれないが、忘れた。

「おはようございます、シュネさん」

向こうは忘れていなかったらしい。とりあえず、無難に挨拶すればいいかとシュネは軽く会釈した。

「おはようございます」

「ヨハンです、1番隊の隊員で、ヴィルフリートさんの補佐を任されています」

「……そうですか」

わざわざ名乗り出てくれた。上司の家族ということで、気を張っているのかもしれない。

犬の散歩も、どうやら補佐の一つなようだ。それはいいが、挨拶も済んだのなら、さっさと散歩に戻ってもよさそうなものを。

「いい天気ですね」

「そうですね」

それなのに、ヨハンはやたらにこにこしながら話しかけてくる。会話に困ることがあれば天気の話をして間を持たせる。そう言ったのは、ハインリヒだったか。

やり手の宰相殿は、あれで人付き合いはあまり得意ではないらしい。

「いつも朝は早いんですか？」

「そういうわけでは・・・」

主がそう有意義にも思えない会話を続けるので退屈したのか、件の子犬がまたしても隙を見てシュネに纏わりつき始めた。

「こらシュバルツ！おかしいな、こいつが他人にこんなに懐くなんて」

黒シュバルツと名付けられた子犬は、確かに全身墨で染めたかのような漆黒だった。顔まで黒いたため、夜になれば闇に溶け込んで、そこにいるのかわからなくなりそうだ。

食べ物の一つでも持つていればそれに惹かれたのだろうと思うところだが、あいにくシュネが持つてるのはローズマリーの花だけだ。犬が好むとは思えない。

「仲間だと思われたかな」

思わず自分の黒髪に手をやり、フードがとれたままだったことを思い出した。慌てて被ると、なぜかヨハンがどこか残念そうに自分を見ている。

「どうかしました？」

「い、いえ。それより、本当珍しいんですよ。こいつ、なかなか人には懐かなくて。狼の血が混じってるせいかな。利口なんですけどね」

警吏隊が所持している犬たちは多少狼の血が混じっていると、ヴイルフリートからも聞いたことがある。

狼と聞くと物騒なイメージだが、普通の犬よりも狼の血が混じっている方があらゆる面で能力も高いらしい。躰さえきちんとできれば忠誠心も強いというのだから、荒事の多い警吏隊には向いていると言えよう。

「まだ子犬だからかな。獵師のドミニクさんがしょっちゅう躰方を教えてくれるんですが、なかなか言うことをきかなくて」

狼犬の躰は難しい。隊員の数人は今現在、長年犬たちを獵に出て、育ててきた獵師の彼に師事しているのだ。向こうもちょうどいい小金稼ぎができるからか、割と協力的であった。

「まあ、彼が育てているのは普通の犬ですけどね。ほら、こいつらと違って耳が垂れている奴」

その犬たちはシユネも見たことがある。猟師のドミニクは、ネルケの家の居酒屋によく獲物を持つてくるのだ。その時、主人を守るように数匹が傍について来ていた。

確かに彼の犬たちは、警吏隊の犬と違って耳の形も違うし、全体的にスマートだ。警吏隊の犬たちはもつとがっしりとしていて、毛も長い。

「それですね・・・」

「何をしている、ヨハン」

尚もヨハンが話を続けようとしたところで、ヴィルフリートが家から出てきた。

「散歩も、子犬にとっては将来への体力作りには欠かせない重要な日課だ」

「は、はい！すみません隊長！」

背筋を伸ばしつつ、ヨハンが頭を下げ、犬たちを引きよせた。あまりにも待たせたからか、不貞腐れて寝そべっていた犬たちが喜んで起き上がる。

「それでは失礼します隊長、シユネさん！さあ、行くぞ、シユバルツ、^黒グラオ、^{灰色}ブラオン！」

「・・・子犬の名前をつけたのはどなたですか」

あまりにも安易なネーミングに思わず尋ねると、返ってきたのは
気まずそうな沈黙だけだった。

「ヴィル・・・？」

「犬の名前など、区別がつけばいいだろう・・・」

珍しく齒切れの悪い言い方をしながら、家長はさつさと奥に引っ
込んでしまった。

・・・
・・・
・・・

その4日後、シュネは友人であるネルケの居酒屋に足を運んでい
た。シュネがネルケの家に来ることは珍しくはない。

居酒屋をやっているネルケから、食材を分けてもらうことが多い
のだ。代わりにシュネはいくつかの香草やケーキなどを持ってくる。

この時間帯は、居酒屋は閑散としている。店は開いていないし、
店主であるネルケの父親は暇を持て余し、近所の隠居のところでチ
ェスに興じているのが常だ。

給仕のエリゼは市場に出かけている。

「あら、シュネ。今日は何が欲しい？悪いけどもうすぐ仕入れが
来るから待っててもらえる？」

「いえ、今日はこれを」

シュネがそう言っただけでバスケットから取り出したのは、大きめの瓶だった。中には透明の液体が入っている。

「あ！もしかしてこれ前に言っただけ……」

「はい、お祖母様に」

ネルケの祖母は森のはずれに一人で暮らしている。最近リウマチと痛風に悩まされていると聞いていたシュネは、それを緩和させる薬を作っていたのだ。

花の咲いたローズマリーをアルコールに数日浸し、後に花を取り除き、濾したものがそれである。血行を良くし、栄養を行きとどかせる作用がある。

「痛いところに塗り込んでください。足りなくなったらまた作ります」

「悪いわね。じゃあ明日にでも行こうかな。ケーキとワインを持って」

そう言っただけで、ネルケは壁にかけている新しい外套に目をやった。華やかな赤い色のそれは、彼女によく似合いそうだ。

「新しい外套ですか」

「そう！ほら、前にヘンゼルのバカに駄目にされたでしょ。あた

しがそう言ったら、おばあさんが作ってくれたの」

そう言って、彼女は上機嫌で赤い外套を身につけた。少々派手だが、ネルケの華やかな外見と、15歳という若さのせいか、あまり嫌みな印象は受けない。

「どう？」

「似合ってます、とても」

シュネの言葉に気をよくしたネルケがますます新しい外套について語り始めた時、店のドアが開いた。

「あら、ドミニクさんこんにちは」

ネルケが愛想の言い笑みを浮かべる。猟師であるドミニクは、この店にとってはお得意様だ。

まだ30になったばかりのドミニクは、寡黙で物静かな男だった。髭に覆われているために、その表情はわかりにくい。

必要以上のことを話さず、いつもは大抵用事をすますとさっさと出て行ってしまう。だが、しつこい客にうんざりすることが多いネルケにとっては、その愛想のなさが、かえってありがたい。

「今日は、山うずらが」

「あら3羽も！これはいろいろ料理しがいがあるわね。エリゼが帰ってきたら二人で決めようかな」

つきつきとネルケが言ったところで、店の給仕係エリゼが戻って

きた。

「エリゼ、今日は山うずらにするけどどうする？」

「揚げ物 シュニツツエルがいいんじゃないかしら。ポリウムがあるし、残りはスープにしたら」

エリゼが控えめにそう提案すると、ネルケは顔を輝かせた。

「いいわね。手間はかからないし人気があるし」

「それより、大変よ。ダーフィットさん、亡くなったんですって」

「は？」

ネルケが首を傾げる。そんな彼女の様子に、エリゼは呆れ声を上げた。

「やだネルケったら忘れたの？何度かお店に来てくれた画家さんよ。あなたのこと、すごく気に入ってくださいってたみたいじゃない。この前なんか絵まで描いていただいたって喜んでいたくせに」

「あ！ああ、あの人ね！うそ、何で亡くなったの！？」

「何でも、殺されたのですって。物騒な話よね」

殺された、の言葉にシュネがわずかに顔を上げた。ネルケの方は大きな茶色い目をぱちぱちさせ、思わず聞き返している。

「殺されたですって？まあ・・・せつかく最近いい給料もらった

から描きたい絵が描けるって言うてたのにね」

「犯人は捕まったのでしょうか」

「どうもまだみたいだわ。市場はこの話でもちきりよ」

「やあね。この前は女の子が一人殺されたって言うし、最近この辺も物騒よね」

「どうやら、しばらくヴィルフリートの帰りは遅くなりそうだ。シユネはやれやれと肩をすくめ、同居人の不運にこっそり同情した。

[illegible]

「そうそう、ダーフィット。あの画家か」

画家が殺された夜、ヴィルフリートは来たくもない上司の家に向いていた。

殺されたダーフィットは、前日にハインリヒの家で、仕上がった絵を届けたのだ。何かヒントになる話でも聞けるかもしれない。

「報酬はきちんと弾んだからな。まあ、文句が全くなかったわけじゃないけど」

「何か問題でも？」

「問題というか、ほら」

そう言つて彼が指さしたのは、件の肖像画である。キャンバスにはハインリヒの長男であるカスパルの絵が描かれている。

「そっくりですね、当然ですが」

ヴィルフリートは思わず嘆息した。まるで彼の息子カスパルがそこにいるかのように、精巧な出来具合だった。

「3割とは言わんがもう少しくらい、色をつけてくれたつていいだろう」

不満げに言うハインリヒは、肖像画を見ながら忌々しそうに呟いた。

彼の言うこともわからなくもない。カスパルは不細工ではないが、父親と同じひよろりとした男だった。

痩せた体は、悪く言えば貧相な印象を与える。血色の悪い青白い肌、頼りなげな細い金髪、神経質そうな口元といい、とても女受けするようには見えない。

こうして見ると、彼は父親に実によく似ている。

悪意があつて描いたのではないから余計に性質が悪い。

「……写実的な絵でありますな」

他に言いようもないため、ヴィルフリートがとりあえずそれだけ言つと、ハインリヒは諦めたようにため息をついた。

「それがこの画家の主義だったらいい。とにかく、ありのまま描こうとするようだ」

肖像画向きではないな、とハインリヒは呟いた。特に、見合い用の肖像画には。

「実際、本人も肖像画を描くことは本意ではなかったらしいな。少し漏らしていたが、本業は風景画のようだ。人物はめったに描かないらしいぞ」

「誰かに恨まれているようでは？」

例えば、実際に肖像画を描かせ、その絵の出来具合に不満を抱いた貴族とか。

「・・・恨む程じゃない。大体、あいつは一人でやる仕事は今回初めてだそうだ。実力はあると聞いたから頼んだんだよ。まあ、実力があることは認めるが・・・」

そう言っただけでハインリヒが再び目を向けた肖像画には、彼とそっくりの若き伯爵が、気難しそうなしかめ面でヴィルフリートを睨んでいた。

「ヴィル、ダーフィットさん殺しの犯人は見つかりそうですか」

「・・・なぜそんなことを訊く」

帰ってくるなり、出てきた言葉がそれとは。13の小娘のものはとも思えない。

というより、帰って来た時くらい、まずは「おかえりなさい」とか「お疲れさまでした」とか、そういった類の言葉を投げられたい。

「いえ、ヴィルたちだけで犯人を見つけられるのかな・・・なんて」

「・・・」

反論したいところだが、以前のゲッティンゲンでの入れ替わり騒動の時も、ヘンゼルとグレーテル事件の時も真犯人はシュネが暴いたわけであり、しゃしゃり出てくるなとも言い難い。

「・・・死体を検分したが、ダーフィットはかなり抵抗したと思われる」

話し始めたヴィルフリートに、シュネは何も言わなかった。あまりいい気はしなかったが、彼は続けた。

「手にいくつか傷があった。彼は普段は大金を持ち歩いたりしないそうだ。その日も朝に亜麻畑の風景をスケッチしようとしていただけらしいから」

ただのスケッチに大金は必要ない。せいぜい帰りに一杯ひっかけるワインの代金があれば事足りるはずだ。

「亜麻……。ちょうど花が咲き始めたところですね」

亜麻は種子からは油、その油からは飼料、茎の繊維はリネンになると、まさに理想的な作物だ。その便利さにかまけて忘れられがちだが、花もまた、清楚で美しい。

亜麻仁油やリネンのために数多く植えられている亜麻畑に一齐に花が咲く見事な光景は、さぞ画家の魂を揺さぶったのだろう。

「実際、報酬で得た金は、工房で保管していたから無事だったらしい」

画家の工房には、師匠と弟子たちとで構成されている。ダーフィットも、弟子の中の一人だったのだ。彼は得た報酬を工房に一度預けていた。

この時代の画家は、それが大家であればあるほど一人ですべての絵を完成させることは稀だった。重要な部分を師匠が描き、残りは弟子たちが仕上げるが多かったのだ。現代の漫画家とアシスタントの関係に近いかもしれない。

ダーフィットは最近めきめき実力をつけ、そろそろ独立を視野に入れ始めた頃だった。そんな中やってきたのが宰相家での肖像画である。

名前にこだわらないハインリヒの要望もあり、ダーフィットは初めて一人で一から取り掛かることになった。

とはいえ、師匠の名を背負って請け負った以上、報酬は全て彼がとれるわけでもなく、一度工房に預けている。

今となつては彼が手にする取り分は1グロッシェンもなくなつたが。

「じゃあ、なぜ彼は抵抗したのでしょうか。画材を守るため？」

「だが、その日はスケッチしかしていなかったらしいからな」

ますます、彼が惜しむ物などありそうもない。

「考えられるのは、彼が描いた絵だ。まあ、将来名を残す画家になるなら、スケッチといえど貴重にはなったかもしれないが」

しかし今盗んだところで、そこから足がつくことは明白である。行きずりにしても、貧しい服装の彼を狙うことは考えにくい。

「妙だろう」

「妙ですね。そういえば、ダーフィットさんはネルケの居酒屋の常連だったようです。ネルケを気に入り、彼女の絵も描いていたそうですよ？」

ネルケは居酒屋の看板娘であり、街一番の器量良しと言われている。まだ15歳ではあるが、そろそろ結婚を視野に入れてもおかしくない年齢でもある。

「痴情のもつれもあり、か・・・？あんなやかましい小娘に？」

嫌そうに顔をしかめながらヴィルフリートが呟いた。

殺人というだけでも厄介なのに、そこに情愛が絡めば、もっと複雑になる可能性は限りなく高い。しかし、人を殺害する理由など、金銭か恋愛が定石だ。

「ヴィル、頑張ってください」

無責任に茶を啜るシュネの言葉が、いやにしらじらしく室内に響いた。

1（後書き）

シュネが作ったのはハンガリーウォーターとほぼ同じものです。

ヴィルフリートは早くもうんざりし始めていた。

何だつてこの小娘は、名前もろくに覚えていない男の話をするのに、これほどまで時間をかけるのか。

「そうそう、ダーフィットさんは最近ずつとうちのお店に来てたのよ。大体このカウンターが多かったわね。あたしの絵を描いてくれたのも、ここだったかな。まあまあいい男だったし、しつこく言い寄ることはなかったけど、あたしの好みとは違ったのよね」

客のいない居酒屋に、ネルケの声が響く。なぜこの娘はこうも甲高い声で喋るのだろう。家族はこの声と共に生活しているのか、自分にはとても耐えられそうもない。

「確かに物静かな方だったわね」

付け合わせのキャベツザワークラウトの漬物用に野菜を切っていたエリゼも頷く。

「誰かと揉めるようなことは？例えば、ネルケさんを巡って、とか」

ヴィルフリートの横でネルケの発言を逐一書き取っていたヨハンが、ふと顔を上げた。

「そうねえ。最近はしつこく言い寄ってくるお客も減ってたから、店内ではなかったわね」

「うーん・・・態度は控えめだったし、懸想したと言うより、むしろファンみたいなものかな」

「どうもそうらしいな」

ヴィルフリートには理解できないが、この娘はこの店の中ではそれなりに人気がある。客の中には彼女が目当てで通う若者もいるし、時には花や菓子など、いかにも少女の好みそうな贈り物を持つてくる者もいただろう。

しかしそれらのほとんどは、女優に向けるものよりほんの少しだけ親しみのこもった憧れだ。隣にいる者が同じことをしても、嫉妬する程じゃない。

「しつこく言い寄っていた客っていたんですか？」

「少し前ならテオドルさんじゃないかな。一時期は本気でうんざりしてたし。まあ、父さんが一喝してくれたおかげでなくなったけどね」

「なるほど・・・一喝したのは父君か。そうなるとダーフィットを恨む可能性は低いな」

やっぱりなと胸の内では付け加えながらヴィルフリートは立ち上がった。

「ちよっと、まだ決まったわけじゃないでしょ。もし、ダーフィ

ツトさんが本気であたしのことを好きで、犯人がこれで邪魔者はいなくなつたとあたしを襲つたらどうするのよ」

「・・・その可能性は低いかと」

「わからないわよ、そんなの」

頬を膨らませて反論したネルケだったが、このすぐ後に彼女の意見が正しいと証明されるとは、彼女自身も思っていなかった。

[illegible]

その日、ヴィルフリートの家にネルゲがやってきたのはまだ朝のことだった。

「あれ？ネルケ」

朝食の準備に取り掛かっていたシユネが首を傾げた。彼女が家に遊びに来ることはしょっちゅうだったが、こんな朝早く来たことはない。

「シュネ・」

ネルケの様子が変わだ。疲れているのか、どこか顔色が悪い。

「どうしたのですか」

招き入れ、ネルケの好きなカモミール茶を出してやっている、
ヴィルフリートも起きてきた。

「最近変なの。やたら視線を感じるし、買い物に出れば付けられる気がするし」

「気のせいじゃないのか？」

「違うわ。だって、昨日はあたしの部屋に誰かが入ったみたい。部屋の中の小物や、お客さんからもらった帽子とかの位置が全部ちよつとずつ変わってたのよ。それなのに、父さんもエリゼも知らないって言うし」

ネルケはそれだけ言うと、すつきりしたのか一口だけカモミール茶を口に運ぶ。お気に入りの香りにほっとしたのか、少しだけ表情が和らいだ。

「あのしつこい客とやらは？確か、テオドルとか言ったか。彼は仕立て屋の息子だったな」

「つけまわしたり、やたら見るだけならそうかもしれないけど、彼にそんな真似ができるとは思えないわ。父さんが怒鳴りつけただけで尻ごみして逃げ出すような男よ」

普段あまり仕立て屋と縁があるわけではないが、シュネもテオドルは知っている。典型的な小心者であり、そんな大胆さは持ち合わせていない気がする。

「何か盗まれたものは？」

「それはなかった・・・と思う。被害はあたしの部屋だけだし。だからこそ気味が悪いのよ・・・」

「警吏隊の方でもできるだけ注意するようにするし、何かあったらいつでも来てくれ。誰かを護衛にやる」

ヴィルフリートがそう言っても、ネルケはどこか胡散臭そうに彼を見た。

「頼りになるの？この前きっぱりと「痴情の線は消えたな」とか、怯えるあたしに「その可能性は低い」だとか適当なこと言ったくせに」

いちいち口真似をするあたり、前回のことを相当根に持っているらしい。

「・・・まだ関連があると決まったわけじゃない」

そもそも、この話だって気のせい、もしくは家人が勝手に入った可能性は捨てきれないと思う。さすがにそれを口にするとう物凄い勢いで反論が来そうだが。

やれやれと、彼は濃いアッシュブロンドの髪を乱暴に掻き毟った。

その後、数日は何事もなく過ぎた。

その間も、警吏隊は画家ダーフィットの周辺を調べたが、出てきたのは数点の絵と日記くらいだ。

「ようやく見つけた。どうも、工房の戸棚の中に紛れ込ませていたらしい」

「そういえば、彼の家も荒らされてたんでしたっけ」

「金目の物はほとんどなかったから、何か別の物が目的だったのか・・・それにしても日記とは珍しいな。字が書けたのか、彼は」

この時代の識字率は低い。普通に暮らすのに字の読み書きはそれほど必要ではないし、ヨハンも字を覚えたのは警吏隊に入ってからだ。

「師匠が教えたそうですよ。独立するなら覚えておいた方がいいだろうと」

「なるほどな。・・・それにしても汚い字だな」

まだ覚え始めたからか、彼の字は拙く、非常に読みづらい。

「今日彼女にで・・・あった。彼女こそ僕がもとむた・・・？あ、『求めた』か、求めたためがみだ。せーばのようなやさしいかお・・・」

段々、読んでて居た堪れない気になってきた。

きわめてプライベートな内容を、しかも誤字だらけのそれを声に

出して人前で読むなど、故人にとっては相当の屈辱ではないだろうか。犯人を挙げるためとはいえ、これは気の毒だ。

「しかし、あのネルケが女神？聖母？」

「・・・まあ美人ですよ、見る分には」

見る分には、ということは、見る以外なら、ヨハンにも異論はあるらしい。

「あまのは・・・な・・・？亜麻の花か。亜麻の花が咲いていた。あさだけ咲くあのはながあれほどウツクシイとは思ってなかった。彼女をあのはただで描きたい。そうだ、スケッチにいこう」

「それ、殺される直前の部分ですか？」

「いや、殺される少し前みたいだ。まだ続いている」

次のページにも、インクの匂いが染みついている。

「おどろくことに彼女があまばだけにいた。声はかけなかった。それより彼女があまりにもきれいで、おもわずスケッチをした。彼女とあまのはなはとてにもあう。この絵がかんせいしたらそれを彼女におくり、けっこんをもうしこもう。・・・ここで終わってるな」

「結婚・・・」

隣で聞いていたレオが息をのむ。

「ネルケ嬢は気付いてなかったにしても、彼の方は相当熱烈だっ

たようですよ。こりややっぱり彼女を狙う男がライバルを殺したって可能性の方が高い」

「ヴィルは腕っ節なら頼りがいはあるのですが」

「やっぱり男の価値は頭よ」

その頃のネルケは、人里離れた森の中にシユネといた。だいぶ気を張っていたが、最近になってようやく不審な視線を感じなくなつたので、気分がいい。

「飽きたのかしら」

「どうでしょう。それより、本当に一人でいいのですか」

「おばあさんの家くらい平気よ。この道誰も知らないし、近いもの」

ここしばらく、あの騒動で足を運んでいなかったが、祖母の家への訪問がずっとできていない。

「あの人スूपくらいしか今作れないから、こまめに行かないと飢え死にしちゃう」

バスケットの中のワインとケーキ、そしてシユネが作ったリウマチの薬を見ながら、ネルケが軽く笑った。

ネルケの祖母は少々変わっている。一人暮らしではあるが、伴侶を失ったからではない。彼女の伴侶は、街で暮らしているのだ。

彼女が一人暮らしを始めたのも、ごく最近、彼女の伴侶が年甲斐もなく若い娘に入れ上げた事に腹を立てたのが発端である。つまりは、家出とそう変わらない。

「いいかげん仲直りすればいいのに。おじいさんの方はもう何度も謝ってるのよ」

「なるほど」

どこの家にもいろいろ問題はあらしい。

「それより、やっぱり私も一緒に行きましようか」

ちようど、薬草を摘みに出ていたところで偶然出会ったが、やはり心配だ。

「いいわよ。せつかく薬草摘んでるのに。それに、すごく近いし」

ネルケの方はあまり心配してないらしい。何しろ、この道を知っている人間はほとんどいないし、そもそも、自分が祖母の家にこうして通っていることも、ごく親しいものしか知らない。

そして、ここ数日は自分の後をつけまわす影がないのだ。

「まあ、早めに帰るようにするわ」

「そうですか。では、いつてらっしゃい」

あまり無理強いするのも迷惑だと思い、シュネは再び薬草摘みに没頭した。

その日はいい天気だった。

久々に感じる解放感も相まって、ネルケの機嫌はすこぶる良い。

日差しは暖かく、穏やかな風がこれまた心地よく、清々しい。

こうしていると、ここ数日のあの騒ぎが嘘のようだ。

ネルケとしては認めるのはしゃくだが、やはりヴィルフリートが言った気のせいというのも、間違っではないなかったのかもしれない。

思わず鼻歌を歌いながら歩きだした時だった。

「やあ、ネルケ」

振り返ると、見覚えのある男がにこにこ笑いながら立っていた。

「・・・テオドールさん」

以前ネルケに言い寄っていた男だった。

この男は苦手だった。仕立て屋の長男であるせいか、やたら気取っていて気に入らない。

しかも、ネルケにしょっちゅう言い寄って来ていた。と思えば、父が一喝した瞬間に尻尾を巻いて逃げ出したのだ。

あの根性のなさには、言い寄られて迷惑していたネルケですら呆れた。

あからさまに顔をしかめたネルケの態度を気にする風でもなく、テオドールはゆっくりと足を前に踏み出した。

「その赤い外套、よく似合っているよ」

「・・・そう」

そっけなく彼女は返した。家族や友人に同じ言葉をかけられた時は自然と笑みを浮かべたはずなのに。

なぜ、同じ言葉をかけたのがこの男というだけでこうも不快なのだろう。

優しく微笑みながら彼は更に歩きだす。

「うん、ネルケには赤が良く似合う。・・・僕のかわいい、赤ずきんちゃん」

ネルケは不快さを隠しもしなかった。

「何か用かしら」

そもそも、なぜ彼がここにいるのだろう。こんな真昼間、仕事をしているはずじゃないのか。こんな森の中に、何の用があるというのだ。

この道は祖母の家に繋がっている小道で、それ以外は特に何も無い。この道を知っているのは巡回する警吏か猟師であるドミニクくらいのものだろうか。

「つれないな、ネルケ。やっと会えたのに」

「あたしは会いたくなんかなかったわ」

彼はネルケの冷たい視線など意にも介さず笑顔のまま近づいてくる。やはりシユネについて来てもらえばよかったと、彼女は後悔した。

いや、たとえシユネがいたとしても、事態はあまり変わらなかっただろう。

そんなことを考えている間も、テオドールはゆっくりとこちらにやってくる。

「何だ、拗ねてたのか。仕方ないな、ネルケは。いつまで経っても子供なんだから」

こういうところが苦手なのだ。憶病で度胸もなくせに、図々しく、人の話を聞かない。いや、自分にとって都合の悪い話を聞こうとせず、聞いても都合のいい解釈しかない。

おまけに、やたら上から目線で説教をする。

ネルケはかねてより断言していたが、彼は自分を好いてなどないのだ。

ネルケは知っている。仕立て屋の彼だが、未だ親の認める腕ではないことを。いや、彼の親は一度として彼を認めておらず、半人前扱いをやめないでいる。それに対するコンプレックスが彼の全てだ。

だからこそ、「誰かを諷める大人な自分」を演出するためにネルケを必要としている。

ネルケでなくてもいいが、たまたま彼女がわがままな娘で、一番諷めるに向いている性格だったからだ。おまけに見栄えもいい。

「ほら、赤いナデシコネルケの花を用意したよ。君、欲しがってただろう?」

「欲しくないわ」

おかしい。いつもの彼なら、はっきりネルケが拒絶の意思を示せば、一応は退散するはずなのに。その後、性懲りもなくすぐにやってくるが、とりあえず自分に向ける悪意に弱い彼は、ネルケが真剣に怒れば一応は引く。

だからこそ、ネルケは今も、彼に出会って不愉快には思っても、恐れは抱いていなかった。

それなのに、今日はそれがない。

彼は変わらず微笑みながら、ゆつくりとネルケに近づいてくる。

「来ないでよ」

「どうしてそんなに怒ってるんだい。せつかく来てあげたのに」

「頼んでないわ」

「嘘だ。嘘をつくのはよくないよ、ネルケ」

彼がさらに前に出る。反射的に後ずさりをし、ネルケは初めて身の危険を感じた。おかしいのはお前だと反論することもできないほどに。

じりじりと近寄って来ていたテオドールの手が、ネルケの腕を掴んだ。嫌だと叫ぶ間もなく引き寄せられ、ネルケは暴れた。だが、男の身はびくともしない。

「やだっ！離して！」

「なんてお転婆だ」

言いながら服を弄られ、ネルケの悲鳴が森に響いた。こんな扱いを受けたのは生まれて初めてだった。居酒屋の酔客ですら、ここまではしない。

無我夢中で暴れていると、バスケットに被せていた布が地面に落ちた。その時、ようやく反撃できそうな武器を持っていたことを思い出す。ガラスの瓶は、思い切り殴ればそれなりにダメージは与えられるそうだ。

テオドールが口づけようと顔を寄せてきた。そこに生じた隙に、ネルケは手にした冷たい感触のそれを振り上げ、力任せに振りおろした。

ガシャン、と派手な音が静かな森に響き渡り、気がつくと目の前の男が自分から離れ、頭を抱えてうずくまっているのが見えた。その額には、一筋の血が流れている。

ネルケを現実に戻してくれたのは、樟脳に似た涼やかな香りだった。ローズマリーの香りだ。ようやく、自分が割れた瓶を持っていることにネルケは気付いた。その割れ口は鋭く、うっすらと血が付いている。

不吉なほど目を惹かずにはおれない鮮やかな赤い血。

思わず悲鳴を上げ、ネルケは駆けだした。テオドールがうめき声をあげながら、ゆっくりと身を起したのを視界の端にとらえながら。

逃げなくては。

逃げないと、あの男に捕まる。捕まったら、本当に身体を奪われるかもしれない。いいや、あんな怪我をさせた以上、殺されてもおかしくはない。

なにしろ、そうしても不思議はないほど、先程の彼の瞳には狂気

が宿っていた。

走りながら、目についたのは屋根の煙突から立ち上る煙だった。

そうだ、祖母の家はすぐそばだ。もう街より祖母の家の方が近い。距離が長ければ男の足に追いつかれても、あそこまでなら。

背後でテオドールの怒声が聞こえた気がし、ネルケは懸命に駆け

[illegible]

「あれ、また出てきたの」

薬草摘みの帰り道、シュネは見知った黒い生き物に声をかけた。

黒
シュヴァルツと名付けられた子犬は、今日は前回ほどシュネに絡むことはないが、どこか落ち着かない様子でシュネの足にじゃれついていた。

しきりに鼻を動かしては、辺りに視線を巡らせている。ふとシュヴァルツが一声吠えた。その声は警戒しているというより、どこかばつが悪そうな響きだ。

「あれ？ シュネさん」

「ヨハンさん」

シュヴァルツの声に出てきたのは、二人の警吏隊員だった。ヨハンと、もう一人の方は、ヨハンより二つ三つ年上らしく、どこか落ち着いた物腰でシュネを眺めている。

「シュヴァルツここにいたのか。すみません、こいつ他の犬を出そうとしたらどさくさにまぎれて逃げ出して・・・」

「どうされたのですか」

「実は、ネルケさんを探してるんですよ。シュネさんはご存知じゃないですか」

「ああ、ネルケならおばあ様の家に行くと。ただ、あの道は私もよく知らなくて・・・」

シュネはネルケの祖母の家に行ったことはない。何となくなら察しが付くが、案内できるのかと問われれば否である。

確かに小さい森ではあるが、それでも森だ。迷ってしまえば大事だ。

ネルケは慣れているから平気で通るが、慣れていない者が入るのは危険なのだ。

「まずいんですよ。殺されたあの画家、ネルケさんになんり入れ込んでたらしくて。それに、彼女にしつこく言い寄っていたテオドル、今日仕事を休みにしてるんですよ。しかも、父親に婚約者を連れて来るって言ってたとか・・・」

「そのテオドルさんは・・・」

家に入るなり、ネルケは叫んだ。震える手で門を下ろし、ようやく息をつく。

入った瞬間薪と干したタマネギと香辛料の匂いに包まれた。この家はいつも独特の匂いを放っている。懐かしく、安心できる匂い。

手に持っていた、というより離すことを忘れていたバスケットをテーブルの上に置き、ネルケは室内を見渡した。

暖炉には火がくべてあり、ぱちぱちと暖かな音を立てている。

火を見ていたら、ようやく心が落ち着いていた。家の中にいれば安心だ。

テオドールが追って来たとしても、奴の細腕でこのドアをこじ開けることは不可能だ。

今日自分が戻らなければ、家族は必ず不審に思う。夕方まで帰らなければ、きっと探しに来てくれるだろう。

シュネにも会っているし、彼女のことで、きっとヴィルフリートや警吏隊を連れて来てくれる。

「おばあさん聞いて、大変なの。変な男に追われてるのよ」

ネルケが大声で叫べど、返事は返ってこなかった。

「おばあさん？寝てるの？」

奥の寝室に声をかけても、祖母からの返事はない。

きつと寝ているのだ。だから聞こえていないに決まってる。もしかしたら、耳が前より少し悪くなっているのかもしれない。

「おばあさん？」

寝室に入ると、盛り上がったベッドが見えた。どうやら、祖母は寝ていたらしい。

「もう、暖炉の火を消さずに寝るなんて・・・あら？」

窓が開いている事に気付いたネルケは慌てて窓に駆けよった。その時、ふとベッドを見ると、祖母は起きており、こちらを見ているのだ。

その顔半分は毛布にもぐっているため見えないが、それが余計に祖母の瞳を大きく見せている。

「起きてたの、おばあさん」

ネルケが声をかけるが、祖母はなぜか返事をすることもなく、ただ目だけを不安そうにさまよわせた。何かを、必死で訴えるように。

「おばあさん、どうしてそんなに大きく目を見開いているの？」

「君をよく見るためだよ」

ふいに、後ろから声がした。窓の外から、祖母のものとは明らかに違う、低い男のそれを。

その時、祖母が必死で動こうとしたせいか、祖母を覆っていた毛布が床に落ちた。

「おばあさん！」

祖母は全身縛りつけられていた。口には布を押し込まれた上で縛られている。その口元は腫れあがり、赤黒く染めている。

明らかに、男の力で殴られた証拠だった。

そんな中、彼女は孫に必死で逃げるよう訴えていたのだ。

「口がこんなに・・・ひどい・・・」

祖母に駆け寄ろうとするも、背後から抱きしめられ、身動きが取れない。

「そうだよ。口が大きくなっちゃったけど、それは君を食べるためさ」

くすくす笑う男の腕に力がこもる。爪がつきたてられ、ネルケは悲鳴を上げようとした。が、恐怖のために声も出ない。やっと出てきたのは、掠れたうめき声だけだった。

彼は祖母のことは眼中にないのか、傍らで必死にもがいている祖母には目もくれない。

「ネルケ酷いよ。僕をあんな瓶で殴るなんて、すごく痛かったよ。でも、ちゃんと謝れば許してあげるよ」

テオドールの血まみれの手がネルケの体を這いまわる。

そのあまりの生理的嫌悪に震えが少しだけ止まった。

恐怖に打ち勝つだけの感情があるとすれば、それは怒りに他ならなかった。

「触らないで！」

腕の中で震えていただけの彼女が急に鋭く叫んだので、彼の動きが一瞬止まった。その隙に身をよじり、彼女は抱きしめてくる腕を振り払い、彼を強く睨みつけた。

しかし、いつもならひるむはずの彼は、ちつともひるむ様子を見せない。

「いい加減怒るよ、ネルケ」

「怒ってるのはこっちよ、勝手なことばかり言つて。さっきから言ってるでしょ。あたしはあんたなんか好きじゃないし、むしろ大嫌いだわ。二度と目の前に現れないで、気持ち悪い」

「ネルケ！」

「気持ち悪い」の言葉で頭に血が上ったのか、テオドールがポケットから取り出したのは鋭く研ぎ澄まされた短剣だった。

その刀身が窓から差し込む光を受けてきらりと輝くのを見て、さすがのネルケも息を呑んだ。

「君が悪いんだよ、ネルケ。この僕がこんなに愛してあげてるのに」

憎悪と狂気に染まったテオドールの目がネルケに注がれる。短剣を握り直し、彼が大きくそれを振りかぶった。

その時だった。

突然黒い影が弾丸のように窓から飛び込み、振り上げたテオドールの腕に噛みついた。

「ぎひいつ！」

どこか間の抜けた悲鳴を上げながら、テオドールの体が大きく逸れる。テオドールの腕にぶら下がっているのが黒い小さな犬なのだとネルケが認識するまで、かなりの時間がかかった。

「ネルケ！」

窓の外から、シュネと警吏隊の少年二人の姿が見えた。ヨハンともう一人の少年があつという間に駆けつけ、窓からすかさず入ってきた。

「このバカ犬が！」

ようやくと、食いついて離さないシュヴァルツを床に叩き落とし、テオドールは、警吏隊の少年を見て狂ったように短剣を振りまわした。

誰かを傷つけることを躊躇するような心の余裕は、完全に消え失せているようだ。

「大人しくしろ！逃げられないぞ」

「うるさい！」

やけくそになったのか、テオドールは辺りを所在なげに見渡し、ベッドにうずくまる老女の姿に目を止めた。

「おばあさん！」

ネルケの悲鳴と同時に、テオドールはネルケの祖母を無理矢理引き寄せ、その細い喉元に短剣を押しあてた。

「無駄なことを！」

「うとうつるさい！いいか、僕は何も悪くない！元はと言えばこの女が悪いんだ！僕がこんなに愛してあげてたのに」

「そこまでネルケを好きなら、彼女のおばあ様に危害を加えたりはなさらないのではないですか」

さかんに吠えたてているシュヴァルツを抑えながら、シュネが語りかけた。

「仕方ないんだ！彼女が悪いんだ。このばあさんを死なせたくなかったら、お前たちみんなここから離れる！ネルケはこっちだ。君と僕はここから逃げ出すんだ」

老女の細い身体を抱えながらテオドールはじりじりと窓に身を寄せる。

「そもそも悪いのは君なんだからな、ネルケ。君が本当は僕を愛してるなんて言うから、僕はこんなにしてあげたのに・・・」

それ以上、彼は何も言わなかった。いや、言えなかった。

なぜなら、撃たれたからだ。

撃ったのはヨハンでも、パウルでもない。

大きな、何かが破裂するような音と共に、彼の動きが、言葉が止まった。そして倒れる彼の背中には、赤い穴が空いており、そこから赤い液体がゆっくりと床に染みを作り始めた。

が、これがどういう状況なのか、一同はなかなか認識できなかった。命を脅かす男が倒れてこと切れる一連の流れが、あまりにも唐突だったので。

茫然と立ちすくむネルケの隣で、シュネが窓の外に目を向けるとそこには銃を構えたままの猟師、ドミニクが立っていた。

「全く、何て悪者だ。大丈夫だったかい、ばあさん」

未だ煙を出す銃を下げ、ドミニクはふうと大きく息をついた。

「まいったな、人を撃っちまった。警吏隊のみなさんよ、俺は縛り首かね？」

「は？・・・い、いえ！この場合、正義はドミニクさんにあります。何と言っても、ネルケさんとこちらのご婦人を助けられたのはドミニクさんですから」

ヨハンが慌てて言うと、パウルもその通りだと頷く。

「とにかく街に戻りましょう。画家のダーフィットさん殺しの犯人はこいつです。それに、ネルケさんとお祖母様まで殺そうとしたやつが。どのみち縛り首は免れなかったわけですし、きちんと報告

しますよ、俺たちが」

パウルはそう言いながら、大きく肩を落とした。

「犯人を死なせちゃった。また副隊長にどやされるな・・・」

「ダーフィット殺しの犯人はテオドル……。彼はネルケを手に入れるために恋敵であるダーフィットを殺し、ネルケに近づいたが、拒絶されたために祖母と共に殺そうとしたのか」

報告書を読みあげるヴィルフリートに、副隊長のレオは小さくため息をついた。何と利己的な事件であることか。犯人が既にこの世にいないため、怒りのやり場もないというに。

今回の被害者の一人ネルケの恐怖は相当のものだったらしく、あの日からあの一家がやっている居酒屋「グリユックグリユック」は閉店したままだった。

が、今日からようやく再開できるようになったらしい。

その間に、長い間家を出ていた彼女の祖母が戻ったとも聞いた。あの事件のショックは、気の強い老女にもかなりのものだったのだろう。

何しろ家で孫を待っていたら、いきなり窓からやってきた侵入者に背後から殴られ、縛り上げられたのだ。

その後は孫が目の前で殺されかけた。精神的にも疲労しきりのはずだ。

「まあそうでしょうな。何しろ彼がナイフを振り上げているところを、ヨハンもパウルも見ていますから」

何にしろ、犯人はもういないのだ。

「猟師のドミニクはなぜあんな場所に？」

「あの一帯は彼の獵場であつたそうです。一人暮らしのばあさんが心配で、たまに様子を見に来てくれていたそうですよ」

そのドミニクは既に帰している。実際彼があの場合でああしてくれなかったら、興奮したテオドールはネルケか、彼女の祖母のどちらかに害をなしていたかもしれない。

ヨハンとパウルでは、彼を説得することもできなかっただろう。

「事件は解決、か……。しかし、ダーフィットが殺される少し前に殺された少女も、テオドールの仕業なんだろうか？あの少女も短刀で殺されていたんだっけな。今となってはわからんな」

「どうでしょうね。……。そういえば、隊長。あの黒い子犬は活躍だったそうですよ。あの犬がヨハンたちをあの小屋に案内し、ネルケ嬢を殺そうとしていたテオドールに噛みついたのだとか。その際少し負傷したそうですが、あれはなかなか見込みがある」

「黒い子犬……」

ヴィルフリートがわずかに目を逸らしたことに、レオは気付かなかった。

「しかし、我らは今回いいとこなしですなあ。ちつとも活躍していない」

「……」

.....

シュネはその日も豚肉を料理していた。

ネルケの父親から、この前の礼にとずいぶん大量にもらったのだ。自分自身は大したことをしていない気がするが、何でもネルケの話では、この前渡した薬の瓶が、かなり役に立ったらしい。

せつかくの申し出なので豚肉はありがたく頂戴し、ローズマリーで臭みをとった豚肉を細かく刻み、煮込んだ後パイ包みにした。昼食としてヴィルフリートの職場に持って行くのである。

シュネが彼の職場に昼食を持って行くことは珍しくない。ヴィルフリートもシュネが職場に来ることをあまりうるさく言わなくなっただからだ。

以前職場に来たことで、彼の同僚は皆シュネの存在を知っているので、取り立てて隠す必要もなくなった。

「こんにちは、ヨハンさん」

「こんにちは、シュネさん。今日も隊長にお昼ですか？隊長は今ちょっと指揮官のところへ行っていますか」

庁舎に入ると、そこにいたヨハンが羨ましそうにシュネの持つ籠に目をやった。彼の昼食は固いライ麦パンと小石のように小さなチーズが一つだけである。

「ええ。あと、こっちはヨハンさんとパウルさんにおすそわけです。ネルケの家からもらった豚肉のパイです」

シユネがそう言つて布に包まれたパイを取り出すと、ヨハンと、近くにいて聞き耳を立てていたパウルの顔がぱつと輝いた。

「本当ですか!？」

「ええ。この前のことをネルケのお父様がとても感謝されてて」

「まあ、活躍したのは俺たちよりシユヴァルツですけど」

パイを頬張りつつ、パウルが頭を掻いた。結局、自分たちはデオドルを押さえることもできなかったのだ。結果的にネルケも、その祖母も助かったからいいようなものの、これであの二人に万が一のことであればどうなったことが。

「そういえば、あの時何だつてシユヴァルツはあの小屋に直行したんでしょうかね」

「考えたら不思議すよね。ま、あいつのことだから食べ物匂いでもしたとか？」

「食べ物・・・」

その時、副隊長のレオが一枚のキャンバスを持って入ってきた。

「何だお前らずいぶんいい物食べてるな。こっちは、鼻もちならない画家のところで混ぜ物ワインすら出されずにいたのに」

ヨハンとパウルが慌てて食べかけのパイを口に押し込んだ。

レオとしては冗談のつもりで言ったただだったが、どうやらこの二人は取られてはたまらないと思っただけらしい。

そこまで食い意地は張っていないと反論したいレオだったが、ここ最近腹周りがたるみ始めているためにあまり説得力はなさそうだ。

「画家？」

「ダーフィットが最後に描いていた絵だよ。画家仲間たちが、哀悼の意を込めて仕上げてくれたらしい。愛しの君に届けてやれとなまったく、警吏を使い走りにしやがって」

「仕方ないっすよ。ダーフィットの日記を強引に取り上げたのは俺たちなんですから」

「そりゃそうだが、問題が一つあってな……」

ふう、と大きくため息をつきながら、レオは絵にかけていた布を取り外した。

何気なく絵に目をやったヨハンとパウルが、揃ってほう、と思わず息をつく。

そこに描かれていたのは一面の亜麻畑だった。薄青く可憐な花で敷き詰められたその花畑、よくよく見ると花は完全に咲ききっていない。

空は夜と朝が溶け合う優しい色で畑を照らしている。

場面は夕方ではなく早朝だ。なぜなら、亜麻が花開くのは朝だけ、

ごく限られた時間だけなのだ。

その亜麻は、今まさに咲き始めようとしているのだ。

花の一つ一つが光を受け、それぞれ微妙に色合いの違う様相を見せている。

画面の右端には散歩の途中らしき三匹の犬が飼い主を守るように囲みながら歩く。

そのうちの一匹が頭上に盛んに吠えたてているのは、山うずらが一羽伸びやかに羽を広げ、遠くにある森に、今まさに飛び立とうとしているからだ。

森には彼らの獲物がたくさんいる。朝目覚めた鳥はそこをを目指すのだろう。

画面中央には若い女性が歩いている。彼女こそ、ダーフィットの「運命の女性」だったのだろう。朝市の帰りなのか、重そうに、だがしっかりと籠を抱えている。

「すごいですね」

普段、絵を見る機会などそうそうないヨハンたちにも、いや、だからこそこの絵の躍動感、豊かな光の明暗、それらを肌で感じられる。その感激はひとしおだった。

「大変です」

それまで大人しく絵を見ていたシユネが突如として立ち上がったので、ヨハンとパウルはぎょっとした。

「どうかしました？」

「すみません。今からネルケの家に。どうか、ヴィルを連れてすぐに来てください。シュネが慌てて呼んでいたとお伝えください」

[illegible]

下準備に入っていたネルケが、突然やってきたシュネに笑顔を向けた。エリゼの姿はない。この時間帯は、彼女が午後の市場に買い物に行く時間だ。

「いけません。彼が来る前に逃げなくては」

「何を言っているのよ？ドミニクさんがいたところで……」

「こんにちは、ドミニクさん。この前はどうも。今日は何が獲れた？」

微笑むネルケだが、彼の手に獲物が一匹もないことで、その表情を怪訝なものに変えた。

今までも、獲物が見つからなかったことは何度かあったが、そういう時は入って来た瞬間短く告げ、すぐ出て行くはずなのに。

不思議なのは彼の犬たちもだ。いつもなら居酒屋を気遣い飼い主のドミニクは、彼らを必ず店の外で待たせている。

なのに、今日は3匹とも主人に従って入り込んでいる。まるで、主人を守るかのように。

「ドミニクさん・・・？」

ネルケの問いかけに応えることなく、彼は後ろ手に扉を閉め、門を下ろした。

なぜかと問うより先にシュネが動き、ネルケの腕を引きよせた。まずかった。この時間帯にドミニクが来ることはわかっていただから、問答無用でネルケを引っ張っていくべきだった。

「ドミニクさん、あなたなんですね、ダーフィットさんを殺したのは」

「なぜわかった」

その問いかけは、シュネの主張を如実に肯定していた。ネルケの顔が恐怖で歪む。

テオドルが何もかもやっていたのだ、その彼がいなくなれば、

もう恐ろしいことは起きないと思っていたのに。

「あなたがここ最近必死で探しているものを見つけたからです。
・殺されたダーフィットさんが描いた亜麻畑の絵を」

シュネの言葉に、いや、強張った主人の体に反応し、一匹の犬がシュネに吠えた。主人が発したシュネへの敵意を察知したのだろう。

これで彼の中でシュネを殺害する決意も固まった。だが今は、少しでも時間を稼ぎたい。

ヴィルフリートは、シュネが慌てていたと聞けば必ず何かあったのだと気付き、駆けつけてくれるはずだ。

「あの絵は朝描かれたものでした。なぜなら、亜麻の花が咲いているのは朝だけです」

昼には閉じてしまうその花。その短い間だけの美しさが余計に画家の心を惹きつけたのだ。

「あなたの猟の時間は朝から昼にかけて。昼までにはこの店に届けないと、その日の料理ができないのだから当然です。それなのに、ダーフィットさんがこの絵をスケッチした時、森から離れた亜麻畑にあなたはいた」

先ほど見た絵には、見覚えのある犬三匹の姿がくつきりと描かれていた。特徴のある耳の垂れた、猟犬が三匹。

「だからどうした」

「ダーフィットさんが殺される数日前、亜麻畑の近くで女性が殺されるという事件がありました。ご存知ないですか」

「さあな」

低い声で答える彼に、怖気づくことなくシユネは続けた。言いながら、顔を覆っていたフードをさっと取る。

現れた漆黒の瞳が、真っ直ぐにドミニクを射抜いた。その視線は、場数を踏んだ猟師である彼をも、一瞬気圧される程の強さがあつた。

「彼女を殺したのはドミニクさん、あなたですね」

ネルケが息を呑む音が聞こえた。直後に起きた画家の殺人事件で忘れられがちだったが、確かに若い女性が殺されていたのだ。

「女性を殺した後、あなたはダーフィットさんがスケッチをしているところを偶然見た。もし自分の姿も描かれていたら、彼の絵が完成されれば、どれほどまづいことになるか、あなたは心配した。実際、あの絵は不自然です。明らかにあなたと、あなたの猟犬があの時間、狩り場とは正反対の場所にいるのだから」

「・・・その娘が殺された日とは限らない」

「あら。私は『女性』とだけ言ったのですよ。事件そのものを知らないはずのドミニクさんが、どうして『娘』さんだとわかったのですか。・・・仰る通り若い娘さんでした。気の毒に、素敵な男性と婚約が決まったばかりだったそうです」

ドミニクがポケットに手を入れる。取り出したのは小ぶりの、だ

がしっかりと刃が磨かれた短刀だった。その輝きも、テオドールの持っていたそれとは比べ物にならない。

何より、刃が持つ禍々しい空気が違った。

それは、人の生き血を吸った刃物しか持ち得ようもない、汚れた呪わしい靈気だった。

「それに、彼女が殺された日は、亜麻の花が咲き始めた日でした。あの絵の亜麻は、咲き始めたものだったのです。ダーフィットさんの絵は、よくも悪くも写実的だった。ありのまま、目に止まった自然の一瞬の美しさを、彼はキャンバスの中に閉じ込めておきたかったのです」

シユネがちらりと視線を逸らす。その先にあるのは、店にかかれた小さなスケッチだった。ネルケの笑顔が描かれた――。

「あの日描いた亜麻畑の絵を、この世から消せばあなたは安心できた。けれど、隙を見て絵を盗もうとしたあなたはダーフィットさんに見つかり、仕方なく殺した。その後も彼の身の回りを調べたけれどあの亜麻畑のスケッチは見つからない。そんな時あなたは、ここでネルケが彼に絵を描いてもらったと話すのを聞いた」

その絵とは、そこにかかっている小さなスケッチに過ぎないのに、彼は気付かなかったのだ。彼が探していた絵など、ネルケは本当に知らないのだということに。

ドミニクに、明確な殺意はなかった。少なくとも、ダーフィットやネルケに対しては。

彼が殺したいほど強烈な感情を抱いたのは、自分の想いを受け入れずに、若く口だけは達者な男の手をとった娘だけだ。

「まさか、テオドールさんが急に変になったのは・・・」

「ええ。彼の差し金です。ネルケの部屋まで侵入しても、絵を見つけれなかったあなたはふと気付いた。この家にないのなら、ネルケがよく行くおばあ様の家にあるのではないかと」

一人暮らしの老女の家に、かわいがっている孫の絵があってもおかしくはない。

「けれど、あの家を知っている者はごくわずか。ダーフィットさんのように万一手にかけなくてはいけなくなつたその時は、犯人に仕立て上げられる人間が必要。テオドールさんは利用されただけです」

テオドールは確かに心の歪んだ男だつた。だが、その背を押したのはドミニクだつた。

ネルケにしつこく言い寄っていたことを知っていたドミニクは、彼に囁いた。

彼女は本心ではお前を愛していると。だからこそ秘密の道を教え、彼女が来る時間を教えたのだ。ネルケからの伝言だと偽つて。

そんなことをしなければ、テオドールはこの先もずっとただの小心者でいられたのに。

「あの時彼におばあ様を殴り、縛る時間はありませんでした。そもそも、彼は最初おばあ様の存在にすら気付かなかつたようでした。目に入っているのはネルケ唯一人だけでしたから」

その時、店内にいた猟犬たちが騒ぎ始めた。と同時に店の外から

騒がしい足音と、犬たちの吠える声が聞こえる。

「くそ！」

ドミニクが手にした短刀を振り上げた。このおめでたい男は、まだシユネとネルケを殺せば自分の罪が明るみに出ないと信じているようだった。

「ヴィル！」

切っ先を向けられたシユネが叫ぶと同時に、居酒屋「グリユックグリユック」のドアが乱暴にこじ開けられた。いや、破壊された。

ネルケが、恐怖とは違った度合いの、だが、切実な悲鳴を上げる。

轟音とともに侵入した男が、シユネに今まさに短刀を振り下ろそうとするドミニクに飛びかかり、殴り飛ばした。遠くでは、猟犬が警吏隊の犬たちと争う音が聞こえる。

「大丈夫か」

気き覚えのある声に、身を伏せ、目を固く瞑っていたシユネはゆっくりと目を開けた。

しかし、彼の声はいつもより少し低い。怒っているのかもしれない。いや、確実に怒っている。

何しろ、警吏隊の到着を待たずに単身殺人鬼の元へ訪れたのだ。

一刻も早くネルケを連れだす必要性があったとはいえ、あまりに

も軽率だった。

叱責を覚悟しつつ顔を上げたシュネが見たものは、表情こそ変わらないものの、どこか嬉しそうな保護者の顔だった。いや、得意げと言つべきか。

「最後に活躍したのは、俺だったな」

「・・・は？」

一瞬、彼の言わんとしていることが理解できなかった。

まさかこの男は、今回何の活躍もないまま事件が収束したことを気にしていたのだろうか。仕事熱心だからか、それともただ単に器が小さいだけなのか・・・。

「はいはい、誠にその通りでございますね」

「何だ、その投げやりな言い方は。というかお前、力もない小娘の癖に危ないことに首を突っ込むなど何度も言っているだろう」

「その台詞、先に言つべきでしたよ」

差し出される大きな手に捕まって立ち上がり、シュネはやれやれと肩をすくめた。

「ドミニクさんが・・・人殺し・・・？男って、狼なのね・・・」

ヨハンに助け起こされながら、ネルケは呆然と呟いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「結局、ドミニクが全ての殺人の犯人だった、と。そうすると判決は・・・」

「縛り首・・・だろうな」

今回の事件の報告書を書き直していたヴィルフリートはそう呟いた。

裁判はもう始まるうとしている。それが済んだら、公開処刑として大勢の前で首を吊るされるのだ。

「そうだ、ヨハン、パウル。お前たちに任せたい仕事がある」

「はい！隊長」

「何なりと！」

ここ最近、ヨハンやパウルなど、若手の警吏隊の姿勢が今までと若干違う。

よほど、先日のヴィルフリートの突入の姿勢に刺激されたのだろう。なにしろ、頼りなげなテオドール一人取り押さえられなかった二人に対し、彼は屈強なドミニクを一撃で昏倒させたのだ。

尊敬と羨望のまなざしを向けられ、ヴィルフリートは次の言葉を出すのに、少々躊躇した。

「・・・ダーフィットの遺作を、彼の「愛しの君」に届けてやってくれ」

「え？」

「お、俺たちがですかあ？」

二人が固まる姿を、ヴィルフリートは目を逸らして直視しなかった。

「あらあ、警吏隊のお二人さん」

ネルケが不機嫌そうに、ヨハンとパウルの顔を睨みつけた。大事な居酒屋のドアを壊されたことを、未だ根に持っているのだ。

ちなみにそのドアを直したのは、もともと大工の息子だったレオである。だが、すきま風が漏れたり、どうも仕上がりはよくない。

「ネルケ。ドアのことは仕方がないわ。あの場で急いで来てくださらなかったら、殺されていたかもしれないのよ」

「ええ、ドミニクさんは確かに殺す気でいました」

エリゼとシュネが同時にかばったことで、ようやくネルケも刺々しい態度を引っ込める。

とはいえ、このすぐ後にもう一回、もっと刺々しい態度になるんだろうなと、ヨハンとパウルは思った。

「実は・・・殺されたダーフィットさんが最後に描いた絵をお届けに上がりました。彼、この絵が完成したら、け、結婚を申し込もうとしていたようで・・・」

「まあ！」

ネルケが思わず涙ぐみ、ハンカチで目頭を押さえる。最近ろくでもない男ばかりだと思っていたが、ロマンと情熱を持ちあわせた紳士だって、やはりこの世にはいたのだ。

「こ、これです！」

ヨハンとパウルが顔を見合わせ、勢いよく掛け布をとった。

「まあ・・・」

現れた見事な絵に、ネルケだけでなく、掃除をしていたエリゼも思わずため息を漏らした。

「素敵な絵・・・」

それは見事な絵だった。控えめながらも、力強く咲く青い花々に、中央に立つ金髪の少女。

そう、中央の女性は金髪なのだ。

「え・・・？」

「か、彼の日記の最後のページにはこう書かれてました！」

やけくそ気味にヨハンが取り出したダーフィットの日記を読みあげる。

「はじめて彼女にあつたときはおどろいた。彼女こそ僕のめがみ。ひかえめでせいそなたたづまい、やさしいえみ。僕のいいひと・
・エリゼ」

「え？私？」

他人事と思つて聞いていたエリゼが、すつとんきような声を上げる。

「ど、どうして？私みたいな地味な娘を・・・」

「・・・」

ヨハンとパウルも、ダーフィットの気持ちは何となくわかるのだ。ネルケにこうして睨まれている今は、特に。

確かにエリゼはネルケに比べ地味かもしれないが、思慮深く、控えめだが芯が強い女性だ。おそらく、画家の鋭い観察眼はそれを見抜いていたのだ。

ネルケの絵を描いたのは、気まぐれか、エリゼの職場の上司である彼女の機嫌をとっておきたかったからなのだろう。

つまり、ネルケはただの人違いで殺されかけたのである。

「お、男つて、男つて・・・」

ぶるぶる震えながら、ネルケは声も嘎れよとばかりに叫んだ。

「本当に、信用ならない!!」

エピソード

「へえ、そんなことがあったのか」

「悪い奴もいるもんだなあ」

その日、宰相の屋敷でシュネとヴィルフリートは宰相の息子三人に囲まれていた。

宰相に定期の報告に来たのだが、生憎とハインリヒは急な執務で領主の城へ赴いている。

そんな中、今現在父親の管理下で政治教育を仕込まれている彼の息子たちに遭遇した。

父親がいない上、イタリアに留学中だった次男が一時帰国したために、三兄弟はのびのびと羽を広げ、二人から市井の今一番の話題を聞きたがっていた。

「そういえば、その『狼』が買っていた猟犬はあれか」

長男カスパルが窓の外に目を向けると、彼らの妹アマーリアが、大きな犬たちと戯れ、はしゃぎ声をあげていた。

猟犬たちはあれで子供好きなのか、気まぐれな子供によく付き合っ
てやっているようだ。

「ええ、狼の」

ここでいう「狼」とは罪人の呼び名である。

それは、先日公開処刑として縛り首になったドミニクに他ならなかった。彼の財産は裁判の結果遺族に渡されることとなり、テオドール名誉は回復された。

ドミニクにも、テオドールにも同じくらいの恨みと恐怖を抱いたネルケだったが、テオドールに関しては、やはり同情すべき点がある。

「連れてくるのは苦勞しましたよ。俺は嫌われていますので」

何しろ、彼らの目の前で、彼らの主人を殴り倒したのだ。その主人がもうこの世にいないことを、彼らは気付いているのだろうか。

「やはり犬はすごいな。忠実だし、人間も見習ってほしいもんだ」

「犬と言えば、黒い子犬が活躍したんだって？赤ずきんのいた小屋まで案内したとか。子犬の時から人助けとはやるなあ」

「いえ、あれは・・・」

シュネがちらりとヴィルフリートを見た。彼は素知らぬ顔をしている。

「実はあの犬、シュヴァルツはローズマリーの匂いが大好きなのです。ちょうど赤ずきんをかぶっていた少女は、ローズマリーで作った薬の瓶を割ってしましまして、その匂いに惹かれてシュヴァルツはあの小屋を見つけたのです」

以前シュネにじゃれついたのも、彼女がローズマリーの花を持っていたからだ。

とはいえ、あの場で真つ先にテオドルに突っ込んで行ったのもシュヴァルツである。犬達が一番に教えられる、「人間」を守るという使命は、子犬の彼にも根付いていたのだろう。

「ローズマリーが好きな犬？変わったるな」

「犬が好みそうなイメージはないがなあ」

「それが、どなたかがローズマリーを使った肉料理をあの子犬にわけていたらしく」

ヴィルフリートは何も言わなかったし、シュネも彼に聞いただしたりはしなかった。だが、原因がばれているということは、当然それをしたのが彼だということもばれているのだろう。

きっかけはシュネが持ってきた昼食だった。たまたまそれを外で食べていたら、犬小屋から抜け出ていた子犬が甘えた声を出して擦り寄ってきた。

一切れやって彼の中では終わりだったのだが、子犬は次の日もやってきてねだった。その次の日も。

その結果、子犬はヴィルフリートに一番懐いた。よほど料理が気に入ったのだろう。

そのせいでローズマリー好きになったシュヴァルツは、最初シュネに会った時も喜んでじゃれついたので。シュネが、大好きなローズマリーの花を持っていたから。

「しかし画家はもったいないことをしたな。将来偉大な画家がラ

ンドシュテーヘンから出たかもしれないのに」

イタリアにいた次男メルヒオルは、そう言ってもう一度兄の肖像画に目を向けた。

兄とよく似た自分を描いてもらおうという気は起こらなかったが、イタリアで見た美女たちの絵なら、ぜひとも描いてもらいたかった。

「しかし兄上、父上に本当にそっくりだな」

「そうなんだよ。これを見合い相手に送るのはいいが、父上の肖像画を間違って送ったと思われたらどうしよう」

「あら、そんなことないですよ」

シュネはそう言って肖像画を指さした。

「決定的な違いが、ここに」

絵の中のカスパルの頭髮の部分は、父とは大きく違う。

その時ヴィルフリートはある気配を察し、ごくりと唾を飲み込んだ。背後からひしひしと感じるこのただならぬ気配。数々の戦いによって研ぎ澄まされた彼だからこそ気付く、生命の鼓動。

それに気づかない三兄弟はシュネの言葉に遠慮なく笑いあう。

ヴィルフリートの、何かを訴えるような視線にも気付かない。それにしても、シュネは普段は口数が少なくせに、こういう時だけ小娘らしい浅はかな言動をしてくれる。

「あつはっは！確かに」

「しかし、油断はできないぞ。父上に似てしまったら、髪も薄くなるかもしれん」

「実はそれ、悩みの種なんだ。やっぱり僕は将来父上のような頭になるんだろうか」

「大体父上は童顔の癖に頭だけは年相応だよな」

三男バルタザルの言葉に、兄たちはうんうんと頷く。実年齢より若く見られがちだが、ハインリヒは今年で38になるのだ。

「いやいや、しかし父上の髪はあれでなかなかしぶといぞ。薄くなつてはいるが、禿げてない」

「そうだが、あの額の広さはなあ・・・」

「確かにな。だが、ここでそんな話するのは利口ではないな。誰が聞いているかわからんぞ」

突如かけられた冷たい声に、三兄弟の笑い声がぴたりと止まった。振り向く勇氣は、彼らにはない。

「ち、ちちうえ・・・？」

「陰口は叩いても、聞かれないようにしないと。本人に聞かれてしまうなんて、初歩的なミスだ。これは鍛え直す必要があるだろうだ」

ヴィルフリートとシュネは、ゆつくりと一歩後ずさる。続けて、もう一歩。

廊下に出たところで、聞こえてきた悲鳴を、二人は聞かなかったふりをした。

[illegible]

「ねえシュネ。狼は赤ずきを食べてしまったの」

宰相家の末娘アマリアの耳にも、あの「赤ずきん事件」の話を片鱗は入っていたらしい。

アマーリアは好奇心に目をきらきらさせながら、シュネを見上げて
いる。

今や彼女の忠犬となつた獵犬たちは、暖炉のぬくもりに包まれながら、彼女に交互に耳を搔いてもらい、目を細めている。

ヴィルフリートには敵意を剥きだしていた彼らだが、シュネに対しては思っているのではないらしい。

「いいえ。間一髪のところで助けられました。その後狼は罰を受け死んでしまったのです」

「そうなんだ、よかったわ。ねえ、どうして赤ずきは狼に狙われたの？」

「・・・狼のずる賢さを見抜けなかったからです」

どうも、どこまで聞かせていいものかわからない。

とはいえ、適当に話したらこの少女が納得しないことをよく知っているシュネは、かいつまんで聞かせてやった。

「狼はおばあさんと赤ずきんを食べてしまおうと計画しましたが、強い人が助けてくれたので、赤ずきんとおばあさんは助け出され、みんな幸せに暮らしました・・・めでたしめでたしEinHappyEnd」

ブローグ

その日は、今年最初の雪が降った、身も凍るように冷たい日だった。

「失敗だったな」

男が思わず呟くと、唇から白い息が煙のように立ち上り、彼は今の独り言を後悔した。

これ以上喋るとなけなしの体温が無駄に奪われてしまう。今の彼には、それすらも惜しまれる。

鈍色の空からは、純白の粉雪が軽やかに、だが確かに舞落ちていく。

可憐で控えめ、だが、確実に彼の体温を奪う雪。体温が奪われれば、じりじりと体力も奪われる。ただでさえ体力は限界なのに。

食糧はなく、体力も残り少ない現状である以上、このままでは凍死は免れまい。

疲労困憊している身としては、歩みを止めてどこかで休みたいが、歩みを止めてしまえば、おそらくもう動けなくなるだろう。

（さすがに駄目か）

ようやく小さな街が見えてきたはいいが、文無しの身では宿も取れない。第一自分の今の格好では、野盗か何かと勘違いされそうだ。

この街は先の大戦の最中、盗賊まがいの傭兵たちからさんざん荒らされてきた。よそ者の戦士に対していい顔はしないだろう。

実際はよそ者ではないのだが、ここを離れて10年経っている。その間多くの者たちが街を離れただろうし、ほとんどよそ者と言ってもいい。

せめて教会に行けば。

マリアは信心深く、教会にも足繁く通っていた。未亡人であった彼女が世間から後ろ指さされずに済んだのは、その敬虔な姿勢があったからこそだ。

あそこの神父ならば自分を覚えているはずだ。

そう思った瞬間、足から力が抜けた。気力だけで動くことも、とうとうできなくなっただけらしい。

（あと少しだというのに・・・）

頼りない足に意識を向けた瞬間、身体がぐらついた。視界がぼやけ、自分がどこで何をしているのかの認識すら危ぶまれた。

彼の頭の中にあるのは、ただひたすら眠りたいという思いだけだった。

薄れゆく意識の中、彼が最後に目にしたのは、黒檀のように長い髪を風に舞わせた、雪のように白く、美しい少女だった。

「お目覚めですか」

普段血の気の多い男たちに囲まれた職場では、ついぞ聞くことのない、少女の甘やかな声。

それでも身体が冷えていないのは、かけられていた毛布のおかげかもしれない。

懷に忍ばせている短剣もさりげなくチェックしたが、やはり失われている。

かもしれない。

彼は用心深くいつでも立ち上げられるよう身構えながら視界が戻るのを待った。

だんだんと視界が明瞭になると、長い黒髪と白い肌の少女がそこにいるのが見えた。その唇は、血のように赤い。紅でも差しているように見えるが、少女の纏う衣服はみすばらしい。そんな金があればもう少しましな装いになるだろう。

おまけに、少女はまだ見たところ11か12そこらだ。

それにしても美しい少女だ、と彼は思った。こんな子供に対する感想としては不適當だとは思ったが。

かわいらしいという形容が浮かばなかったのは、この少女の老成した態度のせいだろう。

自分より遥かに身体の大きな、素性も知らない男を前にして物怖じせず、彼女は湯気の立つ皿を彼の前に差し出した。

スープだった。中に入っているのはインゲン豆らしい。簡素だが、男にとっては久々の食事だ。香りづけに入れているのか、シヨウガの香りが食欲をそそる。

有り難くスープを啜っていると、彼女は見慣れない小瓶と包帯を取り出した。

「食事が終わったら、包帯を変えますね」

「は？」

「それ、刀傷ですね」

少女がそう言って、彼のわき腹を指さした。今の今まで気付かなかったが、そこは手当をされていた。おそらくは自分が気を失っている間のことだろう。

この街へ向かう途中、運悪く山賊に遭遇した。何とか撃退したものの、負わされた傷は、思いのほか深かったようだ。

戦闘の最中に持っていた食料と路銀の入った袋を落としたのは、何より痛手だった。

（あれさえなければ、もっとすんなりこの街に来れたんだがな）

包帯をはずすと、わき腹に何か、匂いからして何らかの薬草が塗られていることに気付いた。おまけに、傷口は丹念に洗った形跡まである。

「ヨモギです。止血のためですよ。そっちのコンフリーは打ち身用」

彼の訝しげな視線に気付いたのか、少女がやんわりとハツカの香りのする薬草茶クローイターデーを差し出しながら言った。

「どうぞ。温まりますし、よく眠れます」

包帯を取り替える手つきといい、薬草といい、ずいぶん慣れたものだ。医者か薬剤師の娘か何かだろうか。それにしただって、12やそこらの娘がこれほどてきぱきと出来るものなのだろうか。

娘を観察しながら、男はようやくここがどこなのか疑問を抱いた。

そもそも、自分は教会を目指していたはずだ。

「ここは・・・」

「私の家です。・・・納屋ですけど」

「納屋？」

「覚えていませんか。あなたはうちの前で倒れていらしたんです。怪我はしてるし身体は冷えてるし、割と危ない状態だったんですよ」

何となく覚えている。

むしろ、今思えばよくぞ町まで辿りつけたものだと思う。最後はほとんど気力で動いていたのだ。

「ああ、確かに危なかったな。君は命の恩人だ、礼を言う。・・・名前は何？いや、まずは俺が名乗るべきか。俺はヴィルフリート・ヴィルト。ここから離れたランドシュテーヘンという国の警吏隊に務めている」

「戦士様ですか」

少女はそう言って、二人から離れた壁にかけてある剣に目をやった。その横には短剣もある。

あれは、ヴィルフリートが愛用している両手剣だ。ツヴァイヘンダー彼女の華奢な体では、あれを運ぶのはさぞ骨を折ったことだろう。

「すみません、手当をするのに邪魔だったので」

ヴィルフリートの視線に気付いた少女が彼に頭を下げる。

手当に邪魔だったのは確かだろうが、それ以前に危険を取り除いたのは明白だ。今の謝罪はそれに対するものだったのだろう。

無理もない。近くで山賊に襲われたということは、あの山賊どもはこの近くを拠点にしているのだ。

そんな物騒な情勢で、いくら死にかけとはいえ剣を持った素性の知れない男など、危険極まりない。

むしろ、よくぞ助けてくれたものだ。

「・・・いや。それよりも、助けてもらった礼を言いたい」

「シュネです」

雪のように白い肌の少女はそう名乗った。黒曜石のような黒い瞳を、彼に真っ直ぐ向けたまま。

こうしてその日、シュネとヴィルフリートは出会った。後に家族となる二人の邂逅だった。

しかしこの時は、シュネもヴィルフリートも、まさか自分たちがこの後、何とも奇妙な家族関係を作ることになるとは、夢にも思っていなかった。

プロローグ（後書き）

主人公二人の出会い編。

1 (前書き)

お気に入り登録ありがとうございます！

鏡よ鏡、この世で一番美しいのは誰？

それは、母がよく口にする冗談だった。機嫌がいいと彼女は、鏡の前で茶目つ気たつぷりに芝居がかった口調でそう言う。

「それはお前だよ、エファ」

そうして、父が必ず後ろから母を抱きしめる。

うちにある鏡はただの中流家庭が持つにはいささか上等な代物だった。おそらく、母のために父が買ったのだろう。

事実、彼女は美しかった。貴族として生まれていれば、さぞ政略結婚の道具とされていたことだろうが、幸いなことに彼女はごく普通の家庭に生まれた。

「鑑よ鏡、この世で一番美しいのは誰？」

今日も母は鏡に向かいそう呟く。もう1年も続いている、お決まりの儀式。

「それはお前だよ、エファ」

返ってきた低い声に、彼女の小さな笑い声が聞こえてきた。

その日の朝、腫れた頬をおさえながら、シユネは火を起こしていた。

昨夜は失敗だった。例の儀式の最中に部屋に入ったのがまずかった。安眠効果のあるタイム茶を運ぶためとはいえ、入って来た瞬間体も吹っ飛ぶほど頬を張られた。

母がシユネをぶつ時、彼女は大抵は顔を狙う。彼女は、娘の顔が事のほか嫌いなのだ。

シユネの朝は早い。まず起きたら火を起こし、朝食の支度をする。そうして出来た朝食を両親の部屋へ運ぶ。母は大抵不機嫌なので、できるだけ迅速に。

台所の掃除が終わったところで、両親の部屋に器を回収に行く。大体半分ほど残っているが、何も言わない。

その残り物はシユネが食べる。

食事が終われば家の掃除だ。もともと裕福だったシユネの家は広い。それなのに使用人が一人もいないので、掃除は全てシユネがしなくてはいけない。

掃除が終わると、今度は昼食を作る。

今日は寒いからスープにはシヨウガを入れよう。

そんなことを考えていたら、ふと納屋の前に人が倒れているのが見えた。

大柄な男だった。腰には大きな剣を差している。体格といい、傭兵かもしれない。この街は傭兵にあまりいい思いを抱いていないため、このまま放っておいたら、誰も助けない可能性が高い。

「もし」

とりあえず声をかけてみようと思つたところで、わき腹の傷に気がついた。

刀傷だろうか、出血している。しかも、一部はもう既に乾いているというのに、まだ新しい血が、石の床を赤く染めていた。血が止まらないままなのだ。

シユネは慌てて彼の大きな体を引きずり、とりあえず納屋に入れた。

家に入れて母に見つかるど大事だ。よそ者、しかも男を家に入れたなどわかれば、おそらく殺される。男ではなく、シユネが。

とりあえず用心のために腰の剣を少し離れた壁にかけ、シユネは彼の濃いアッシュブロンドの髪から雪を払い、上着を取り払った。

出血のためか、顔色は悪く、体温もだいぶ低い。

部屋から引つ張り出した毛布を彼にかけ、彼女はまじまじと彼を見た。

顔はその人の持つ歴史だ。顔を見ると、その人物がどんな生き方

をして来たのかわかる。

そう豪語したのは、父だった気がする。優秀な医師だった彼だが、その言葉に信憑性があるかはシュネにはわからなかった。

苦しげに歪む顔はなかなか整っており、どこことなく気品が感じられる。少なくとも人を欺きながら生きてきたようには見えない。たった12年しか生きていない自分の観察眼が当てになるかどうかは置いておいて。

20代後半といったところか。

眠る彼の身体はがっしりとしていて、丈夫そうだ。手に触れると、不自然なたこがいくつかできている。手にしっくりとなじんでいるこのたこは、かなり前からの物だ。

戦いを生業としてきた者であることが窺える。

この時代ならそれも珍しくない。三十年戦争が終わったのは去年だ。この辺りも、それなりに戦火にさらされてきたのだ。

ちなみに、その時多くの負傷者を救った父は、この街の名士となり、多くの感謝と尊敬の念を集めた。そのおかげで今こうして生活できるわけだが。

彼のうめき声に、シュネは顔を上げた。今は考え事をしている場合ではない。彼を助けるか否か。問題はそれである。

この男が山賊の類でないと言い切れない。

一番安全なのは、このまま彼を元にいた場所に戻し、気付かなか

ったふりをするのである。

よそ者、しかも傭兵と思われる男を助ける義理はないし、彼は刀傷をこしらえた上に血まみれで、どう見ても一戦交えてきた直後である。

死にかけてもいるが、同時に人を殺しているかもしれない。

取り上げた剣の柄についていた血が、彼の物だけとは限らないのだ。

もし彼が山賊なら、自分だけでなく家族をも危険にさらす羽目になる。

それなのに、気がつけばシュネは戸棚からヨモギの葉を取り出していた。湯を沸かし、アルコールも取り出す。

まずは消毒をしなければいけない。

傷が浅いといいのだが。

父の仕事を手伝ったことはあったために薬草の知識はある程度あったが、縫合はさすがに無理だ。

.....

シュネの心配に反して、ヴィルフリートの傷は縫合する必要性に

は至らなかった。

「すごいな。この傷薬は。しかしいいのか、こんなに効く薬なら高価なのでは」

彼が心配しているのは、自分が無一文であるという事実だろう。ここに向かう途中、野盗に襲われ、戦う間に落としたか盗まれたかしたらしい。

「大丈夫です。全てうちの庭で育てているものですから」

ここマンハイムはドイツでもかなり気候のいい土地であり、作物も比較的育てやすい。それでも冬は身も凍るような寒さではあるが。

「そうなのか」

「ええ。父は医者、母は薬剤師だったのでうちにはよくある薬草です」

「なるほど、それでか。おかげでもうじき歩くことができそうだ」

もともと丈夫なのか、食事と休養をとるだけで、目に見えて顔色も良くなっている。

彼が言う通り、じきに歩くこともできるようになるだろう。回復が早いのは、薬草だけでなく彼の体力の要因の一つだ。

「それにしても、なぜランドシュテールの方がここまで」

ランドシュテールヘンから気軽に来れる距離ではない。ましてやこんな寒い時期に。

「母親が・・・亡くなったらしくて」

「お母様が？」

「血は繋がっていないが、育ててくれた人だ」

彼の言い方は、どこか含みがあるように感じられた。嫌悪と思慕。相反する想いがそこには含まれているようにシュネには思えた。

言い方はどこか投げやりで、義理できたと言わんばかりだが、それでもこの真冬に、そう治安がいい状況でもないこの地に身一つでやって来ているのだ。

「ヴィルフリートさん、その方のお名前は？」

「・・・マリア。マリア・ヴィルツ」

「良い名前ですね」

「よくある名前だ。君の名前の方が珍しくていい」

それ以上喋る気はないのか、彼はグレーの目を閉じた。シュネも、それ以上何かを聞きだそうとはしなかった。

というより、こんなに話したのは久しぶりだった。

考えてみたら不思議だった。自分はそう口数の多い方ではない。

そして目の前の彼も、饒舌な男とは到底思えない。

それなのに、なぜ詮索するようなことまで訊いてしまったのだろう。彼の目的も、母親の名前も、シュネにとっては重要なことでは

ころか、生々しい手形すら残っていた。
打たれたのは、一目瞭然だ。

「・・・どうした、その頬」

彼女は入ってくるときわずかにヴィルフリートから顔を逸らしていたので、おそらく指摘されなくなかったのだろう。だが、尋ねずにはいらなかった。

彼女がこうなった原因が自分にあるのなら、早々に立ち去らなくてはならない。

「いえ、ヴィルフリートさんのせいではありません。いつものことなのです」

「いつものこと・・・」

子供に手を上げる親は珍しくないが、この少女が毎日折檻を受ける失態を犯しているとはとても思えない。となると、考えられるのは一つだ。

「誰か大人に」

「必要ありません。大したことではありませんし、母は心が病んでいるのです」

きっぱりとした口調でヴィルフリートの言葉を遮ったシユネは、乳鉢にヨモギの葉を入れすりつぶした。

ヨモギの独特の匂いが鼻孔をくすぐる。ミントの清涼感や、花の甘い香りとは違う、どこか野暮ったさも感じられるこの匂いが、ヴィルフリートは嫌いではなかった。

「大したことないのです」

彼が黙っていると、シユネはもう一度念を押すように告げた。表情こそ変わらないが、彼女なりに心配になっているらしい。

その時彼は気付いた。

この少女また、自分と同じ笑わない人間なのだと。

むかしむかし、一人の女の子がいました。

女の子は貧しく、それを憐れに思った聖母マリアは女の子を引き取ります。

彼女は成長すると、それはそれは美しい女性に成長しました。

そんなある日、彼女はマリア様の言いつけを破って、けして覗いてはいけない部屋を覗いてしまいました。

マリア様は彼女に罪の告白を促しましたが、彼女は頑として認めません。

そうして、彼女はとうとう下界に落とされてしまいました。

そんな彼女を、偶然通りかかった王様が見初め、城に連れて帰ります。

彼女は王様の子を産みますが、マリアが現れ再度彼女に尋ねました。

「あなたは言いつけを破りましたね」

それでもなお、頑なに嘘をつく彼女に、聖母はとうとう子供を連れ去ってしまいました。

彼女は嘘をついたせいで、愛しいわが子を失ったのです。

.....

「それ、聞いたことがあるな」

傷の当てをしながらシュネが語った物語は、ヴィルフリートにはどこか聞き覚えのあるものだった。

「退屈ではないですか」

発端は、新しい包帯と食事を持ってきたシュネの何気ない言葉だった。

傷が快方に向かえば、一日中寝ていることもできなくなる。実は退屈極まりない状況ではあったが、世話になっている身でそんなことを言いだすわけにはいかない。

「本をお貸ししたいところですが、生憎うちには医学書か薬学書しかないもので」

「そうなのか。じゃあ君も毎日退屈だな」

「いいえ。読書してますから」

「・・・」

考えてみれば、この治療は全て目の前の少女によってなされたものだった。しかし、この年で医学書を読むとは。

そうして、ヴィルフリートの気を紛らわせるためにシユネが語った物語は、ヴィルフリートにとって懐かしい人物を思い起こさせた。

マンハイムの街の教会にいたあの司祭。名前を、確かモーリッツと言っていたはずだ。

なかなかの優男で、若い頃はかなり多くの女性から慕われていたという話を聞いたことがある。プロテスタント信者は妻帯を許されているはずなのに、彼はそういった浮いた話が一つもなかった。

マリアの訃報を知らせた手紙にはマンハイムの教会の封蝋が施されていた。マリアはあの教会によく通っていたし、あの司祭が手紙を出したのかもしれない。

彼は、マリア一人置いて家を出たヴィルフリートを責めているのかもしれない。

（結局、あのままマリアと話すことはなかったな）

養母マリアの優しい顔を思い浮かべようとしたが、思い出すまで少々時間がかかったことに、彼は苦笑した。

もしかしたら、忘れようとしていたのかもしれない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

ヴィルフリートが産まれたのは、マンハイムにある大きな屋敷だった。記憶にはないが。

覚えていないのは、物心がついたところには既にその屋敷はなかったからだ。代わりにあったのは小さな家だった。教会の傍にある、小さな家。

マンハイムは兵士たちの攻撃対象であつたから、そこから逃れるためだったと後で聞いた。

そこでヴィルフリートは MARIA と、その息子ヴィルヘルムと3人で生きてきた。

彼を産んだ母親はマグダレーナという名の貴族の娘だった。彼女のことは、おぼろげながら覚えている。子供ながらに美しい人だと思っていた。

ブロンドの髪は、ヴィルフリエートの暗色のそれとは違い、明るく輝いていた。

貴族の常なのか、彼女はあまり息子に関心があるようには見えなかった。母に優しく抱きあげられた記憶はない。代わりにあるのは、養母 MARIA の柔らかない笑みである。

「本当に、お父上によく似てらっしゃる」

ヴィルフリートが長じるにつれ、MARIA はそう言って笑った。

彼女は母の一つ下で、よく働く、丈夫な女だった。母が嫁ぐ前から、母の傍にいた専属侍女であつたらしい。

そのため、父であるクリスティアンのこともよく知っていた。

「クリスティアン様は立派な將軍でしたよ。お若いのに1万5千もの軍を率いて選帝侯のために勇ましく戦ったのです」

ヴィルフリートが生まれた時代は三十年戦争初期であった。皇帝によるプロテスタント弾圧から始まるこの戦争は、熾烈を極めるものであった。

そんな中、プロテスタント諸侯連合の中心だったプファルツ選帝侯フリードリヒ5世が、ボヘミア王に就き対抗した。

フリードリヒ5世の下、クリスティアンは何度も戦に出ては雄々しく戦い、フリードリヒ5世の身を何度も守り抜いた。

しかし1622年、フリードリヒ5世はその地位を奪われ、ネーデルラントへ亡命せざるを得なかった。

度重なる戦いの後、苦渋の思いで撤退することとなったクリスティアンは、ヴィルフリートが存在はかろうじて知っていたらしいが、とうとう顔を見ることはなかった。

なぜなら、彼はヴィルフリートが4歳の時あっさりこの世を去ったからだ。あれほど戦場を駆け抜けた人間が、戦で死ななかったのは幸運なのか、それとも不幸なのか。

そんな彼の妻マグダレーナは体が弱く、いつもベッドに横たわる姿は儚げだった。夫の死と、慣れない貧しい暮らしは彼女の体をより一層苛ませた。

そうして、夫から贈られた金の指輪を残し、ヴィルフリートが7歳の時彼女は逝った。

マグダレーナの死後、ヴィルフリエートの母親代わりを務めたのは

マリアだった。いや、マグダレーナが死ぬ前から、マリアは彼にとつては母親だった。

彼女は、ヴィルヘルムの母親ではあったが、ヴィルフリートもヴィルヘルムも、わけ隔てなく慈しみ、心から愛した。

優しく、時には厳しく、この激動の時代の中二人の息子を育てた彼女は、ヴィルフリートにとって、実の母以上の存在だった。

「もう少しの辛抱です。この戦争が終われば、フリードリヒ様はまた選帝侯に返り咲くはずです。あの方はクリスティアン様の忠義をきちんと覚えているはず。その時が来れば、お迎えが来るでしょう」

彼が幼い頃から、マリアは何度もそう言い聞かせていた。彼女曰く、戦乱の最中というのと、父の死、主君の不在などから今はこんな生活に甘んじているが、戦争が終わればヴィルフリアートの地位は復活するらしい。

「いつそうなってもおかしくないように、しっかり貴族としての矜持は持っていてくださいよ」

そうして、ヴィルフリートはマリアの手で貴族たる教育を受けた。もともとマグダレーナの専属侍女だった彼女は、貴族が身につけるべき教養や作法を熟知していたのだ。

尤も、戦争が10年以上続き、もはやいつ終わるのか目処も立たなくなった頃には、ヴィルフリートの方は都合のいい夢をあてにはしていなかったが。

「何です、そのお顔は」

近所の子供たちと派手な喧嘩をして帰ってきたヴィルフリートに、
マリアが眦を決して問いかけた。

ひっかき傷や青あざをこしらえた彼の顔は歪んでいた。涙を堪えているためだった。

「喧嘩ですって？ 一体なぜ」

「だってあいつら、ヴィルヘルムの体が弱いからって苛めてたんだ。それに、マリアのことも未亡人だってバカにしてた」

「その程度で喧嘩なんかされたのですか。腹が立つことがあったとして、すぐにそれを顔に出しては相手に侮られます。ましてやそんなつまらないことでいちいち感情を動かさないでくださいませ。貴族が戦うのは、名誉を守るためや主君を守る時だけです」

自分や自分の子を「つまらないこと」と一蹴するマリアも、彼女の主張も、ヴィルフリートには理解しがたかった。ただわかったのは、自分は貴族になどなりたくないということだけだった。

「そんなの、まるで別の人種みたいだ」

「そうです。人種が違うのです。高貴な血なのだから当然でしょう」

一抹の寂しさを感じて呟いた彼の言葉に、マリアは神妙に頷いてみせた。

ヴィルフリートが14になった時、街の傭兵として働きに出た。
父が残したという両手剣ツヴァイヘンダーを携え、野盗や流れてきた他国の傭兵たちから街、ひいては家族を守るために。

そこにいた剣士から剣を習い、彼はそこでめきめきと実力をつけていった。

そんなある日、野盗たちに街が襲われる事件が起きた。

人数も少なく、統制された集団出なかったことが幸いだっただけ。それほど苦労することもなく彼らを撃退したが、その時、ヴィルフリートは生まれて初めて人を斬った。

勿論相手を殺す気で彼は剣を振ったのだ。夢中だった。それが彼の仕事であるし、相手は自分たちから財産も命も簡単に奪おうとする盗賊だ。殺さなくては自分が殺されることも、十分承知していた。だが、血だまりの中弱々しく断末魔の声を上げるその男の姿に、ヴィルフリートは身体の震えを止めることができなかった。

斬った瞬間の手応え、そのいやな感触が手にはまだしっかりと残っている。むせるような血の匂いと共に。

そして、戦いの後ふと気付いた。

自分が斬った相手は、自分とそう変わらない少年だったことに。

呆然と家路につき、家族の顔を見た瞬間、14歳のヴィルフリートは泣きだした。

ヴィルヘルムはそんな兄を心配したが、マリアの方は冷淡だった。

「悲しいからといって、泣いてはいけません。こんなことくらい、こちらは何とも思っていないのだと、相手に思わせるのです。戦場では、それが脅威となりましょう」

「俺には全くわからない」

戦う日々の中、彼はふと、一人呟いた。

「兄さん、そんなに辛いのなら・・・」

ヴィルヘルムは彼を兄と呼ぶ。敬語を使い、彼が貴族だと知られるのは、時勢からしてあまりよくない。周りは貴族に虐げられた者たちばかりなのだから。

マリアも家でこそ敬語を使うが、外ではヴィルフリートをも自分の子として扱った。それが、彼には存外心地の良いものだったが、家に帰ると、彼女は手のひらを返したように態度を変えた。

「いや、剣を振るうのは嫌いじゃないんだ。人を殺すのも、仕方がないことだってわかってる。ただ・・・」

相手は盗賊といえども人間だ。自分と同じ人間だ。生きるために奪い、血を流す彼らは、自分と何一つ違わない。

「母さんの言うことはあまり気にしない方がいいですよ。あの人は、ただ兄さんが心配なだけです」

「わかってるよ」

「母さんは、本当に兄さんが心配なんですよ。兄さんのことを実の息子のように思ってるんですから。あの人は、たぶん僕より兄さんの方が大事なんだと思います」

冗談混じりにそう言うヴィルヘルムに、ヴィルフリートはぎよつとして弟を見た。微笑んではいるが、弟の瞳に映るのは、寂寥感と、ヴィルフリートの知らない何かだった。

「何を言っている。そんなことあるわけがないだろう」

「……冗談です。すみません、兄さん。僕の体が丈夫なら」

ヴィルヘルムは生まれつき体が弱く、寝込みがちだった。マリアも糸紡ぎなどで内職仕事はあったものの、戦乱の世でその収入では、家族を養うにはとても足りない。

「気にするな。お前は俺と違って賢いじゃないか。この前もモーリッツ司祭の手伝いをしたって。お前、案外聖職者とか向いてるのかもな」

「実は僕もそうなりたいなと思ってるんですよ」

ヴィルヘルムは持っていた聖書に目を落とした。貰い物であるそれは、破れてところどころほつれていた。

父は熱心なプロテストタント信者だったと聞くが、ヴィルフリートはいまいち信仰に没頭できなかった。神のためではなく、生きるために人を殺す自分が、神にすぐることはしらじらしく映ったのかもしれない。

その後も、戦争は更に激化した。ヴィルフリートは変わらず剣を振るい、その腕はますます冴え、それと同時に、見知らぬ人間を斬る回数も増えた。

生き残る者もいれば、そうでない者もいる。それを決めるのは、彼ではない。

実力があまりに違えば、相手はヴィルフリートの脅しの一撃で逃げることもある。

なまじ中途半端に力があるせいで、無謀に飛びかかり返り討ちせざるを得ない時もある。

いざ剣を交えば、勝敗を決するのは実力であっても、命の行方を決めるのは運であることが多かった。

物言わぬ軀を見ながら、この世に運命というものがあるとすれば、これもその類なのだろうと思うことにした。

そうして、剣を振るうたび、彼から表情が消えた。

感情が消えたのではない。それは豊かに彼の中に残っていた。ただ表情だけが、どこかに落としたかのように、彼から消え失せていた。

.....

1648年、泥沼だった戦争がようやく終結に至った。

フリードリヒ5世は既に鬼籍に入っていたが、彼の名誉と地位は回復し、息子のカール1世がプファルツ選帝侯として、領地に戻ってきた。

父の恩人であるクリスティアンの存在を忘れていなかった彼は、早速「クリスティアンの息子」を呼び寄せるために迎えを寄こした。

その日、家には MARIA とヴィルヘルムしかいなかった。

「して、ご子息のお名前は？」

使いの近習は、にこやかに MARIA に話しかけた。彼は息子の名前を知らなかったのだ。

「実はですね」

少々気まずそうに彼は MARIA に告げた。

「かつてクリスティアン殿が受け取った子息誕生を伝える手紙が、おそらく雨か何かのせいだったでしょう、名前の部分がインクが滲んで判別不可能でした。かろうじて ヴィル Wil までは読めたのですが・・・」

その日、ヴィルフリートは近隣の土地に商いに赴く商人たちを護衛するために街を離れていた。

戦争が終わるのはいいが、そうになると、彼のように剣で生きて来た人間は職にあぶれる。

今回は何とか稼ぐことができたが、そのうちどこか他の土地で何か仕事を探すべきかもしれない。

そんなことを考えながら街に戻ると、近所の青年に出くわした。

「よお、ヴィルフリートじゃないか」

人懐っこい笑みを浮かべたその青年は、ヴィルフリートに笑いかけた。

「お前の家のヴィルヘルム、すごいな」

「は？」

「何だまだ聞いてないのか？何でも、どこかのお貴族様の息子だったんだろう？さっき立派な馬車が来て、ヴィルヘルム連れて行つたみたいだったぞ。いいよなあ」

ヴィルフリートには、彼の言葉の意味がわからなかった。

戦争が終わり、マリアの言う通り父の功績を覚えていた選帝侯が迎えを寄こした。

それはいい。今更貴族の地位にそれほど魅力を感じていたわけではないが、それでも、明日の心配はしなくてもよくなる。

そうすれば、マリアとヴィルヘルムにも、平穏な暮らしがさせてやれると思っていた。

家に戻ると、母マリアは何も声をかけなかった。

彼女はいつものようにヴィルフリートの顔を見ることはしない。彼が家に戻ると、真っ先に目を見て迎えた言葉が、今日はない。

「ヴィルヘルムは・・・」

ヴィルフリートの言葉に、彼女の体が強張る。その態度が、先程聞いた話が真実だと如実に物語っていた。

「なるほど」

腹は立たなかった。もともと地位は期待していたわけでもなかったから。

何度も迎えが来ると主張していたマリアの言葉も、信じていなかったくらいだ。

彼女は、自分も息子もヴィルフリートも分け隔てなく愛情を注いでいた。

だが、やはり愛情の分量には、多少の差異があった。そう、ほんのわずかに。

それに、貴族であれば、彼の病も治るかもしれない。それに対して、自分は一人でも稼いで生きていくことができる。

だから、マリアの嘘は正しい。

しかしそれからすぐ、ヴィルフリートは家を出た。

今までの稼ぎはわずかな分を除いて、全て家に置いて来た。ヴィヘルムが貴族となれば、マリアにもいくばくか援助が行くだろうとは思っていたが、それでも。

彼が家から持ち出したのは、剣一つだけだった。

「いい剣だな」

あてもなく旅に出て一か月ほど経った頃、頭上から突然気安く声をかけられた。

それは、馬車の中にいる男からの物だった。

馬車の装飾からして貴族であることは一目瞭然だったから、その気安さに驚いた。そもそも、こんな田舎の農道に、貴族の馬車が通りかかるのも珍しい。

不思議なことに、馬車の御者台には、用足しにでも出ているのか御者がいない。供の者もないので、お忍びかもしれないが、どこか様子がおかしかった。

「・・・以前功績によって賜ったものです」

嘘だったが、あらぬ疑いを掛けられても厄介であるためそう答えると、彼は軽く笑った。

「いや、盗んだものと思ってるわけじゃないぞ。ずいぶん使いこんでいるようだからすぐわかる。それに、お前もなかなか強そうだ」

否定も肯定もせず、だが、剣の柄をいつでも掴めるよう意識しながら、ヴィルフリートはさりげなく頭上の貴族を観察した。

ひよろりとした細い身体と頼りなげな金髪、青白い顔はみるからに貧相だが、蒼い瞳は好奇心いっぱい彼を見ている。少なくとも、敵意があるようには見えなかった。

だが、気になることがあった。彼からは血の匂いがする。ヴィルフリートにはすっかりなじみのある、錆びた鉄のような、血の匂いが。

「実は少々困っているな」

場所の中の彼が取り出したのは、長い筒のような物だった。それが遠くの物も見える望遠鏡という物と知るのは、だいぶ経ってからだ。

「はあ」

「実は、ここからそう遠くない場所で、俺の命を狙う奴らがいるというか、向かっている」

「は？」

あまりにものんきな言い方だったために、把握するのが遅れた。

「さつきも襲われて、御者と護衛が斬られた。何とか撃退したと思ったら、実は仲間を連れてきたみたいで」

「なんでそんなにのんきなんですか」

良く見ると馬車の中では既に意識を失っているのか二人の男が眠っていた。

「いや、俺だって騒いで解決するなら騒ぐけどさ。まあ、これも運命かと思つてたら、強そうな男が来るじゃないか。賭けてみようかなと思つて」

「運命、ですか」

何となく懐かしいフレーズのような気がする。そう、生きるも死ぬも、その一言で片づけていた時期が、彼にもあった。

「人数は5人か。銃を持っていないのは運が良かったな」

「ずいぶんのんきですね。連中の狙いがあなたなら、俺には関係のないことですから、ここから逃げると思わないのですか」

ヴィルフリートならば、ここから逃げ出すことは簡単だ。それは、この彼にだってよくわかつているだろうに、彼はにやりと笑っただけだった。

「だから賭けつて言っただろう。それなら俺が死ぬだけだ。だが、もしお前があいつらを撃退すれば、お前も悪いようにはしないぞ。割のいい仕事を世話するくらいの甲斐性はあるんでね」

怒声と足音が聞こえてきた。確かに相手は5名。確かに銃を持っている気配はない。

ため息をつきつつ、ヴィルフリートは腰の剣を抜いた。

男がこの国の宰相で、ハインリヒという名であるとヴィルフリートが知るのは、その少し先の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6186y/>

白雪娘

2012年1月14日17時55分発行